
ガラスの靴を脱ぎ捨てて

雪月花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの靴を脱ぎ捨てて

【Nコード】

N0713N

【作者名】

雪月花

【あらすじ】

大規模劇場での公演を終えた私は、その舞台から忽然と消え失せた。ここはどこ？ 執拗に私を追う奴らは誰なの？ ただ一つの救いは、金色に輝く犬との出会だった。

愛情深く忠実なゴールデンレトリバー犬、ソアレとの絆。大人びた女子高生女優と異世界の王子、お互いに強く求め合いながらも、すれ違う二人。果たして、彼らを待ち受けるものとは……。

シリ阿斯 ハートウォーミング（今この辺り） 悲劇 ？？ な展
開となっていくます。

登場人物

マリーイ 高原茉莉絵 たかはら まりえ (十六)

肩までのオレンジイエロー系の明るいブラウンの髪。身長百六十五センチほっそりした体型。三歳から声楽、舞踊、クラシックバレエを習い始め、ソシアル、ラテンなどダンス全般も。小学五年生(十一)で女優を目標に定める。十四歳の時交通事故に遭う。十六歳で大舞台に主演。

【異世界 ソルフェーニユ王国】

ユリジェス ソルフェーニユ(二十三)

ソルフェーニユ王国第二王子。紫紺の瞳。背中までの銀髪を、無造作に後ろでひとつに結んでいる。実は女嫌い。あまり感情を表に出さない。

ラキ ファツォアーコ(十六)

ユリジェス殿下の小姓。ファツォアーコ一族の直系。栗色のフワフワした髪に、くつきりとした緑の瞳。ほっそりした体型。明るく前向きな性格。

マイオス ランカート（二十三）

紅い瞳、スッキリした焦げ茶色の短髪。がっしりした体型に日焼けした肌。生真面目な性格。犬が大好き。

マルセリーノ ラウル（二十二）

若草色のウェーブしたゴージャス髪。グリーンの瞳は垂れ目。泣きボクロと声がセクシーな女タラシ。

ケペシュ クロフォード（三十五）

明るいブルーの瞳、後ろに撫でつけた赤毛。穏やかで温かな人柄が、マーリイの担任教師によく似ている。

エリオット サライエ（十七）

サラサラストレートのおかつぱ頭。金混じりの茶髪。同じ色の瞳。純朴少年。熱くなりやすい。

フェルミナン侯爵

赤の騎士団団長を引退後、顧問となる。ユリジェスたちの剣術の師匠。第二の祖父のように尊敬する人。ソルフェーニユ王国を愛する、

厳しいがおちゃめで、面倒見の良いお爺ちゃん。

ニコラス（四十九）

フェルミナン侯爵の部下。柔和な笑みでフェルミナン侯爵の世話をしている。背が高く痩せている。

レイチェル（十七）

紫がかったピンクの髪 紺碧の瞳 サッパリした気性 綺麗に結い上げた髪と色つぼいうなじが魅力。

アルバート

執事。黒服総白髪のおじさま。上流階級において顔が広い。

ミラ

侍女頭。ロングスカート姿の年配の女性。ふくよかな体型。世話好き。

デューイ

黄色い瞳、藍色の髪。背が高くギスギスに痩せている。アースカラーを好み、草花や動物などの自然を愛する朴訥としたおじさん。実は凄腕騎士。

オルセイ ソルフェーニユ（五十一）

ソルフェーニユ王国 国王。

ルーテシア

ソルフェーニユ王国 前王妃。

エドウィナ（三十三）

ソルフェーニユ王国 現王妃。白金の髪にターコイズブルーの瞳。

ウォーレン（二十五）

ソルフェーニユ王国 第一王子。ふわふわの濃紺の髪にグレーの瞳。マリーよりも少し背が高い程度。

リシャル

ソルフェーニュ王国 第三王子。白金の髪にターコイズブルーの瞳。

アルシノエ
アルノイエ

ピンク（二十一）

黒い服の男 薄いピンクの髪。レイチェルの兄。

グリーン（二十一）

黒い服の男 鮮やかなグリーンの髪

【元の世界】

高原 良 たかはら ひさし （享年四十八）

マーリイの父 俳優を目指すも途中で方向転換。舞台監督として成功する。

高原 里容 たかはら りよう （享年三十八）

マーリイの母 バレリーナ。結婚前は、海外でも有名なプリマドンナだった。

赤石 ツカサ あかいし つかさ（五十）

母の兄 大病院経営

赤石 美枝子 あかいし みえこ（五十）

ツカサの妻 小柄な美女

赤石 志津子 あかいし しづこ（二十五）

マーリイの従姉 雑誌モデル

赤石 真 あかいし まこと（十九）

マーリイの従兄 長身 サラサラの髪 格闘技が得意。彼から護身術を習う。

愛犬ボス（十七）

柴犬元気

頑固ばあさん

父の母

ブローグ - マーリィ side -

ひとつの村を滅ぼした
たくさんの人を殺めた

そんな彼を、恐ろしい人だと思った

近寄ってはいけない、と

逃げなくてはいけない、と

なのに、いまさら、気付くなんて

逢いたい 逢いたい 逢いたい

どうか私を連れて行って

彼のところへ連れて行って

舞台監督の父と、バレリーナの母を両親に持つ私の夢は、一流の
舞台女優になること。

父と母はともに有名で、物心つく頃には、テレビで顔を見ることが
の方が多くなっていた。そんな二人の語る、華やかな世界が知りた
くて。そのために私は、ありとあらゆる芸事を勉強し始めたのだっ
た。

私が小学五年生のとき、最初の転機がおとずれた。学芸会に出る
ことになったのだ。

父の影響で、幼いころから芝居を見るのが好きだったが、自ら
演じる側に立ってみると、それとは全く違う世界が広がっていた。

役を理解し、その心を自分のものとして演じることに、強く心を惹かれた私は、今まで閉じていたもう一つの目が突然開いたような、衝撃的な体験をしたのだった。

両親は、多忙ながらもできる限りの時間を私に費やし、深く愛してくれた。小学校の体育館で、初めて舞台に立ったときにも、手を取り合って喜んでくれた。父と母のそんな姿が、夢へ向かう私の背中をさらに強く押したのだった。

以来私は、今まで以上に稽古に励んだ。小学校を卒業し、中学、高校へ通いながら演劇養成所で学ぶ日々。

バレエ、歌、パントマイム、舞踊はもちろん、演劇に必要なありとあらゆるトレーニングを、ある時期を除いて毎日欠かすことはなかった。

努力と比例して、着々と実力を伸ばしていった私は、若干十六歳という年齢にして、大舞台のヒロインの座をこの手に掴んだのだった。

何千人も入る大劇場で、初めて演じるヒロイン役を、無我夢中で演じた。

そして、迎えた公演最終日。

持つ力の全てを出し切った私は、降りゆく幕に動きを止めると、それまでに起きたいろいろなことを思い返して、胸を熱くした。

「……やっとここまでこれたよ。パパ、ママ」

涙がこぼれ落ちないように喉に力を入れ、背筋を伸ばす。

カーテンコールで再び幕が上がると、思わず息を呑むほどの大きな拍手に迎えられた。きらきら青に輝くドレス姿の私は、優雅に腰を折り、満面の笑顔でそれに応えた。

全ての終わりであり、また、全ての始まりである、その瞬間まで、私は歓声の巻き起こる大きな舞台に立っていた。

ガラスの靴を、身に着けて。

プロローグ - ユリジェス side -

「ユリジェス殿下」

甘い声がわたしを呼ぶ。

唇の端を上げ、わずかに微笑んでみせると、しどけない姿をした女性が身を寄せてくる。目の前に立つ彼女は、はだけた胸に指をすべらせ、上目づかいでわたしを誘う。

第二王子という地位と権力、そして珍しい銀の髪に群がる女性は少なくないが、彼女たちは知らないのだ。わたしが何よりも厭うているのが、その媚びた笑みだということを。

いずれ正室を迎える必要があることはわかっていた。たとえ形だけだとしても、王族としての責任を果たすために。

正室には、それまでに体を重ねた女性たちの中の誰かが選ばれるのだろう。

誰でもかまわない。

わたしは、誰も望まないのだから。

……それが、君に出会う前のわたしだった。

男に押し倒され、殺される寸前の少年を助けた、と思った。身体を震わせて怯える彼女は、傷だらけでみすばらしく、栄養失調の少年にしか見えなかったのだ。

そのくせ警戒心は強く、毛を逆立てた猫のように真っ直ぐわたしを睨みつけてくる。

そんな彼女の傍らには、常に寄り添う犬がいた。

彼女は自分を、異世界の人間だと言う。この世界に迷い込んだ彼女を、意図せず過酷な状況に追い込んでしまったことを、わたしは今でも悔やんでいる。

それでも。彼女をこの世界へ導いてくれた運命に、感謝せずにはられない。

マーリィ

マーリィ

君を再び、取り戻す

わたしが願うのは、ただそれだけ。

プロローグ ・ ユリジェス side ・ (後書き)

このお話は、番外編集と関連しています。

【ガラスの靴を回収し隊】

- 1 ピンクとグリーンの会話 小川のほとりにて
- 4 エリザベス嬢の独白 夢の後

ユリジェス様のイメージが、いちじるしく損なわれますので、ご理解の上、お読みくださいませ。

第一話 悪夢と現実

煙と、……錆びた鉄のような臭い。ああ、もちろん私はこの臭いを覚えている。

……たしかに夜の高速道路は雨に濡れて滑りやすかった。ただどうして……大型トラックの滑ってくる先が、なぜ私たちの車だったの？

ほんの一瞬でも時間がずれていたら、父と母は、今も優しく笑っていたはずなのに。

……気がついたとき、私はザラリとした土の上に、うつ伏せの状態で倒れていた。重い頭を上げると、周囲の家を襲う火が、未だ焦点の合わない目に映る。

ぼうつと霞む思考。すぐそこまで炎が迫っているのに、何も考えられないまま体を起こし、倒れていた狭い路地の、片側の壁に背を預けた。

しばらくの間、ギュツと目をつぶり、悪夢の余韻を振り払う。

震える呼吸をひとつして、ざらついた壁に後頭部を強く押し付けた。そのままゆるゆると空を見上げたが、赤黒い煙に覆われて、青が見えない。

辺りをぐるりと見回す。ここは木造の簡素な家が集まる……村、なのか？ だけど、今は人影もないようだ。

いや、……人影は、あった。

青いドレスをたくし上げ、地面に手をつく。そうして、路地から顔を出すと、おびただしい数の村人が、血に染まった無惨な姿で折り重なり、燃えているのが見えたのだ。

喉を焼く煙と、鉄錆びのような血の臭い。そう、はっきり意識が戻る前から、覚えのある臭いだとは思っていたけれど。でもまさか、こんな酷い……

あまりに残酷な光景を目にして、座ったままの体がグラリと傾いだ。

壁に手をつき、彼らから目を外すことなく、ゆっくりと立ち上がる。決して低くはない目線の高さから見る光景は、吐き気をもよおすほど無残なものだった。

「に、逃げなくちゃ……」

口元を手で押さえ後ずさりながら、自分に言い聞かせるようにつぶやく。何から逃げればいいのか、どこへ逃げればいいのか全くわからないまま、吹き寄せる熱風と、今はもう動かぬ村人達から少しでも離れるために、震える脚を前へ進めた。

私が倒れていたのは村の片隅で、畑の向こうに雑木林が続いていた。しかし、見晴らしの良い畑を通り抜けるのは恐怖だった。

手前に倒れていた村人の体には、刀のようなもので斬られた痕が残されていたからだ。

私が今身につけているのは、舞台衣装のロングドレスに、半透明のハイヒール。銀糸入りの青いドレスは目立ち過ぎるし、道無き道を進むなら、ヒールでは歩きにくい。

ふと思いついて、半分燃えた家の玄関先に置き去りにしてあった大判の布地と、底まで革でできたゴワゴワの靴を手にとった。

ドレスをふっくら膨らませるパニエと金髪のウィッグ、そして半透明のハイヒールを火に投げ込み、薄汚れた大きな布をかぶると、私は雑木林を睨みつけ、そこへ向かってただひたすら走った。

- もつと、もつと速く……！

ガクガクと脚がもつれる。誰かが気付いて追ってくるかもしれないのに、体がうまく動かない。雑木林は、もう、目前なのに。

ヒューヒューと荒い息を吐きながら、恐怖で思うように動けない自分の体と、この世のありとあらゆるものに向かって悪態をついたとき、鬱蒼としげる木々の間に転がり込んだ。

林の中は足場が悪く、そのままの勢いで走り続けることが出来ない。しかたなく、進むスピードを落としたけれど、頭の中では同じ問いが、ものすごいスピードでグルグルと回っていた。

- - いったい何があったの　舞台は無事に終わった？　今の人たちはどうして殺されたの？　ここはいったいどこなのよ？　それより……、それよりこれって本当に現実なのっ！？

そんな状態でどれくらい歩いていただろう。気がついたらドレスの裾はかき裂きでボロボロとなり、むき出しの腕は枝にひっつかかれ、

いくつもの細かい傷ができていた。

オレンジイエロー系の明るいブラウンに染めた髪の毛は、舞台用ウィッグを着けるため、つむじのあたりでギュツとまとめていたのに、今は乱れて頬にべったりとくっついていてる。

汗をかいて、舞台メイクはいつたいどんな風に崩れていることが想像するため息がでた。

- どうせパンダ目なんだろうな。……はあ

自分のボロボロとなったドレス姿を見下ろし、手の中のつけまつげを見つめるうちに、あの村で目撃した出来事が、現実にあったことなのか、それとも、今も続く悪い夢なのか、いまいち自信がなくなってきた。

額に手を当てため息をひとつ落とす。体はクタクタだし、わからないことだらけで投げやりになった私は、考えることを放棄してその場にしゃがみこんだ。

土の上に座り込んでからしばらくの間、私は身動きもせず、ぼーっとしていた。

考えてもわからないことをグズグズ悩むのは止めようと思ったのに、やっぱり帰ってくるのは同じ問いで。

- 本当にもう、どうしてこんなところにいるんだろう？ 私はカーテンコールの最中に倒れたのだろうか？ そして誰かにあの村まで運ばれて放置された、とか……？

足元に生えた草をぼんやり見ていると、いつの間にかそんなとこ

るまで考えが進み、左右に頭を振った。

- - いや、違う。

大勢の人が見ている舞台上で意識を失ったなら、すぐに劇場の救護室か病院に運ばれてるはず。こんなかさばるドレス姿で誘拐されるなんて有り得ない。

それに今振り返ると、炎に包まれたあの村は何か変だった。例えば、そう、あの村はやけに西洋の田舎っぽくて、日本のどこかとは思えなかったのだ。

どこにも電線がなかったし、車も自転車も見かけなかった。

そして極めつけは、彼らの髪の色と服装だ。男性は地味な色合いの服だということしかわからなかったけど、少なくとも日本の女性は、足首までのロングのワンピースを普段着にしていない。それに、田舎で暮らす人間が、赤や青などカラフルに髪の毛を染めるとは思えないもの。

あれだけの惨事だ。きつと今頃、救急隊や警察が救助に来てるだろう。

こんなところで、舞台上で倒れた女優が見つかったりしたら、芸能プレスに特ダネを提供することになる。だけど、ここに居ても何もわからないし、とにかく助けを求めなければ。

ニユースになっても、仕方ない。

あそこへ戻って、もう一度、何が起きているのか確認してみよう。

私はひとつ大きく頷くと、勢いよく立ち上がった。

第二話 雑木林

立ち上がった私は、あらためて周囲を見回したが、雑木林は、前後左右、どちらを向いても同じ光景に見えた。背の高い木々が立ち並び、木漏れ日が差し込んでいる。そのわずかな陽光を得て、低い位置にも緑が茂り、私の視界を遮っていた。足元には苔むした石が転がり、ところどころ雑草が生えている。だけど、自分の歩いてきた跡さえ見つけられないのは、それだけ混乱しているからか。

さて、あの村に戻るにはどうすればいいだろうか。なんとなく方向はわかるけど、確かにこちらだと確信が持てないために迷っていた。

せめてもう少し視界が開ける場所まで出れたらいいのに。村の向こう側には高い山がそびえていたから、それを目印に歩いていけば、きつとたどり着けるだろう。

太い幹の樹木が生い茂る林の中は、野鳥の声が響き、清涼な風が通り抜ける。たぶんこちらと思う方向へ少し歩くと、見覚えのない緩やかな高台に出たものの、それでもまだ木々に遮られて周りが見えなかった。

「久しぶりにやってみようかな」

細い蔓を拾い、たくし上げたボロボロのロングドレスをミニ丈にして巻きつける。靴は革紐を足首に巻いて結ぶようになってるので問題なし。

具合の良さそうな木の枝に手をかけると、グツと体を持ち上げ一気に登っていった。三年ぶりの木登りだけど、体はしっかり覚えてる。危なげなく空が見える高さまで登ると、すぐに尖った山の頂上

が目に入った。たしか他に山はないはず。更に登って周囲を見回すと、あの村は、今も赤い煙を上げ燃え続けていた。

「うーん、あそこか……」

キュツと眉を寄せ道を探す。ここから村がある辺りまで真っ直ぐたどると、途中に大きな岩があった。そこを左に折れると、木が生えてない線……道か川のようなものが村まで続いているのが見える。こんな周りに何も無い林で野宿などごめんだ。道に迷わないよう、もう一度しっかり目に焼き付け、スルスルと木から降りた。

木の根がところどころ顔を出す足場の悪い道を、大岩目指して歩きながら、さつき見た風景を思い出していたが……

この辺りにはあの村しか集落と呼べるものがないようだ。それどころか、雑木林は私の背後、つまり村から離れるにつれより一層深くなり、光も届かないような深い森となっていた。

そして。

今まで疑問に思いながら、あえて考えなかったことを、冷静になって周りを見つめたことで、はつきり認識してしまった。

あの恐ろしい村で目が覚めてから、かなりの時間が過ぎているのに、車の音も、救急隊のサイレンも、ヘリコプターや飛行機が飛ぶ音も聞こえなかったのだ。

どうして村に救急隊が来ていないのか？ 空が見えなくなるほどの煙がたつくらい、大規模な火災が起きてるというのに。

どんなに田舎でも、……仮にここが日本でないとしても、あれだけの火災に加えて大量虐殺があれば、たちまち大ニュースとなって今頃プレス各社のヘリコプターが周囲を飛び回ってるはず。

なのに、今になつてもまだそんな気配もないのはなぜなのか？
それほど人里離れた場所なのだろうか？

そよぐ風も、揺れる葉も、野鳥のさえずりも、日本と少しも違う
はずはないのに、違つと認めたくない私は、無意識に、心の奥底で
それを否定していた。

体の支えを求めるように前方へ伸ばした手。その指先が震え、背
中に冷たい汗が流れ落ちたとき、木々の間から大きな岩があらわれ
た。

第三話 黄金の犬

ヤマボウシの枝をかき分けた先は、少しひらけた広場だった。青空から明るい陽光が降り注ぎ、芝生らしき草が一面に生えている。その真ん中にあるのが、平べったい円錐形をした、大きな大きな岩だった。

すぐそばまで近付くと、それは身長百六十五センチの私と同じくらいの高さということがわかった。横幅はざっと見て十メートル弱。ひんやりとした岩肌に左手を滑らせながら、裏側に回り込んでみる。どうやら目測で、横幅十メートル×奥行き五メートルの楕円の形をした一枚岩のようだ。

ゆっくり歩いて一周する。気になっていた大岩の全貌を見て、もとの場所に戻った事に、私は満足のため息をついた。

そのとき、十数メートル先の乾いた藪の中から、金色の何かが飛び出したのが見えた。

驚き身構える私に向かって、真っ直ぐ走ってくるのは、陽の光に輝く美しい獣。

幅が広い頭部に、丈夫そうな首、小さな体に比べて極端に発達した前肢と後肢。金色に輝く長めの被毛に、ペラペラと垂れた耳。それは……

- - 犬、だわ

ほっとして力を抜いた私のもとへ、その犬が駆け寄ってきた。黄金の被毛のゴールデン？レトリバーのように見える。

四肢を踏ん張って立ち止まり、キョロキョロと周りを見回したそ

の犬は、まるで幻でも見るかのように、茶色い、大きなウォールナットの瞳でこちらを見上げた。

私を見つめながら、ハッハッと息をする様子はどこか可愛らしく、自然と頬が緩む。対する犬の方も、私に親しみを持ってくれているようだった。

知らない土地に放り出されてから、何が起きているのかわからない恐怖を常にかけていたが、この犬と向かい合う、今、この瞬間だけは、まるで光り輝く朝日に照らされているような、穏やかで温かい気持ちになっていた。

そうしてしばらくの間見つめ合っていたけれど、ふと我に返ったような素振りをした黄金の犬は、私の横を通り抜け、そのまま風のように走り去っていった。

はあっ、と息をついて、犬の消えた茂みから空へと目を向ける。あの温かな時間を失ったことが、ちよっただけ惜しく感じた。

さっきまで太陽の光が降り注いでいた広場には、いつの間にか、厚い雲が影を落としていた。

第四話 混乱

不思議な犬と別れてすぐ、私は今までよりもペースを上げて歩き出した。すでに夕方にさしかかっているからだ。森や林は暗くなるのが早い。このままでは、村へ着く前に動けなくなってしまうだろう。

木の上から見つけた筋は、道ではなく、穏やかな流れの小さな川だった。腕についた細かい傷を洗うため、小川に屈んで手を浸す。手、腕、顔、ひと通り洗って口に含んだ。澄んだ水はひんやりして美味しかった。

今日はたくさん走ったから汗でベタついてるし。暑気が薄れて気持ちいい。

……………暑気？

私が主演だったお芝居は、クリスマスのスペシャル公演だった。「明日は雪が降るでしょう」と解説する、テレビのお天気お姉さんを見ながら、「ぎりぎり公演最終日に間に合ったね！」と、みんなで胸をなで下ろしたのは今朝のこと。

賑やかなクリスマスソングが街中に流れ、恋人たちが甘く微笑みあうのを見ては「羨ましいよ」と拗ねて、千秋楽を終えてから皆に渡す予定のプレゼントを思い、それから、それから……！

奥歯を噛み締め、水を叩く。

叩いて、叩いて、その痛みで己を保つ。

口から洩れ出る、声にならない悲鳴を必死で飲み込む。

考えるな

考えるな

考えるな

余計なことは考えるな

私はきつと、たんなるよくある記憶喪失なんだ。 実は、あれから半年以上も経っていて、その間にいろんなことを経験して、みずからこの場所にやって来て、そして事件に巻き込まれた。

……事件。

あの村の惨状と、鉄の臭いを再び思い出した私は、顔を背けて嘔吐した。

第五話 黒服の男たち（前書き）

番外編でお馴染みの、ピンク頭とグリーン頭が登場します。

第五話 黒服の男たち

大舞台で約二時間ヒロインを演じ、倒れて気付いたらわけの分からない場所にいて、畑を全力疾走した挙げ句、雑木林の中を延々と歩きまわる。

このようにハードな半日を過ごした私のお腹は、とうの昔に空っぽになっていた。

もう吐けるものはないはずなのに、痙攣が止まらない。何度も何度も嘔吐を繰り返し、みぞおちに引きつる痛みを感じるころになって、やっと落ち着いてきた。

口をゆすいで冷たい水を飲むと、ゆっくり藪の間を這っていき、地面に突っ伏し体を丸める。額を冷たい土に付けたまましばらく休む。激しく吐いたせいだろう、目が潤み、頭がズキズキ痛んだ。

- 千秋楽を無事に終えてから数時間。天国から地獄へ真逆さまだ。ああ、なんて散々な一日なんだろう。こんなときは何を恨めばいいのか。誰か、私に教えてよ。

……と、ひとりごちた時、ガサガサと茂みを揺らしながら、こちらへ歩いてくる足音が聞こえた。

お揃いの黒い服を着たカラフル頭の男性がふたり。

- 助かった……！

一瞬喜んだが、奇妙な格好をしている彼らが、いったいどんな人達なのかわからない。迷ってるうちにボソボソと話す声が聞こえてきた。

幸い、倒れ伏した私の体は藪の間に隠れているので、彼らからは全く見えない。身動きしなければ見つかることはないだろう。

「ね、もうこんなに薄暗いし、ユリジエス様は、もうシルバの村に到着されたかもしれないねえ」

「おう、そうだな。日暮れまでには、と先触れがあったしな。そろそろお着きになる時間だろう」

茂みの隙間から、薄いピンクと鮮やかなグリーンの髪の人たちが、見え隠れしていた。

「じゃあ、やっぱりそれまでに残りの奴らを見つけることはできないかあ」

「ああ、そうだろうな。だけど、あれで全員じゃなかったのか？」

パキッ

私の顔のすぐそばで、男の一人が小枝を踏んだ。うつ伏せの状態でじつと横たわる私の視線は、その頑丈そうな靴の動きを追っている。

「うん、火を着けると、数人が逃れたのを見た奴がいるんだよね」
「そうか。しかし、ユリジエス様も大胆なことを指示されたものだね！　いくら事情が事情でも、村全体をまるまる焼き払えだなんて。シルバの連中、可哀想に……」

村へ向かって歩き去る男たちの背中を、私はただ黙って見送るしかなかった。

- - ユリジエス様

- - シルバの村

- - 村全体を焼き払え

彼らは、たしか、そう言ってなかった？　そして、そのユリジエスが、あの焼け落ちた村へ到着するとも……

「……に、に、逃げなくちゃ！！」

あの燃え盛る村から逃げたときも、同じようなセリフを言ったような気がするが、これは本当に駄目だ。彼らに見つかったら、今度こそ殺られるに違いない。

とりあえず村へ行つて、ここがどこかを確認し、きっといる誰かに助けを求めようなんて甘いことを考えていたけど、あそこには、今、極悪殺人鬼のユリジエスがいるんだ。ちよつとかじった程度の護身術では、とてもじゃないけど太刀打ちできない。

どんなに空腹だとしても、どんなに疲れていたとしても、ここは絶対に移動するべきだ。

私は、なるべく音を立てないように立ち上がり、肩にかけていた大判の布を体に巻き付けた。ウエスト部分で蔦を結ぶ。体をドレスごとすっぽり隠したから、これで少しは見つかりづらくなったと思う。

彼らは、誰かを捜しているようだった。念のため、他にも捜索に加わってる仲間がいると思った方がいい。

歩き始めたはいいいけれど、いつたどこへ向かえば安全なのだろう

う。やっと人の声が聞けたと思ったたら極悪人で。その親玉がこの辺りで唯一、人が居そうなシルバ村に來ているなんて。

もう、誰に会っても敵にしか見えないような気がする。

あの犬以外は。

そうだ！ あの犬と出会った場所まで引き返そう。このまま夜を明かすにしても、右も左もわからないところより、見知った場所の方がいいに決まってる。

そうしよう。それがいい。後のことは、着いたときにでも考えればいいのだから。

第六話 再始動（回想）

両親を交通事故で亡くした十四歳の冬、私は、母の兄であるツカサ伯父さんのもとへと身を寄せた。

大病院を経営するツカサ伯父さんには、小柄で美しい同年の妻、美枝子伯母さんとの間に、二人の子供がいた。雑誌モデルで活躍する二十三歳の長女、志津子ちゃんと、高校二年生でかつこいい長男、真くんだ。

赤石の家族は、私を末っ子のように可愛がってくれたけれど、両親を一度に亡くした悲しみは癒えず、ただ息をしているだけの毎日を送っていた。

そんな私を救ってくれたのは、愛犬ボスと真くんだった。ボスは私よりもひとつ年上の柴犬で、十五歳になるご老体とは思えないほど元気だった。

愛情いっぱいに育ったからだろうか、まだまだ若く、テコンドーの鍛錬をする真くんにはじやれつでは一緒に広い庭を走り回っていた。

そんなふたりを、緑あふれる庭に置かれた白いイスに座って眺めるのが、私の日課となっていた。

ある晴れた休日、長い脚を深く折り曲げてボスのお腹をかいていた真くんが、ふと思いついたように私を呼んだ。

「マリーイ」

赤石家では、みんなが私を『マリーイ』と呼ぶ。高原の両親がい
つも呼んでいたから、彼らも自然と私をそう呼ぶようになったのだ。
『茉莉絵ちゃん』じゃ他人っぽいから、なんて。

「今日は、マリーイも一緒に、公園まで散歩に行かないか？」

以前は演劇のためのトレーニングを欠かしたことがなかったのに、
あれから二ヶ月の間、全く体を動かしていないことを心配してくれ
てるのだ。

体だけでなく表情も動かない、蠟人形のような女の子が、その頃
の私だった。

「舞台に立つなら体力をつけないとダメだろ？」

三歳年上の真くんは、サラサラの前髪をかき上げ、切れ長で涼し
げな目を細めて私に笑いかける。

「トップ女優になって、頑固ばあさんに認めさせるんじゃないか
ったのか？」

コロリとうつ伏せに体を返したボスの瞳が、私に向かって、そう
だそうだと言っていた。

「ボスもそう思ってたさ」

ぴよこん、と立ち上がった老犬ボスが、トコトコこちらに近寄っ
てきて、イスに座った私の膝に、顎を乗せる。

「俺さ、勘当された良叔父^{ひい}さんが、おばあさんのことを悪く言っ
たの、聞いたことないんだ……」

そう。父は若い頃、舞台俳優を生涯の仕事にすると決めたとき、烈火の如く怒る祖母に家を追い出された。いろいろあって紆余曲折した末に方向転換し、やっと舞台監督としての才能を開花させたころ、すでに有名になっていたプリマドンナの母と出逢い、恋に落ちたのだ。

「……里容^{じよう}叔母^{しゅうぼ}さんはバレリーナだからってことで結婚を反対されたけど、やっぱり恨んではいなかったと、俺は、思うよ」

その頃になつて、やっと、実家に顔を出すことを許された父だったが、母を紹介した途端、再び勘当されてしまった。いや、紹介する以前の問題だった。祖母は、父から母の仕事の話を聞いただけで反対したのだから。「踊り子なんてとんでもない！」と。

結局、母のお腹に私がいることがわかり、誰にも相談せずすぐに籍を入れた。そのことですっかりヘソを曲げてしまった祖母とは、疎遠なまま今にいたる。

私も祖母の顔を写真でしか知らず、葬儀の席で、初めて実の祖母と対面したのだ。彼女は父の死にひどく後悔しているのだろう、震える手を合わせる姿が、とても小さく見えた。

……だけど、その時はまだ、私の方が彼女に声をかけられるような状態ではなかったのだ。

「……でもさ、いつか、許してもらいたい、と寂しそうに話してたっけ」

そうだった。祖母は、生まれてから一度も、演劇などの華やかな

舞台を観たことがない。軽薄なイメージがあるからと、たいした理由もなく嫌っているのだ。

- 僕の舞台を、一度だけでもいいから、母さんに観てもらいたい

父はよくそう言っていた。ここにはいない祖母を見るかのように、懐かしそうに、寂しそうに笑いながら。そんなとき、母はいつも優しく父の腕をさすっていた。

「……だから、さ。一人娘のマーリイが、演劇界のトップに立って、おばあさんにその舞台を見てもらうんだ。そしてマーリイのことも、叔父さん、叔母さんのことも、ちゃんと認めてもらうんだよ」

黙って耳を傾けていた私は、それを聞いて、はっとした。

そう。そうだった。父も母も、私が女優の道を選んだことを、とても誇りに思っていたのではなかったか。学芸会で演じた私を見て、大げさなくらい喜んでくれた父と母の姿。この二ヶ月の間、その姿をすっかり忘れていたなんて。

「……心配、かけて、ごめんなさい」

久しぶりに声を出した。悲しみに沈んだまま止まっていた時間が、再び動き出す。

ボスを撫でる手を止め、いつも伏せていた視線をゆっくり上げると、そこには、正面にかがみ込んだ真くんの、驚きに目を見開く姿があった。

「私、着替えて、くるから。……待っててね」

その日から、私は毎日真くと走り込み、歌や踊りなど演劇のためのトレーニングを再開し、寝る前の筋トレで積極的に体をつくり始めた。

マリーイは無防備だから、と護身術を覚えてくれたのも、格闘技が得意な真くんだった。自然と体が動くように、何度も繰り返し練習した。そのたびに彼は相手役をつとめてくれた。

護身術を覚えてくれた真くんに、私は、今ほど感謝したことはない。

今、私は、涎を垂らし唸り声をあげる狂人たちに、訳もわからず追いかけられている。

練習のたまもの。考える前に自然と体が動いたから、突然飛びかかられても逃れることができたのだ。

- 真くん、ありがとう！

！
ここから無事に生きて帰れたら、何か美味しいものをおごるから
約束だからね！！

第七話 犬との再会

なんということだろう。なんて所に迷い込んでしまったのだろう。ジエットコースターに乗ってるかのような目まぐるしい展開に、滲む涙も嘔吐のダメージも、すっかり吹っ飛んでしまったようだ。

不穏な話をしていた黒服の男たちが歩き去ると、私はもう動いても大丈夫、という頃合いまでじっと待ち、それからゆっくり動き出した。

ドレスが覆い隠れるように、薄汚れた大きな布を巻き付けると、ギョツとひつつめた髪をほどき、ガシガシ手でほぐす。

耳をすまして近くに誰もいないことを確認してから移動開始。なるべく音をたてないよう慎重に、ついさっき自分が通った跡をたどり、大岩の広場へと引き返していった。

炎の中に投げ捨てた、夜会巻き金髪ウィッグの下には、明るいブラウンのボブヘアが隠れていた。今は毛先が肩の辺りで揺れている。ヘアゴムは手首に。ヘアピンは、ドレスの胸元に挟む。

そういえば、私のそばを通り過ぎた黒服の男たち。彼らの一人は薄いピンクに、もう一人は鮮やかなグリーンに髪を染めていたが、こちらの地域では、カラフルな頭が、今のトレンドなのだろうか。黒い生地にシルバーが差し色の黒服は、まるでお芝居に出てくる騎士の衣装を実用化したように立派だったし、左の腰のあたりには、『細長い何か』がささっていたような気がする。

まさか『アレ』で村人たちを斬ったと言っの？

つらつらと、とりとめのないことを考えていたため、周囲の異変

に気付くのが遅れてしまった。

低く唸る声に驚き素早く振り向くと、ガサツと音をたてて藪を踏み越える男がそこにいた。あの村人たちと同じような地味な服装。髪は艶のない黄色だ。

彼は酷い怪我をしてるらしく、全身を血に染めていた。

その様子に驚いた私は、彼を支えるために駆け寄ろうとした。ところが、男は両手を前に突き出し、唸りながら真っ直ぐ私に向かってくる。怪我をしている足取りではない。

その虚ろな目に固まって動けないでいると、今度は右側からお腹を血に染めた女が爪を立てて抱きついてきた。私の左腕を握った女の右手は、中指、薬指、小指がなく、とっさにその手首を握り、捻り上げながら腰を落とす。すると彼女は、私のすぐ目の前まで迫っていた男の方へ、大きく前転しながらぶつかっていった。

その隙に彼らの手から逃げると、休む間もなく横へ移動する。新たに出現した若い男の脇をすり抜けて、可能な限り急いで走った。男は真っ赤に染まった両手を前に伸ばし、今にも落ちそうなほど斬られた首が、斜めに傾いていた。よくあれで動けるものだ。

彼らは獣のような唸り声をあげ、生臭い息を吐き、口の端から涎を垂らしていた。幸いにも彼らは歩みが遅く、体全体の動きが鈍いらしい。

それでも、恐怖に身の竦んだ私の体はギクシャクとしか動かない。振り向かなくても、追ってくるのが、彼らの気配で伝わってきた。

「ひいっ……！」

きゅうつと狭まった喉の奥が鳴った。

- なんなの、もう！　こんなのってありなの！？　ねえー！　誰か答えてよー！

振り向くと、木々の向こう側に、私を追ってくる狂った男たちが見えた。

- バイオハザードのパロディじゃあるまいし、今度はゾンビだつていうの？　次から次へとこんなことが起きるなんてあんまりだ！　あああああつ！　嫌だ！　嫌だ！　私の前から今すぐ消えてっ！　これが夢なら今すぐ覚めてほしいよ！　こんな時って、物語だったら白馬の王子様が駆けつけて、哀れな私を救い出してくれるんじゃないかったの？　ねえ、神様。私の話を聞いているの？　ちよっとは手加減してくれてもバチは当たらないでしょうよっ！

これ以上ないほど混乱し、少しばかりおかしな方向に思考がそれる。気持ち急ぐのに足元が悪く、草木に足をとられてバランスを崩した。何度も何度もよろめいて。その度に木の幹を支えにして。まるで、終わりの見えない追いかっこのようだ。

そんな自分が可笑しくなる。泣き声をあげながら同時に笑う。酷いパニックを起こした私は、それでも目的地を達えることなく、無事、大岩の広場にたどり着いた。

くるつと振り返り、狂人どもに向かい合ってはみたものの、息切れもせずにとだ唸り、ためらいもせず近寄ってくる彼らに対して、私にできることは何一つない。

『正々堂々と戦う』という選択肢をすっぱり諦めた私は大岩へ向かって走り出した。

助走をつけて大岩に飛び付くと、岩肌を蹴り、岩の上部に右足を引っ掛けることができた。奴らに引きずり下ろされないよう、急い

で体を揺らす。その反動を使って、私はなんとかよじ登った。

- はあ。はあ。はあ。はあ。はあ。はあ。

力の抜けた私は、平べったい岩の上の中央付近で、バツタリと倒れ、仰向けにひっくり返った。

- もう限界。たとえ奴らがよじ登って来れたとしても、これ以上、動けないよ。

岩の周りから唸り声の三重奏が聞こえてくる。こんな状況なのに、体力の限界のさらに限界まで使い切った私は、これっぽっちの考える余力もなく、しばしの安息を求めて、眠りの世界へと緩やかに落ちていった。

……遠くから、ギャンギャンと激しく吠える声が聞こえる。

あー、今度はいったいなんだ、と、半分飛んでいた意識を無理やり戻し、軋む体をゆっくりと起こした。

どれくらい眠っていたのだろう。さっきまで周囲がうつすら見えただのに、今はすっかり夜の闇に覆われている。だけど、すぐ近くで何事かが起きているのはわかった。わずかな月明かりの中に見えるのは、広場にうごめくゾンビたち。

そして、それに対峙しているのは、低い姿勢で牙をむき、激しく吠えだてる、黄金の犬だった。

そのゴールデンレトリバーは、勇敢にも、奴らに向かっていつては吹き飛ばされ、噛みついては皮毛を毛られていた。地面に転が

され、3人のゾンビ達が爪を立てて襲いかかる。

「ダメだ。このままでは殺られる！」

「ワンちゃん！」

ゾンビ男や、どこかにいる黒服の男たちの注意を、こちらに向け
るのは危険だとわかっていた。それでも私は叫んでいた。自分の身
を心配する前に。後のことなんか知ったことではない。ただ私は、
あの犬がやられてしまうのを、何もせず、指をくわえて見ているこ
とができなかったのだ。

「ワンちゃん、今行くから頑張つて！」

私は、体を横たえていた一枚岩の中央に立ち上がり、さらに叫ぶ。

「私が相手をするから！」

大岩の端っこまであと数歩。

「その間に逃げるのよ！早く！」

岩の角に右足の裏をかけ、勢いをつけて飛び降りようとしたその
とき、傷付いてるはずの犬が、弾丸のようなスピードでこちらへ走
ってきた。

下では、声に引き寄せられたゾンビ男が、私の足首へ手を伸ばそ
うとしている。犬は地面を蹴つて、その背中へ飛びかかった。

見事な流線を描いた犬は、男の背中を、そしてさらに、頭部を後
る肢で蹴ると、岩の上に立つ私の斜め後ろに、横滑りしながら着地
した。

「っ……良かった！」

- - 助かった！

感極まった私は、体を起こす犬のもとへ駆け寄って、太い首に両腕をまわし、その傷ついた体を、できる限りやんわりと抱きしめた。

- - ああ、良かった……

ふかふかの毛皮に顔を埋めて、もう大丈夫だよ、と小さな声でつぶやくと、勇敢な黄金の犬は、私の首筋をひと舐めし、甘えるようにクウンと鳴いた。

第八話 二つの月と銀髪の子

- 助かって良かった。…… 本当に、危ないところだった。

腕の中に息づく命が、たまらなく愛おしくて、自分でもどうしていいのかわからない。腕を巻き付けたまま、首の柔らかな皮毛におでこを押し付けると、今度は犬の方からすがりついてきた。

わずかに感じた鉄錆の匂いにふと体を離す。すると、あれほど勇敢だった犬が、不安げな声でクウンと鳴いた。

- どこかに怪我をしているの？

雲を通した月明かりのもと、頭から丁寧に見ていく。左後ろ肢に触れたとき、それまで静かにしていた犬が身じろいだ。触れた手を広げてみれば、べつとりと血がついている。

- なんてこと

この我慢強い犬は、左の後ろ肢に深い傷を負っていたのだ。キュツと眉を寄せた私は、ドレスの裾をビリビリ裂き、とりあえずの止血をした。

- 早く治療しなければ、傷が化膿してしまう

何か助けになるものはないかと辺りを見回すと、男と女が、今もヨロヨロと徘徊しているのが見えた。もう一人の男は、犬に頭部を蹴られた衝撃でだろう、岩の影に倒れたままピクリともしない。

頭を振って気を取り直すと、今度は少し離れた場所に、いくつか

の灯りが見え隠れしているのに気が付いた。

でもダメだ。あの灯りはきつと、村人を探している黒服二人組か、その仲間のものだろう。ここは周りにコンビニも民家も、何も無い場所なのだから、関係のない人間が、こんな遅い時間に林の中を歩いているとは思えない。

そうしている間にも、灯りの数は増え、こちらへと迷いなく近づいてくるのがわかった。身長百六十五センチの私。それと同じくらいの高さしかない岩の上にいたら、いずれ彼らに見つかってしまうだろう。だからと言って今すぐ降りたら、ゾンビたちが襲ってくるのは間違いない。

――どうすればいいの？

額に片手を当て悩む私を、黄金の犬がじつと見つめていた。

……今、広場には、五人の男たちがいる。やっぱり彼らは全員お揃いの黒い服を着ていた。制服なのだろうか。

息を潜めて待ち構えていた私は、彼らが駆け込んできたのと同じタイミングで岩の裏側へ飛び降りた。後ろ肢に負担がかからないよう、傷付いた犬を出来るだけそつと地面に下ろす。そうして私たち一人と一匹は、茂みを目指してゆっくりと歩き出した。

私たちが闇に紛れるよう、ジリジリと移動している間に、どうやらゾンビ達は彼らの剣により打ち取られたようだ。今では、死体を見下ろしながら、それらの処理について話をしている。

酷い怪我をしているはずの犬は、痛がる様子も見せずおとなしく

隣に座っていたが、時折鼻を高く上げて、流れる空気の匂いをクンクンと嗅いでいた。

いくつもの灯りのおかげで、彼らの様子がよく見える。その反対に、灯りから遠く離れた場所は闇が深く、彼らからは見えづらいだろう。

薄汚れた布が、膝の見えるほど短くなったドレスをしっかり隠してくれている。だけど今度は、闇に白く浮かび上がる、むき出しの腕が気になった。眉をひそめ、後悔のため息をこぼす。こんなことなら小川で手と顔を洗うのではなかった。煤だらけで真っ黒のままなら目立たなかったのに。

男たちの中心となり、冷静に指示を出しているのは銀色の髪の男。彼をひと目見た瞬間、私の心臓が急に暴れだして、バクバクと打ち始めた。何が理由かはわからないが、とにかく彼が恐ろしくて、今すぐ逃げ出したくなったのだ。

そうして胸を押さえて慌てていると、妙なことに気がついた。

「あれ？ 一人……足りない？」

銀髪の男と、その仲間たちが見下ろしているのは、男女のゾンビ二人だけだった。犬に蹴られたもう一人の男は、いったいどこへ消えてしまったのだろうか。

体を緊張させた犬が、前方の男たちと背後の茂みの奥を交互に見ていた。前後をしきりに見比べては、私の顔をうかがっている。何か訴えているのだろうか。不思議な犬だ。

やがて、革の袋に死体を収納した男たちが、灯りを手に広場を出

て行った。彼らが遠ざかっていくのを見て、私はふっと安堵の息をつき、体の力を抜いた。

しかし、それとは反対に、犬は緊張を増したようだった。

そして。

先ほどから音をたてないようソロソロと場所を移動していた犬が、私の体に巻き付けた薄汚い布を口でくわえて引つ張った。そのままこちらを見つめ、どこか焦ったような表情で、肢を引きずりながら大岩の方へ導いていく。胸騒ぎのした私は、そのまま素直について行った。

急に口を離れた犬が、キャンと鳴き、素早く私の背後に回った。

いったいどうしたのかと振り返り近寄っていくと、後ろ肢に大きな傷を負った犬は、それでも私を庇うように、四肢をしっかりと踏ん張って、その場に踏みとどまっていた。

恐ろしい何かに怯えた犬は、尻尾を丸めて震えている。そして、茂みに向け小さく唸ったかと思うと、いきなり激しい牽制の声をあげた。

肩がビクツと跳ね、自然と右足が後ろに下がる。目を凝らし、茂みの向こうを見てみても、灯りに慣らされた私の目では、何も見つけれない。息を詰めて動けずにいる私に、闇の中からガサガサと音が聞こえてきた。

やがて姿を現したのは、いつの間にか消えていた、あのゾンビ男だった。

犬が狂ったように激しく吠え続けている。それを手で制して、今度は私が前に出た。

さっき対峙したときに分かってしまった。私じゃ全然相手にならないことを。彼らは動きが鈍いだけで、半端なく力が強いのだ。あ

の女の手から逃れることが出来たのは、親指と人差し指、二本の指しかなかったからだ。

傷だらけの犬から気を逸らすため、こちらから男の脇に突っ込んでいった。正面からくる攻撃は、体を反らして受け流す。右に、左に。左に、右に。

それでも長くは続かなかった。疲れきった体が思うように動かないのだ。

- - だめ！ とても倒せない！

逃げないと殺される。だけど、傷ついても傷ついても、それでもまだ諦めずに食らいついていく健気な犬を置いて、私だけが逃げられるわけもなかった。

ツボを抑えて捻り上げても、脇腹に向けて脚を蹴り出してみても、狂った上に頑丈な男はビクともしない。男の手が喉元にのびてくる。今度は避けきれず、油断した隙に、右肩をがっしり掴まれた。

男の勢いは止まらず、そのまま一気に押し倒され、そしてさらに、大きな左手で前頭部をグツと掴まれた。急所のこめかみを強く押さえられ、その痛みに耐えられず、抵抗する力が徐々に抜けていく。

今、男はその手をずらし、私の顎を砕こうとしていた。目を見開いているはずなのに、男の顔がよく見えない。

ふいに、私の上の重い体と、顎を締め付ける大きな手が吹き飛ばされた。

苦しさに喘ぎながら目を向けると、朝が来たのかと間違えるほど明るい月の光が、銀髪の男を照らしていた。仰向けで倒れた私のすぐそばに立ち、鋭く、冷たい目で見下ろしてくる。

雲の切れ目から、……二つの月が、その姿を現していた。

「お前は……」

銀髪の男が何かを言いかけたとき、狂った男の立ち上がる気配を、私の背後に感じた。

第九話 邂逅

地面にくつきり影ができるほどの明るい光を放つのは、地球では見ることのない、二つの月だった。ひとつは大きな純白の月、そのすぐ右下に重なるように寄り添っている小さな金色の月、もうひとつの月。

――やっぱりここは、私の知る世界ではないんだわ

そう思い知ったのは事実だけど、ショックを受けるよりも先に、私は銀色の髪を持つ男の美しい姿に見惚れてしまっていた。顎の痛みも忘れて。

威風堂々と立つ男は、じっと私を見下ろしていた。しかし、ゾンビ男が動いた瞬間、身の竦むような眼差しを、素早くそちらの方へ移す。

地面にひっくり返った私の位置から、クツと斜めに顔を上げた男の首筋のラインが、とても綺麗に見えた。

無造作に束ねた銀の髪が、広い背中では揺れたかと思うと、次の瞬間にはゾンビ男の正面に移動している。移動しながら抜き放った剣を、左から右へ、右から左へと振り払い、斬っても斬っても倒れぬ敵を、さらに血に染めていった。

彼は、……なんと言えいいのか、とにかく凄かった。見目の良さはもちろんのこと、無駄のない動きや、振るう剣の力強さに、私はただただ魅了されるばかりで。

しかし、それでも、彼を初めて見た瞬間に感じた”逃げ出したくなるような恐怖”を忘れることはなかった。

勝負はついたようだ。少しだけ息を弾ませて、振り返った銀髪の男は、私に向かって肩をすくめてみせた。

このように強い男が、剣を使ってやつと倒したのだ。素手の私が相手になるはずはなかった。ゾンビ男に捕まったとき、命を失う前に救われたのは幸運だったとしか言いようがない。

「ユリジェス様！」

黒服の男がひとり、名を呼びながら駆け寄ってきた。

……銀の髪を持つ男の名前を。

「ご無事でしたか、ユリジェス様」

ダークな色の、すっきりした短髪の男が、軽く礼をとりながらユリジェスのそばへ歩み寄る。

「ああ、問題はない」

剣の露を払いながら続ける。

「激しく犬が鳴いていたから、もしやと思い、戻ったのだ。マイオス、心配かけてすまない」

マイオスさんと呼ばれた大柄な男は、幾分ホツとしながらこちらを向いた。こちらを向いて……少しばかり、困惑した表情になった。一方、ユリジェスは、まだ仰向けでひっくり返ったままの私へ向

き直り、こちらに近づきながら問う。

「そうだった。お前、怪我はないか？ 名前は？」

「ユリジェス様、この少年は……？」

- - 少年？

「腰が抜けて、声も出せないか」

思わず眉間にシワを寄せた私を見て、唇の端を上げ、クツと笑う。

「しかし、この犬が懐いてるのだ。怪しい者ではないだろう」

私の横に、いつの間にかあの犬が寄り添っていた。左後ろ肢の怪我は大丈夫だろうか。心配したのが伝わったのだろう、視線を合わせた犬は、大きな尻尾をひとふりして応えてくれた。

その後、ユリジェスとマイオスさんは、後から駆けつけた黒服の男たちに死体の処理を任せ、私と犬を連れて野営地へと出発した。背が高く、ガツシリした体つきのマイオスさんが犬を抱え、私は自力で歩いていた。ときおり体がふらつくが、そんなときはユリジェスが腕を掴んで支えた。

自分のことをどう説明したらいいかわからない私は、まだ口をきいていない。ただ、村の者が、と問われたので、首を振って否と答えただけ。

マイオスさんと話すユリジェスは、ちょっとだけ柔い雰囲気を見せていた。こちらに向ける眼差しも、さっきのような、冷たいものではなくなった。

……だ^だけど、忘^われては^はい^いけ^けない。

こ^こいつは^は村^{むら}人^{ひと}を^を虐^{りやう}殺^{ころ}し、村^{むら}を^を焼^やいた^た恐^{おそ}ろ^ろしい^い男^{おとこ}だ^だとい^いう^うこ^こと^とを^を。

第九話 邂逅（後書き）

ユリジェスとの出逢いでした。

邂逅 - side : ユリジェス -

ここはキュウカルザ大陸の東に位置する、ソルフェーニユ王国。長い戦乱の時を経て、農業、漁業、商業と、ともに盛んな活気ある大国へと成長し、国王オルセイ ソルフェーニユのもと、穏やかな治世が為されるようになっていた。

数年前、父王オルセイの正妃ルーテシア妃が亡くなり、それから間もなくして、数多い側室の中から次の正妃が選ばれた。

新しい正妃は、第三王子リシャルの実母エドウィナ妃。三十三歳と美しく年若い王妃エドウィナは、側室であるときから誰よりも国王の寵を得ていた。

ある夜、王城で開かれた宴の席でのこと。

第二王子であるわたしは、美しく着飾った女性たちに囲まれて辟易としていた。義理は果たした、そろそろ抜け出そうか、と考えていた、そのとき、ふと目を向けると、途中退席していたエドウィナ王妃が、青ざめた顔で戻ってくるのに気が付いた。その後も宴の間中、心ここにあらずの状態で、彼女の身に、なにか深刻な問題が起きているようにみえた。

しばらくの間はエドウィナ王妃に注意を向けていたものの、相次ぐ問題に日々忙殺され、その知らせが届いたときには、わたしは容易に動きが取れぬ状態となっていた。

夜を徹して問題を片付けると、残った政務を信頼できる者に任せ、少数の従騎士とともに急ぎ馬を駆った。北へ、北へ。小さな村で、乗り潰した馬を換え、陽光が降り注ぐ草原を横目に、ただひたすら駆け抜ける。目指すは目の前にそびえ立つハイビスラ山。そしてその麓にある小さな村。

王都から馬を乗り継ぎ駆けること半日。まだかろうじて日の光が残る夕刻、懐かしいシルバの村へ着いて愕然とした。そこは既に、茶色く焼け落ちた火災の跡地と化していて、家々は原型もとどめないほど炎と熱風に破壊されていたのだ。

「いったい何が起きたのだ！」

城へ届いたのは『突然、村に住む数人が凶暴になり、住人を次々と襲いだしたので助けてほしい』という救助要請だった。それに對しわたしが指示したのは、突然荒れ狂いだした村人数人の制圧と捕獲、さらに怪我人の救助、住人の保護のはずだった。それが、なぜこのような事態になっているのか。

小隊長を呼び厳しく詰問すると、わたしの命令書にあつた指示どおりに、村の全てを燃やした、というのだ。震える手から書の現物を受け取ると、使用されている用紙自体が偽物だということがすぐにわかった。代筆を頼むことが多いので、字体が違うのはいつものこと。しかし、必ず添えられているはずの印章が、これにはなかった。

命令書が、偽造されていたのだ。

小隊長によると、部隊が到着したときにはもう、村人たちは絶命

していたという。部隊の兵たちが生存者を捜したが見つけられず、せめて、と村の隅に寄せた遺体から遺品をひとつずつ残し、油をかけ火をつけて、彼らの冥福を祈った、というのが事の顛末だった。

自分の目で、鎮火したばかりの村の被害を確認すると、天幕へ戻り、布と木でできた簡易イスに身を投げ出した。

この小さな村で、いったい何が起きたのだろうか。詳しく調べて、何が何でも真相を突き止めなければ。

再び立ち上がり、入り口の幕を上げて外に出ると、シルバの村までもに駆けつけた男、マイオスが待っていた。

「ユリジェス様、み……」

「皆はもう集まっているか」

マイオスの言葉に、かぶせるように問うと、是と答えた彼は脇によけ、わたしが通る道をつくった。

さらなる生存者の搜索と救助、遺体の身元確認の急務、逃れたかもしれない狂人の搜索など今後の対策を話し合い、それぞれに必要な指示を出す。

全て終わったあと、わたしはひとり外に出て、雲に覆われ闇に落ちた空を見つめた。

- - いつになったら、彼らの無事を確認できるんだ！

ふっと、鋭く息を吐く。きつく閉じた目元を左手で押さえる。しばらくの間その場に立ち尽くし、湧き上がる焦燥感をどうにもできないでいると、土を蹴る乾いた音が聞こえてきた。

目元から手を離し顔を向けると、灯火の光にキラキラと輝く金色の犬が、こちらへ駆けてくるのが見えた。立ち止まったその犬は、ほんの少しの間、ジッと私を見つめると、くわえている何かを地面に落とし、再びこちらを見上げた。

「お、お前はっ！ 無事だったのか！？」

目を見張って、思わず詰め寄った。犬に理解できるはずがないのに、わたしは己を抑えることができなかった。

似ているのだ。わたしが無事を祈っている一家の愛犬、ベルジュに。

彼らのことを考えていたから！ 生死を確認しなければならないと覚悟を決めたから！ だから……、つい、見間違えてしまったのだ。

今、目の前に座り、こちらに大きな瞳を向けている犬は、ベルジュとは違い、まだ幼い子犬だった。

「やっぱり、似ているな……」

わたしが首を横に傾げ、懐かしげに見つめると、子犬も同じように首を傾げる。反対側に傾けると、またそれも、後に続いた。

子犬を目の前に、なんとも言いようのない不思議な気持ちでいたら、それまで穏やかな雰囲気を漂わせていた子犬が、突然、鼻面を高く上げ、薄い耳を立て、その顔を一方へ向けた。

何があるのかと見てみると、それまで無邪気に見えた子犬が急に

精悍な顔つきへと変化した。その変わりように驚く間もなく、子犬は、光のようなスピードで、畑の向こうへ走り去ってしまった。

呆氣にとられたが、あれが向かったのは、聖なる一枚岩、ライデイーヌの石の方向ではなかったか？

黄金の犬が残したものを拾い上げる。そして、それをもてあそびながら思った。

「あの子犬が気になるなら、後を追いかければいい」

そうして、わたしは信頼できる四人、マイオス、マルセリーノ、ケペシュ、エリオットを連れて、ライデイーヌの石へと向かった。

貧弱でみすばらしい、傷だらけの少年。

切迫した犬の声に、急いで駆け戻ったわたしは、それを見つけた。そして、少年が潰される前に素早く移動すると、のしかかる狂った男の腹へ向けて、なんの容赦もなく利き足を蹴り上げたのだった。

今、わたしの前をよるめきながら歩いている、手足の長い華奢な身体。明るく短い髪が、その薄い肩の上に柔らかく揺れて。その身に纏うのは、もはや衣服とも言えないぼろ布。それでも意志の強さを秘めた瞳は中性的な魅力を放っていた。

金色の犬の飼い主なのだろうか、こちらを無視してマイオスの抱きかかえる子犬にばかり、気遣いの目を向けているのがおもしろくない。

自分の方が、今にも崩れ落ちてしまいそうな状態のくせに、と。
支える振りして、必要以上に強い力で腕を掴む。そして、わたし
が彼の視界に入ると小さく満足するのだった。

そんな自分に苦笑しつつも。

- - わたしが庇護していこう

この少年への憐れみと好奇心。ただそれだけのことだと思い込んでいた。この時はまだ。

邂逅 - s i d e : ユリジェス - (後書き)

番外編 3 グリーンは見た! (殿下と子犬) 村と野営地の狭
間にて

に、関連したお話が載っています。

第十話 保護？ 捕獲？

あれから私たちは、シルバ村の隣に設営された、彼らの野営地へと連行されていった。しかし、月明かりも届かない、鬱蒼とした雑木林を歩いてる間中、ユリジェスという名の極悪人が、腕を引つ張ったり急に放したり、とことん私を小突き回すので、目的地へ着く前に足腰が立たなくなり、その場にヘナヘナと崩れ落ちてしまった。歩けなくなつた私は、まるで荷物か何かのように肩に担がれて、野営地へと運ばれていったのだが、それは非常に不愉快で屈辱的な体験だった。私を担いだのがあの銀髪男だし、お腹に肩がめり込んでグエツとなるし、長い脚で歩くたびに上下にひどく揺れるし！

ただ、マイオスさんに丁寧に運ばれた犬だけは、着いてすぐに怪我を手当てしてもらつたので、この犬のためには捕まって良かったのかも、と思い直した。

銀髪男に運ばれて着いた野営地には、小規模ながらも陣が張つてあつた。たまたま近くで演習をしていた部隊が、何かの事情で急遽、今日の昼からシルバ村へ呼び寄せられた、という話だった。……のだが、なぜだろう。

銀髪が揺れる男の背中から顔を起こし、周りを見回してみても、人の姿をほとんど見かけないのだ。いくつも天幕が張られ、あちこちに灯りがついていてのに無人だなんて、何かの映画で観た、夜の遊園地みたい。被害者をたくさん出した火災の後だけに、幽霊が出そうでちよつと不気味だ。

犬を抱いたマイオスさんが、通りがかったお世話係らしき若い男の子に何かを指示した。そして、ユリジェスへ軽く礼をし、天幕の

ひとつに入っていった。

ならば私も一緒に…… と、もがいてみたが、奴が私を放す様子はない。

- どこかでバツサリ殺られるか、それとも、監禁して尋問されるのか。なんてったって、少なくとも、村をひとつ消した男なんだからね。もう、どうにでもなれだ。

それなのに、この男が私を降ろしたのは、外から見るかぎり、この中のどれよりも上品で居心地が良さそうな天幕だった。天幕の中には、布団を十五枚くらい重ねてフカフカにしたような簡易ベッドがあり、私が見たところ、ガーゼのような綿のシーツでキレイにベツドメイクされてある。

- もしかして、ここはこの男の天幕？ なんか無駄に偉そうだし。あの感じの良いマイオスさんの上司みたいだし。

その無駄に偉そうな男は、クイクイ私の腕を引っ張り、布張りの簡易イスに座らせた。

- イヤミなくらいに美形な男

こんな状況じゃなかったら、きっと従姉の志津子ちゃんが騒ぐくらいに素敵な青年なんだろう。だけど、正面のイスに腰を掛けこちらを凝視する男は、明るい照明の下でさらに恐ろしさが増し、どこからどう見ても立派な大量殺人犯にしか見えなかった。

まるで吸血鬼のように美しく、それ以上に恐ろしい男は、しばしの間、正面きつてこちらを睨みつけた後、身を翻して天幕を出ていった。ありがたいことに、私を置き去りにして。

奴が消えた途端、私は糸の切れた操り人形のように、クタクタと、イスの中へ沈み込んだ。その姿勢のまま、心の中でユリジェスに毒を吐く。

「……だけどね、いくら綺麗な銀髪でも、若白髪だと思えばその魅力も半減だったのよ。残念だったよね

天幕のすぐ外で、誰かに何かを指示した後、すぐにあの銀髪男は戻ってきた。

イスに深く腰掛けたユリジェスは、両肘を膝に乗せ、両手の指を組み合わせてから、口を開く。

「おまえは、シルバ村の者ではないと言ったな」

天幕に響く深い声が、私の胸を騒がした。鋭い視線に負けないように、男の目を真っ直ぐ見たまま、コクリと頷く。

「ならば、なぜ、あの場所にいた？ 村の者しか入れないはずの、ライデーターの聖地に……」

そんなことを言われたって、私にだってわからない。なぜ、このような危険な場所に来てしまったのか。しかも、その質問を、一番危険な殺人者に訊かれるとは思わなかった。

「……答えられぬか。それとも、答える気がないのか」

唇を噛む私にじれたのか、紫紺の瞳に光が増した。

「……まずいな。なんて説明しよう。」

そのとき、部屋の外から入室の許可を求める声がした。入ってきたのは、栗色のフワフワした髪と、くつきりとした明るい緑の瞳をした男の子。彼は、右手に小箱と布を、左手には、器に入った熱いお湯を持っていた。

「ユリジエス様、遅くなりました。これから彼の手当てを始めてよろしいですか？」

ハキハキ訊く男の子に、ひとつ頷いたユリジエスは、まかせたと呟くと、そのまま部屋を出て行った。

彼を見送った男の子は、私の顔を心配そうに覗き込んでくる。

「大丈夫だった？ ユリジエス様は、いつもは優しいんだけど、今日は凄くピリピリされててね。本当に大変なことが起きたから……」

目を伏せた男の子は、次の瞬間にはパツと顔を上げて、ニツコリ笑った。

「僕はラキ。ユリジエス様のお世話をさせていただいてるんだ」

「……私はマリエ。気がついたら、あの村で倒れていたんだけど、何かなんだかわからないまま林の中を逃げてて。今もなんとか混乱してるみたい」

この世界で目覚めて以来、ずっと、恐怖と緊張で疲弊していた私は、久しぶりの人の温もりに触れたことで、何も考えずに答えてしまった。

「君っ、シルバの村で倒れていたのっ？ 何か知らない？ 誰か不審な人物を見かけたとか、何かおかしい物を見たとか……」

突然、矢継ぎ早に質問してきたラキに戸惑った。

「あの……」

「ご、ごめん。村のことでちょっと知りたいことがあったから、つい……」

そう言って、ラキは、布を熱いお湯に浸した。

その後、彼は黙々と腕の治療を続け、今度は脚の具合を見ようとしたから、まずは体を拭きたいと申し出て、しばらくの間、天幕から出て行ってもらった。

第十一話 黄金の子犬 白銀の悪魔

素直に出て行ってくれて良かった。もし、あのままラキに脚まで治療をされていたら、さすがに私が女だということがバレてしまっただろう。

なんの演技もしてないのに、当然のように男だと思われるのはシヨクだった。けれど、この場合は好都合だと喜ぶべきなのかもしれない。せつかく私を男だと思い込んでるのだから、この際無理に訂正しないで、このまま勘違いをさせておくのが一番良いのだろう。不本意だけど。

気分を変えて、天幕の中を見回すと、細々とした物が乗る簡易テーブルの横に、顔が映るほど磨かれた金属の鏡を見つけた。自分の無惨な姿に情けない思いをしながら、それを覗き込むと……、舞台メイクがどうなっているかと心配していたが、噴き出した汗とシルバ村でかぶった煤とが、メイク落としの役目を果たしたらしい。あの小川の水で、スツキリまとめて洗い流せたので、今はちゃんと男の子に見える。

ちゃんと男の子に。

はあ……

大きなため息を、複雑な思いと一緒にはき出した。

それにしても、本当に酷い格好だ。薄汚れたボロ布にすっぽり覆われた体は、煤にまみれて真っ黒だし、頭はドロドロでクシャクシヤ。公園に寝泊まりする人たちの方が、ずっと清潔で人間らしく見える。

ベッドの脇には、簡易イスと同じ作りの、パーテーション、いわ

ゆる間仕切りが立ててあった。その裏に回り、お湯で濯いだタオルを何度も使って、ひととおり体と髪を清潔にした。それから、傷だらけの脚の治療を自分で済ませた。先にラキが腕を治療してくれたので、それを真似して簡単に。適当に。

数種類の薬瓶や、汚れたタオル、血がついた布などの後片付けをしていると、ラキが天幕の外から声をかけてきた。

「マリイ、そろそろいいかな？」

ラキは、マリイという発音がうまく出来ない。『松井』とか『藤井』みたいな発音で『マリイ』と呼ぶ。元の世界でのことを、ふと思いついて、声を出さずに少し笑った。

「うん、大丈夫。待たせてごめんね」

「あれ、脚は自分で治療したんだ？　ちゃんとできた？」

ラキは優しい少年だ。騙すのは心苦しいが、この場所に、他に女性がいるのかわからない。野営地で見かけたのは、今のところ、こちらを興味深く見るむさ苦しい男達ばかりだから、この後、どこへ連れて行かれたとしても、自分の身を守るためには女であることを隠す方がいいと思ったのだ。……出来る限りは。

「ユリジェス様はもう少し遅くなるから、マリイを別の場所に案内するよ。あ、僕や他の小姓仲間も同じ天幕だけど、大丈夫？　いいよね？」

『別の場所』と聞いて、私の体が緊張したのを、敏感に感じとったのだろう。すぐに言い直してくれた。

ラキが汚れたお湯を、私が薬箱と布を手を持ち、一緒にそれらを片付けに行く。

そうして小姓仲間の天幕へ案内される途中、犬を預けたマイオスさんと鉢合わせした。

- -あの犬はどうしてるんだろう。思いきつて、この人に聞いてみようか。ああ、無事でいてくれたらいいのに

ダークカラーの短髪で、がっちりしているけど穏やかな雰囲気の二十代半ばの男性、としか認識できてなかったマイオスさん。明るい火が灯る野営地では、その姿がはつきり見えた。

スツキリした短髪は、思った通りの焦げ茶色。こんがり日焼けした肌。この世界の人間としては、地味な外見の中で、唯一、紅い瞳がスパイスとなっていた。

マイオスさんは、生真面目な、だけど柔らかな笑みを浮かべ、腰をかがめて視線の高さを私に合わせると、言った。

「君の子犬は元気にしてるよ」

- -子犬……？

「後ろ肢をやられているけど、命に別状はないから、安心しておいで」

「あ、あの……」

言いよどんで、ラキを振り返った。

「えっ、なに？ 子犬が怪我してるの？ それは心配だね。……そっかあ。じゃ、先に子犬の顔を見てきたらいいよ。それから天幕に来るっていうのはどう？」

そこまで一気に言い、マイオスさんに訊ねた。

「マイオス様、それでよろしいでしょうか？」

マイオスさんは、かがめた腰をスツと伸ばして頷いた。

「その方がいい。彼を探してるのか、子犬の方も落ち着かないみたいだから」

「では、後ほど迎えに参りますので、マイオス様、場所は……」
「第六だ」

「はい、かしこまりました。じゃ、マリイ、後でね！」

最後にひとこと私に言うのと、せわしなく走っていった。

その元気な背中を見ながら思う。ラキは、十六歳の私より少しだけ年下に見えるけど、いくつなんだろうか。同じくらいの背丈に、成長期特有のひよろりとした体つき。可愛い顔も、これからどんどん男らしくなっていくのだろう。あと十年もしたら、マイオスさんくらいになるのかな。

……なんて、隣に立つマイオスさんを見上げると、彼はどこか気遣わしげな様子で、ラキの走り去った方を見ていた。

「さあ、子犬が待っている。早く行ってやろう」

堅かった表情を、また柔らかく戻したマイオスさんは、私の背中を押して、連立する天幕の間を歩き始めた。

「あの……」

隣を歩きながら、気になっていたことを聞いてみる。

「さつきから子犬って言っていましたけど、あの犬はもう成犬ですよ
ね」

驚いているのか？ その言葉にマイオスさんの目が一瞬見開いた。

「……いや。あれは、あの犬種にしては小さいよ。まだ生後半年も
経ってないくらいだろう」

今度は私が驚いて、目を見開く。ふたり、声もなく見つめ合つて
ると、急に隣から深い声が聞こえてきた。

「こんなところで立ち止まって、何をしている。マイオス」

――ひっ！

あいつだ。あの銀髪男だ。気配もなく近付いてきたので、気付か
なかった！

「はっ。これからこの少年を、子犬のいる場所へ連れていこうと思
いまして」

マイオスさんは、ユリジェスが近付くのを察していたらしく、落
ち着いて答えた。

「それはラキから報告を受けている。それより、なぜ…… ま
あ、いい。わたしも行こう。子犬が気になる」

そうして、先ほどから少しずつ増えてきた黒服男たちの好奇の視
線を浴びながら、私たち三人は歩き始めた。

連立する天幕の間を抜け、あの犬の待つ第六へ向かう。二つの月が見守る中、マイオスさんは、子犬の状態を説明し、ユリジェスは黙ってそれを聞いていた。

『第六』と呼ばれている天幕は、野営地の外れに張ってあった。中には荷物がうず高く積まれていて、左手の奥、チラチラ灯りがともる場所に、あの犬がいた。

私たちが来るのをいち早く察していたのか、ふかふか柔らかそうなマットに行儀良くお座りする犬は、その後ろに隠した尻尾を、すごいスピードで細かく振っている。

期待を込めた表情で、じっと私だけを見つめている。じれったそうに、両肢を交互にフミフミして。

- - ああ、怪我してるのに、あんなに興奮して。今にも飛び出して来そうじゃないの。

大丈夫だとわかっていたのに、マイオスさんから様子を聞いていたのに。

あれほど勇敢な犬の、そう、まだ生まれて半年も経たない、幼い子犬の、そんな甘えた様子を目の当たりにしたら……

- - ああ、もう、じっとしてなんかいられない！

思わず駆け寄り、膝を付き、温かい子犬の体を、愛情を込めて抱きしめた。

腕の中の子犬は、さらに激しく尻尾を振って、喜びを全身で表現している。

…… はああつ、と安堵の息をついて体を離れた私は、涙のにじむ

目で、もう一度、犬の全身をチェックした。

- 元氣そうで良かった。どんな扱いをされてるか心配だったけど、ちゃんと治療してもらってる。キレイにしてもらってる！

「この子を助けてくれてありがとう！ マイオスさん！」

感極まって勢いよく振り向いた私は、照れ笑いをしながら、マイオスさんに礼を言った。
そのとき

「……いい度胸だな、おい」

銀の悪魔が、低い声で囁いた。

第十二話 初日終了

「……」

「う……ん、わかったから。もう、やめ……」

私は今、とつても大柄な子犬にのし掛かれて、もがいている。

「わかったわかった。そろそろ起きるから。もう夕方だもんね。……うわあ、舐めるのやめてー！ べろんべろんになっちゃうよ」

私の耳元をくすぐる焦げ茶色の大きな鼻。ひんやりしたそれを優しく手のひらで押し返し、地面に敷かれたマットの上で、筋肉痛に顔を歪めながら体を起こした。

ここは、荷物が積まれた第六天幕の中。子犬がお世話になっている天幕に、昨夜は私も一緒にさせていただいた。すぐ横では、その子犬が舌を出して微笑んでいる。いつまでも『子犬』や『わんこ』じゃ可哀想だし、そろそろ名前をつけてあげないとね。時間をかけて、この子にふさわしい名前を付けてあげようと決めると、にっこり笑って挨拶した。

「おはよう、わんこ。よく眠れた？」

掛けていた薄手の毛布を手にとると、ふと昨夜のことを思い出した。……いや、もう既に夜明けだったか、あの後、私は、銀の悪魔からあんまりな仕打ちを受けたのだった。

「……いい度胸だな、おい」

と、どこから、不穏な台詞が聞こえてきたような？ 首を傾げる私に向かって彼が言った。

「……っ、おまえは！ わたしの言葉はことごとく無視するくせに、マイオスには何を懐いている！」

親切なマイオスさんにはかり、感謝して愛想良く接するものだから、性悪な銀髪の悪魔がとうとう怒ってわめきだした。そういえば、たしかにこの男とは、まだ、ひとことも話してない。だって怖いんだもん。

「ほら、なんとか言ったらどうなのだ？ 馬鹿者が」

「いだだだだっ！」

めいっぱいの力を込めて乙女の鼻をつまみ上げるとは、何を考えているのだ、この殺人鬼は！ 痛いじゃないか。

私は真っ赤になっているだろう小さな鼻を押さえ、銀の悪魔をギツと睨みつけた。

「いきなり何するんですか！」

屈辱に震えながら、我慢できずに怒鳴りつけた。

「だってマイオスさんは、この子を助けてくれたんですよ！ 酷い

傷を手当てしてくれたし、毛並みだって、ほら、こんなに綺麗にしてくれて、艶々ピカピカ！ マイオスさんはですね！ 命の恩人……」

「ほう、そうか。ならば、わたしだって恩人だな」

灯火の下で、つり上がった紫紺の瞳が、さらに色濃く変化していく。

「おまえを窮地から救っただろう？ なのに、何を話しかけても返事がないとはどういうことだ？ ん？」

ああ、そうだ。たとえ残虐な大量殺人鬼だったとしても、私はこの男に危ないところを救ってもらったのだ。小突かれたり、引つ張られたり、担がれたり…… あれからいろいろあつたから、今の今まできれいさっぱり忘れてたけどね！

気が進まないながらも、しぶしぶお礼を言う私に

「一応、感謝はしてるんだな。ふーん。……ならば、何か礼をしてもらおうか」

右の口角を上げ、口元だけで笑って見せる冷たい眼差しは、私の背筋を凍らせた。

……うっ、怖い。

やっぱり、この男は殺人犯。その惨状を自分の目で確かに見たじゃないか。これ以上関わっては取り返しのつかないことになる。どうにかしてこの場を切り抜けないと。

……何か、なんでもいいから何か言わないければ！

切羽詰まって、左右に目が揺れる。

「だ、だけど！ もちろん感謝はしてるけど！ わた、ぼ、僕は、ライなんとかの石のことなんか知らないし、第一、何が起こってるかも全然わからないし。だからとにかく、この子連れて、今すぐにも出て行きますから、安心してください！」

「それは無理だな」

間髪入れずに私の言葉を否定した悪魔は、組んでいた腕を外し、子犬の前に片膝をつく、こちらに向かってニヤリと笑いかけた。

「少なくとも、これには無理だ。傷が深くてまだ歩けない。……ほら」

柄にもなく、優しい手つきで子犬の背中を撫でながら、赤く染まった後ろ肢の包帯を見せた。私と再び会えた喜びに、尻尾を振り過ぎたせいだろう。このおバカ。

ガツクリと力の抜けた私の横で、マイオスさんが黙々と子犬の包帯を巻きなおし始めた。

すると、今度はラキが天幕に入ってきた。

「失礼します。ユリジェス様、マリイを迎えに参りました。……えええっ、ベルジュっ!？」

ラキは、子犬を見た途端に声をあげ、紅潮した顔を輝かせながら駆け寄ってきた。

子犬は、ラキの声にぴくんと反応したが、マイオスさんにガツシリ押さえつけられて動けずにいる。また傷が開いたら大変なものね。良い子だ、わんこ。

「ベルジュっ！ ベルジュっ？ あれ、違う？」

「似ているが、これは違う。わたしも初めて見たときは間違えたが、これは、まだ体の小さな子犬だな、マイオス」

「ええ、そうですね。たぶん、生後半年にも満たない子犬でしょう。

……ああ、押さえつけて悪かったね。傷は開いてないか？」

「はあ……、そう、です、か。 そうだ！ ねえ、マリイ。君は今朝、シルバ村に倒れていたんだよね？」

「あ……」

「……おまえは、また答えないうもりなのか？ ラキの報告を受けて、わたしも詳しい事情を訊きたかったところだ」

「ええっ、ユリジェス様、まだマリイに訊いてないのですか？ いったい何をしていたんですか。 - - ねえ、そういえばマリイ、目覚める以前の記憶はないんだよね。じゃあ、この犬とはいつ会ったの？ この子の名前は？ 親犬がどこにいるか知ってる？」

「ああ、ラキ。こいつの態度に腹が立つたからな、まだ訊く暇がなかったのだ。 - - おい、少年。わたしからも質問があるのだが。：

……おい、おまえ、聞いているのか？」

口々に話し始めたかと思うと、矢継ぎ早に質問されて、なんか、もう、ほとほと疲れてしまった。

- - うっ…… ぐるぐる目が回る。ああ、もうダメ。このままここで、子犬と一緒に眠りたいよう。

そう思っただけでお願いしてみたら、案外簡単に許可が降りた。もちろん見張り付きだけどね。私ってば、不審者だから！

ついでに食事のことも聞かれたが、丁重にお断りした。子犬のごはんはお願いしたけれど、私の方は、さっきいただいたお水で充分。疲れすぎて、胃が何も受け付けないし、もうこれ以上動けない……

二十四時間以上も激しく動き続けたせいで、気力も体力もゼロとなった私。

質問の答えを期待し、おとなしく待つ男たちをその場に放置したまま、……私は、子犬の温もりに包まれて、安らかな夢の中へと落ちていった。

第十三話 ユリジェスの側近たち

子犬に無理やり起こされた私は、しばらくの間、眠りに落ちる前の慌ただしい出来事をひとつひとつ思い返していた。いったいこの身に何が起きているのか、これから先どうすれば良いのか、解決策が何一つ思い浮かばない。

上の空で毛布をたたんでいると、いやにセクシーで甘い声が天幕の入り口から聞こえてきた。思考に沈んでいた私は、ふと我に返る。

「おはよう、少年」

誰だろう、と肩越しに目を向けると、そこには、緩やかにウエーブした若草色の髪を持つ、ゴージャス男が立っていた。

「やっと目が覚めたようだな。待ちくたびれたよ」

そう言つて、彼はゆっくりと近付いてきた。うなじに片手を差し込み、髪をかきあげる所作はとても優雅だ。品が良く丁寧な物腰。だけど、グリーンの瞳が放つ視線の鋭さから彼がこちらを警戒していることがよくわかった。

「君がマリイだね」

「いえ、マリイです」

「……マリイ、かい？」

いくら見た目と声がセクシーなゴージャス男でも、やっぱりマリイとは言えないらしい。ラキやマイオスさん同様、『松井』『藤井』と同じ発音で私を呼んだ。

「はじめまして、マリイ。マルセリーノ ラウルだ。昨夜はユリジエス様と一緒に、わたしもライディーヌの石のある場所へ行っただよ」

昨夜…… と言うと、そっか、彼はあのゾンビ退治をした一人だったんだ。

少し垂れたグリーンの瞳に、泣きボクロがひとつ。マルセリーノさん、という名前なのか。セクシーな彼にピッタリ。フェミニスト…… というか、たらし…… というか、さぞかし女性にモテるんだろうな。そんな感じ。

「…… あの指のない女を斬るとき、一瞬ためらってたし、ね」

ボソツと呟いた声が聞こえたかわからないが、彼はかすかに眉をひそめた。

「…… ラキを呼ぶから、少し待っててくれないか。わたしはまた外で待機してるから」

マルセリーノさんは、そう言い残すと、天幕から出て行った。

―― ああ、そういうこと。彼が私の見張り役だったのね

毛布をたたむ手を止めたまま、首を傾け、考えに沈み込んでいると、静かだった天幕に、突然元気な声が響き渡った。

「お待たせ、マリイ！ よく眠れた？ 昨日はここに来るまですごく大変だったんだってね。自然に起きるまで寝かせておくよう、ユ

リジェス様のご指示があつたんだよ。もう夕方だし、お腹空いたでしょう。でもその前に水を浴びない？ あ、着替えは僕のを用意してるからね。さあさあ、わんこ、これは君のごはんだよ」

ラキは、自分が着ている小姓のユニフォームの胸元を誇らしげに叩いてから、子犬の口元に餌の入った深皿を寄せてあげた。

「うわあ、食事！ 着替え！ ああ、でもでも。すっごくすっごく嬉しいけれど、さすがに水浴びはマズいよね。女の子だって絶対にバレちゃう」

「今、みんな出払っていてね、水場にはまだ誰もいないはずだから、マリイ一人で入れるよ。用事があるから僕もいないけど、一人でも大丈夫だよな？」

「も、もちろん大丈夫！ 私ってば汗だくで気持ち悪いし、水浴びでスッキリしてから、そのパリッとしたオフホワイトのユニフォームに着替えたい！ 他に誰もいないなら、きつとバレないよね」

「ちよつと出掛けてくるから、いい子で待っててね」

柔らかいお粥のような餌をペロリと平らげた子犬を撫でて、私とラキは、水場へと歩いていった。

そういえば、ラキが初めて子犬を見たとき、『ベルジユ』という名前の成犬と間違えていたっけ。成犬になると、どれくらいの大きさまで成長するのだろう。今度、訊いてみようかな。

こちらは真夏なのか、まだまだ明るく日が長い。西日の強い中を歩いていると、あつという間に日焼けしてしまいそうだ。

シルバ村と野営地のすぐ裏側には、頂上の尖った大きな山がひとつ、晴れ渡った青い空にそびえ立っている。眩しさに目を細めると、そこから、二つの月がうつすら顔を出し始めているのが見えた。

脱衣場となっている小さな天幕の横に、川幅が三メートルもない小川が流れていた。それを跨いで張られた幕が、立派な目隠しとなっている。小川のほとりにはスノコが敷き詰められ、木製の器が積み重ねてあった。

見張り役だったセクシーなマルセリーノさんは、ラキと交代したので今はいない。そのラキが消えてしまうと、私は独りきりだ！おかげで思う存分体を磨き、髪を擦ることができた。

こちらの世界は石けんもレトロだ。香りがなく、乳白色の素地に粒々が混ざり合っている。セレブの奥様方が趣味で手作りしそうな石けんは、天然素材で使用感がとても良く、こんなに幸せな気分を満喫したのは久しぶりだった。

一度ここに戻ったらしいラキは、着替えの服を脱衣場に置いて再びどこかへ行ってしまうていた。

着ていたドレスの残骸と下着をぼろ布で包み込んで始末し、水場の外に顔を出すと、黒服の男たちが続々と帰ってくるのが遠くに見える。野営地の外でいったい何をしていたのだろうか、彼らは非常に疲れているように見えた。

その場でしばらく待っていると、両手いっぱい資料と、パンや果物を入れたカゴを持ったラキが走ってきた。私たちは、同じくら

いの背丈に、同じような痩せ具合だ。ひよろつとした体格の私たちが、同じ作りの服を着ていると、なんだか双子みたいで笑ってしまう。

「ごめんね！ 夕食までまだ時間があるから、とりあえず、これでも食べてようよ。桃が甘くて美味しいよ」

- - おお、この世界にも桃があるとは！

ニツコリ笑ってお礼を言い、両手で持った桃に、ありがたくなぶりついた。

そして、今、再び独りになった私は、見張りもつけずに天幕の間を歩いている。

その見張りのはずのラキは、山のような資料を渡しに行くと言って、どこかへ消えてしまったのだ。残された私はというと、ひとりでユリジェスの天幕へ行くように言われていた。

- - 嫌だ。逃げたい

殺された人達のことを考えると、あの男に会うのが恐ろしくて仕方なかった。目を瞑れば自然と浮かんでくる村人たちの無惨な姿。折り重なるように倒れて、その体が燃えて……。今も鼻をつく、鉄錆びと煙の臭い……。

- - いつか、私も、ユリジェスに殺されるのだろうか？

背筋がゾクツとしたとき、剥き出しの首筋に強い視線を感じた。

おそるおそる振り向いてみると、そこにいたのはこちらを凝視する黒服の男、二人。

思わずジリジリと後ずさる。彼らの強い眼差しに追い詰められ、入室許可の伺いも立てずに、すぐ横の天幕へ飛び込んでいた。

「……やだやだ！　よりによってこの男の天幕に飛び込むなんて、なにやってるの、私？」

考えもせずに飛び込んだそこは、ユリジェス専用の天幕だった。室内には、ユリジェスに加えてマイオスさんと……、もうひとり、後ろに撫でつけた赤毛の髪と明るいブルーの瞳を持つ、ユリジェスよりもずいぶん年上らしき男が立っていた。

「ふん、やっと目覚めたか。水を浴びてすっきりしたようだな」

私を部屋の中央へと手招きし、さらに言葉を重ねる銀髪の男。

「これはケペシュ。私の側近のひとりだ」

「やあ、はじめまして。ケペシュ　クロフォードです」

彼は、私がいろいろあった頃、親身になってくれた担任の先生を思い起こさせた。とても穏やかで、温かい感じの大人の男性だ。

「はじめまして、ケペシュさん。マリエ　タカハラと申します」

満足げに頷くケペシュさんの後ろで、銀髪男がまた吠えた。

「まったくおまえは何なのだ！　わたしには一度たりとも名乗らなかったくせに」

「だって、それは……」

この男は、いつだって正当な理由もないのに私に噛みついてくる。私はビクついてる自分にだんだん腹が立ってきた。

「僕も自己紹介しようと思ってたのですが、そんな暇もないうちにいきなり小突かれたり、荷物のように肩に担がれたり、鼻を捻り上げられたりと酷い目にあつたので、名乗る機会がなかったんですよ。第一あなただって名乗らないではありませんか」

「……おまえ、まさか、わたしのことを知らないのか？」

彼は、銀髪をかきむしっていた手を止めて、驚きのオレ様発言をかました。

「そんなの知ってますよ。あなたユリジェスさんでしょう？ みんながそう呼んでました。ね、マイオスさん？」

「……………」

「……………」

「……………」

天幕に、不自然な沈黙が流れる。

「えー、と、マリイ？ そろそろ質問してもいいかな？」

大人なケペシュさんが、気を取り直して質問を始めた。

「はい」

「あー、君にとってわたしは、はじめまして、ではないと思うのだが、覚えているかな？」

「え、と……、はい、覚えています。実は……、大岩の広場で、あなた方がゾンビを片付けのを見てたんです」

「ゾンビ？ よくわからないが、狂った村人のことだね」

「はい、そうです。……あの時、僕と子犬は藪の中に隠れて、広場の様子を窺っていました」

「やはりそうか。ではどうして、隠れたりなんかしたんだ？ あの状況では、我々に助けを求める方が自然だと思うのだが」

「それは……」

「それは？」

「あの……」

「いいから言つてごらん。何か出て来れない事情があつたのだろうか？」

「それは、あの……、やっぱり何でもありません」

彼らから身を隠した理由が、まさかユリジェスにあるだなんて言えるわけがなかった。彼の所業を私が知っていることは、なんとしても悟られてはならない。村人を殺し村を焼いた真犯人は、この男、ユリジェスなのだから……

ケペシュさんが優しく促すその隣には、腕を組んだ銀髪の悪魔が、何もかもを見透かすような鋭い目でこちらを睨んでいた。

そのとき、どこかで見た覚えのある少年が、慌てふためいた様子で天幕に駆け込んできた。金茶色をしたおかつぱ頭の黒服少年は、必死な様子でユリジェスに訴える。
「いったい、どうしたんだろう？」

「たたた、大変です、ユリジェス様！ たった今、早馬で知らせが入りまして、砦のフェルミナン侯爵が大怪我をされたとのことですよ！」

その言葉が放たれた瞬間、彼ら三人が凍りついたのを肌で感じた。

「……エリオット、それは間違いないのか？」

いち早く立ち直ったユリジェスが、顔を強ばらせたまま、その黒服少年に訊ねる。

「はい。確かに知らせを受けました」

唇を噛み締めうつむくユリジェス。眉を寄せたマイオスさんが、そんな彼を心配そうに見つめている。

「まさか、誰よりもお強いあの方が……、ありえません」

ぼつ然とした様子のケペシュさんが、力なく呟いた。

男たちは、静まり返った天幕の中で、それぞれの思いに言葉も出ない。どうやら私は、場違いなシーンに混ざっているみたいだ。余計な注意をひかないよう、足を潜めて静かに出入り口まで移動する。あと少し……、というところで、人払いしてあるはずの天幕の入り口に、貫禄のある白髪混じりの男性が姿を見せた。

「勘違いするな。わしはほんの少し、肩を怪我しただけだぞ」

その威厳ある声を聞いた途端、うつむき加減だったユリジェスが、弾かれたように顔を上げた。

「じ、老体……」

あのユリジェスが、声を詰まらせている。

「……よくぞ、無事で。まさか、あなたが遅れをとると思わなかった」

他の男たち、……特にこの知らせをもたらした可哀想なエリオット少年は、この場にいるはずのないカクシヤクとしたご老人を前に、目を丸くして固まるばかりだった。

第十四話 - 種 -

ユリジェスたちが着ているのは、黒をベースとした騎士の制服で、折り返した袖口や、衿のラインなどがシルバーのポイントとなっている。その一方で、フェルミナン侯爵のものは、黒地までは同じだけれど、そこに赤がポイントとして縫い込まれていた。

豊かな髪はオレンジと白がほどよく混ざり合い、同じ色合いの口ひげを、引き締まった唇の上にたくわえている。思わず背筋が伸びるほどの厳しい眼差しも、ユリジェスを見るときだけは柔らかく温かい。

この威厳ある御大の登場で、天幕から出て行くタイミングをすっかり失った私。片隅で小さくなっていたが、正直困惑でいっぱいだった。

「フェルミナン、何があったのかはわからないが、とにかく無事なのだな？」

「見てのとおり、ピンピンしておりますぞ。殿下。わしが襲われたのは……」

「……はあ？ 殿下？ ……殿下。……殿下。殿下といえば、王子とか王妃とか、陛下に次ぐ地位を持つ者をそう呼ぶよね。王族？ え、なに？ ……まさか、この男がそうだというの？ ああ、なんという悪い冗談。」

「待て。……ああ、来たか、ラキ。済まないがマルイを第六に戻して、そのままマルセリーノを呼び出してほしい」

「……ユリジェスに初めて呼ばれた名前がマルイとは！ あそこはい

いぞ。メンズ館に行っておしゃれな服でも買っておいで。コスプレも似合うけどさ。……でも、まあ、ここから解放されるのはありがたい。気が変わらないうちに、とっととおさらばするでしょう。

またもや、追及の手を逃れることができたこと。威厳のあるフェルなんとか侯爵の登場。偉そうな俺様男が本当に偉い男だったこと……。安堵と驚愕に混乱した頭を抱えたまま、ラキに手を引かれ、子犬の待つ天幕へ帰っていった。道中、温かい夕食のトレイを確保して。

怪我で自由に動けない子犬が、尻尾を振り振りお出迎えしてくれるのを見て、少し気分が落ち着いてきた。

- - ああ、癒されるわー

私を送ると、ラキはすぐに出て行ってしまったが、これから、あのセクシーなマルセリーノさんと呼びに行くのだろう。あの人、私の見張りをしていて全然寝てないんじゃない？ 大丈夫なのかな。

ヨタヨタと歩く子犬を屋外まで連れ出し、トイレをさせる。可哀想に、早く治って普通に歩けるようになればいいな。

そうだ、名前。

「ね、わんちゃん、そろそろ君に名前をつけなきゃね」

天幕に戻り、首をかしげてこちらを見ていた子犬は、まるで私の言葉を理解したかのように、尻尾をせわしく振りはじめた。口角をキュッと上げて舌を出し、茶色い瞳を期待に輝かせる様子が愛ら

しい。

「どんな名前がいいかなあ」

優しい目元に手のひらを添わせ、親指と人差し指の横腹で薄い耳を優しく挟み滑らせる。

「わんちゃん、私ね、この世界で目覚めてすごく不安だったの。何もわからず右往左往していて、初めて安心したのが、君と出会った時なんだよ」

子犬は、気持ち良さそうに目を細めてジッとしている。

「まるでちっちゃな太陽が、藪の中から飛び出してきたみたいで、びっくりしちゃった。……あ、太陽！」

黄金の犬。夜明けの光。ポカポカ暖かくて、キラキラ眩しい。

……うわあ、いいかもしれない！

「サン、サニー、ドーン、ソル、フランス語のソレイユなんて素敵だな。ふふ、でも君は男の子だね」

チラッと目配せすると、子犬は尻尾で応えてきた。

「じゃあね、ルーマニア語で太陽を意味するソアレなんてどう？」

ウォン！ と吠えた子犬は、嬉しそうに伸び上がると、向かい合う私の両肩に、大きな前肢をドッカリ乗せた。

「よし、決まり！ 今から君の名前はソアレね」

大喜びしたソアレは、私の鼻をペロペロ舐めて、感謝の気持ちを伝えてきた。嬉しい、嬉しい、ありがとうって。

食欲旺盛なソアレと、不思議な味付けの夕食を仲良く分け合っていると、一日の仕事を終えたラキが、私たちの様子を見にきてくれた。

「お疲れさま、ラキ」

笑顔の出迎えに、疲れた表情だった彼も、にっこり笑って返してくれた。昨夜から、ずっと働きづめだったのだろう。目の下にクマができている。

再び真面目な表情に戻ると、ラキは、たった今ぐり抜けた天幕の入り口から外の様子を窺い、誰もいないのを確認してから口を開いた。とても、小さな声で。

「マリイ、君、……女の子だよね」

息が止まった。

「驚かしたらごめん」

ラキは少し目を伏せる。そして、今度は至近距離から私の目を覗き込んだ。

「だって君は、どこからどう見ても女の子にしか見えない」

……そう。私は無理に演技をしていなかった。

「騎士の方々が、君を男の子だと思う方がおかしいんだ。きっと、その短い髪のせいだね。女性でそこまで短い髪の人を見たことがないから、マリイは男、そう思い込んでるんだ」

「あの、どうして……」

「大丈夫。誰にも言わないから。君のためにも、男の子だと思わせてる方が安全だと思うし」

「……だけど、ラキの言う ” 身の安全 ” とは、私の想定したものとは意味するところが違っていた。全て後から分かったことだけれど。」

ラキは、一度ソアレをジッと見て、また私に視線を戻す。

「ねえ、教えて」

グリーンの瞳は、どこまでも真剣で。今度は何を訊かれるのか。

「君の髪は、それが本当の色なの？」

「……え？ 私の髪？」

彼は、私の本来の髪の色を聞いているのだろうか、そんな真剣な顔をして。

「いえ、これは明るいブラウンに染めてるの。本当は、黒いのよ」
「……やっぱり、そう、なんだ」

喉を詰まらせる、ラキ。

「……君が眠ってるときにね、毛布を掛けたのは僕なんだよ。そのとき、君のまつ毛が黒いことに気がついて、よく見たら髪の毛の生え際も黒いから、もしかしてそうなんじゃないかと」

「だけど……」

「それに気がついたら、もう君のことが気になって、ずっと様子を見てたんだ。……あつ、水浴びは覗いてないからね！」

真っ赤になつたラキは、少し怒つた口調でまくし立てた。

「黒髪……髪を染めてる違和感から、私が女だと見破つたのね。でも、髪の毛の黒い人なんて、どこにでもいるじゃない。違う？」

「うつん。少なくとも、僕は聞いたことないよ。獣ならともかく、髪の毛の黒い人間なんて」

「獣だなんて……」

「ふふ、黒猫とかね。可愛いよ」

栗色の柔らかそうな髪が、ふわりと揺れた。

そのときが来たのかもしれない。どちらにせよ、これ以上私ひとりで秘密を抱え込んではいられないだろう。このままでは、自分が壊れてしまう。私は、深いため息をついて、覚悟を決めた。彼に全てを話そうと。

この世界に落ちたときのこと、ソアレと出会った経緯、それからどうやってライダー又の石まで逃げてきたか、ユリジェスが村を消した犯人だと思う理由まで、全部。この身に起きた全てを。

長い長い話を、たまに質問を挟みつつ、全て聞いてくれたラキ。

彼は信じてくれただろうか。この突拍子もない話を。
ソアレの背中を撫でながら、ラキの言葉を待った。

そして

「じゃあ、今度は僕の番だね。マリイ、今から話すことは、君に係のあることかもしれない。聞いてくれる？」

第十五話 ラキ ファツォアーコは語る

・ ・ ・ まずは、どこから話そうか。

マリイ、君がこの世界に来てから、まだ二日も経ってないんだよね。

うん、じゃあ、この国について大まかに説明してから僕の話しよう。

ここは『ソルフェーニユ王国』。『キユウカルザ大陸』の東を占める大国だよ。

他国との争いが絶えなかった戦乱の時代を経て、先代国王の治世の下に安定した経済成長が、今も続いているんだ。農業、漁業、商業、全てにおいて成長を続けている活気ある国が、ここ、ソルフェーニユ王国というわけ。

今、この国を治めているのは、オルセイ国王陛下。僕も、何年か前にお会いしたことがあるけど、五十一歳のとても穏やかな方だよ。ユリジェス様は、陛下の銀髪を受け継がれたんだね。銀の髪は、君の国ではどう？ この世界ではとても珍しいんだ。

ユリジェス様は第二王子。二つ年上で二十五歳の王太子ウォレン様とはとても仲が良くていらっしやる……

え？ な、なに？ マリイ、いったいどうしたの。なにをそんなに驚いた顔してるの？

あ、ああ、そうか。ユリジェス様のことだね。うん。ユリジェス様は真正正銘、第二王男子だよ。年も二十三歳で間違いない。……

えええつ、そんなに老けて見えたの？ ああ、マリイってば、なんて暴言を……

はあー。ほんと、マリイって変わってるよね。女の子ならみんな、ユリジェス様に憧れるものなのに。あはは。

見慣れてるって！ マリイの周りには、そんなにたくさんの美形がいたのかい？

ええと、じゃあ、気を取り直して、次は君が倒れていたシルバの村について話すよ。

シルバ村は、この国が出来て以来、ずっとライディーヌの石とともにこの場所に在るんだ。

村を治めるのはファツォアコー族の長。僕の父だ。

……うん、そうだよ。そして、村人はみんな、ファツォアコーを補佐する人々だったんだ。みんな、もう、死んでしまったけど……

だから、今、ユリジェス様が調べてくださってるんだよ。寝る間も惜しんで。

……いいや、マリイ。それは違うよ。君はユリジェス様を誤解しているんだ。あの方は、決してそのようなことはしない。特にシルバ村にはね。

僕の家族とユリジェス様との間には、昔から特別な繋がりがあるし、そうじゃなくても、僕はあの方以上に信頼できる方を知らない。

ユリジェス様のこと、まだ信じられない？

……ああ、家族のことを心配してくれるの。マリイ、ありがとう。僕もね、みんなの安否を早く確認したくて頑張っているんだけど、偽の命令に従って、村人の遺体を焼却してしまったんだって。火を着ける前、かき集めた遺品の中に、父の指輪があったって……

僕も見ただけど、だけど……

……ご、ごめん。なんでもないよ。

ああ、マリイ。ごめんね、喉が詰まったただけだから、もう大丈夫。

ごほん。

……それでね。先を続けるよ。

僕の一族、ファツオアーコは、ある伝説を、代々継承しているんだ。口伝で。

そして、ファツオアーコの長は、ライディーヌの石の聖地へ赴き”大いなるもの”へ、祈りを定期的に捧げている。

あそこへは、許された人間しか入れないはず。それなのに、村の全てが焼け落ちた昨夜、君があそこで見つかったときはすごく驚いたよ。それも、ベルジュによく似た子犬に守られていたでしょう？ ユリジェス様は、僕らのベルジュをよくご存知なんだよ。とても可愛がってくださってたんだ。

ベルジュにそっくりな子犬、ええと、ソアレだったよね？ そのソアレと一緒にライディーヌの石にいた、となったら、誰だって君には何かあるんじゃないかと思うだろう？。

だから、ユリジェス様も君を特別に気にかけておられるし、突然現れた素性の知れない人間だとしても、遠ざけようとしなかったんだ。

ただどね、君が女の子だということは、ユリジェス様にも知られない方がいい。

とても信頼できる方だし、君を排除することは決していないけれど、ね。

……ほら、あの方は、とても男性的な方だし、君はすごく……魅力的な女の子だし、ええと、何か間違いが起きたら大変だから……

うわ、ごめんね。脅かすようなことを言っで。ああ、泣かないで。

……って、マリイ？

ちよつと！ ねえ、君、なに笑ってるのさ。

僕、なにか変なこと言った？ ちよつと、マリイ。笑い事じゃないんだよ。ユリジェス様って凄いんだから！

マーリーイ！ ちゃんと聞いている？ ねえ、マリイ、マリイってば！

第十六話 真実の中に、少しの嘘

何もわからない私をいつも気遣ってくれていたラキ。その明るい笑顔の裏側では、きっと、家族を案じて不安や焦燥に駆られていたことだろう。

それでも、私の心配をしてくれるのが嬉しくて、そして同時に悲しくて……。気を抜けば涙に歪みそうになる顔を、私は無理やり笑顔に変えてみせた。

彼の苦しみを思うと、自分のことのように、たまらなく胸が締め付けられるのだった。

でも、まだ希望はあるはず。

だって、ラキは生存の可能性を諦めてない。ユリジェスだって、寝る間も惜しんで搜索している。

だから、……だから、きっと。

ソアレを挟んで、少し困った顔をしたラキを見つめていると、天幕の入り口に人の気配を感じた。

姿を現したのは、今、話題に出たばかりのユリジェス王子を始め、真面目なマイオスさん、大人なケペシュさん、セクシーなマルセリーノさん、そして可哀想なエリオットくん、総勢五人のゾンビ退治組だった。

そして、さらにもう一人、左肩に包帯を巻いたフェルミナン侯爵が、私を見ながら入ってきた。

慌てて立つラキに続いて、私もイスから立ち上がる。

「マルイ、おまえと犬の様子を見に来たのだが、今、話せるか？」

さっきの話の続きだろう。今まで何度も話す機会を失っているのだ、そろそろ痺れを切らす頃かもしれない。いいかげん私の正体を知りたいはずだ。

「はい。どうぞお入りください」

もう、全員中に入ってるけどね。一応言ってみる。

二つしかないイスにユリジェスと怪我をしている侯爵が座ると、他の者たちもめいめいに樽や木箱に腰を掛けた。私とラキは立ったままだ。隣では、後ろ肢を崩し横座りしたソアレが、興味深そうに私たちを見回している。

「この者が、ライディーヌの石の聖地で発見された少年ですか？」

侯爵の質問に、ユリジェスが頷く。

「彼は、ベルジュと瓜二つのこの犬に護られていたのだ、あの聖地で。名をマルイという」

フェルミナン侯爵が頷いたのを見て、担任によく似た穏やかな雰囲気のケペシュさんが口を開いた。

「わたしからした質問への答えは、先ほど中途半端な状態で終わってしまったね。マリイ、続きを聞かせてもらえるだろうか」

ラキのおかげで、ユリジェスが殺人鬼ではないことはわかったし、ここは下手に隠すよりも、正直に話す方が賢い。もちろん私が異世

界から来た女であることは除いて。

「はい。先ほどは失礼しました。ケペシュさんの質問に、どう答えて良いのかわからなかったのです。村人たちを殺した犯人が、ユリジェスさま……様だと、ついさっきまで信じていたので」

「言いづらいなら」さん” でよい。わたしがシルバ村の人間を殺したと？ なぜ、そのようなことを思った」

「小川のほとりですれ違った男たちです。僕が隠れていたことに気付かず、ユリジェスさんがそう命令を出したと話していました。彼らは、火から逃れた村人を探していたようです」

ポカンと口を開けたまま、ラキがこちらを見つめている。今の私は、さっきまでの、途方に暮れて口数の少なかった女の子とはまるっきり別人だからだ。

私は少年になりきる。若く、好奇心旺盛な男の子だ。一連のショックで、記憶が曖昧となってしまうただけの、ただの無力な少年が、僕”。

覚悟を決めて、キリリと頬を引き締めると、瞳を揺らすことなくユリジェスを見つめた。殺人鬼という誤解のボールが外れたら、もう恐ろしい男には見えなかった。

「申し訳ありませんが、今の僕は、ユリジェスさんのお役に立てるとは思えません。記憶が混乱しているんです。自分の名前ぐらいしか覚えてなくて、シルバ村の道端に、なぜ倒れていたのかも、全くわかりません。これから、……これからどうしていいのか、誰を頼ればいいのかも全然わからないんです！」

- - ああ、本当に、どうすればいいの。どうすれば元の世界に帰ることができるの？ もし帰れなかったら……

悪夢が蘇り、弱った私を容赦なく襲う。

叩きつける雨、ひび割れた窓、煙と血の臭いの記憶が蘇る。めまいを起こした私はギュツと目を瞑り、意識して浅い息を繰り返す。しばらくそうして、湧き上がる恐怖を押さえ込んだ。

「……目が、覚めたら、周囲が燃えていて、……わき道から様子を窺うと、お、折り重なって倒れていた人たちの、ふ、服にも火が、火が、ついていました」

「怖くない。怖くない。今の私は、何をも恐れぬ勇敢な少年なのだから。ソアレ、ソアレ、お願い、私に立ち続ける力を分けてちょうだい。」

震える指を、金色の頭に添わせる。するとソアレは、自分から私の手のひらに鼻先を押し付けてきた。

「ああ、ソアレ」

ふいに、正面に立った誰かが、私の肩をしっかりと掴んで支えてくれた。

「もう良い。おまえが何もわからないということは、今の様子で見てとれた」

キツく閉じていた目を開くと、夜明け前の空を思わせる深い深い紫が、じっと私を見つめていた。

「大丈夫だ」

落ち着いた、低い声。温かな手。汗が、こめかみを流れ落ちる。

「大丈夫だ」

ユリジエスは、もう一度、ゆっくりと言い聞かせるように囁いた。

逸らすことができず、交わり続ける視線。その呪縛を解いたのは、マイオスさんの声だった。

「ユリジエス様、マリイのこともそうですが、この子犬のこともお考えに入れるべきかと思っています」

ユリジエスに向けた赤い瞳を柔らかく細めて、先を続ける。

「今朝方のことを覚えておられませんか？ この子犬は、ラキの呼ぶ『ベルジュ』という名前に激しく反応していました。わたしが押さえ込まなければ、また傷口が開いてしまうほどに」

マイオスさんは、その浅黒く大きな手をソアレの頭に乗せ、グリグリと撫で回した。

「ファツオアーコの犬ならば、少年を聖地へ導くこともあるのかと」
「……マイオスは、これがベルジュの仔と」

「はい。普通、この犬種は毛並みが薄茶色です。しかし、これはベルジュと同じ黄金色。これほど珍しい二匹が全くの無関係と言う方が無理があると存じます」

もう我慢できない、と言っかのように、突然ソアレは尻尾をグルグル回し始めた。ウォールナットの瞳がキラキラ輝き出す。

それまで黙して座っていたフェルミナン侯爵が、ふいに立ち上がり、ソアレの顔を覗き込んだ。いまだ尻尾を振りながらじっと見返すソアレに、侯爵はやりわり微笑みかける。そして、ユリジェスに退出の許可を得ると、傷付いた体を休めるため、ゆっくり歩いて出て行った。

……わしも老いてしまったものだ、と呟きながら。

第十七話 俺様王子の世話係

フェルミナン侯爵が出て行くと、緊張していた場の空気が一気に緩んだ。

「いやあ、まいった。何歳になられても、あの方は全くお変わりないですねえ。わたしはいまだに緊張しますよ、侯爵の前に出ると」
「僕もですよっ！ さっきなんて、僕の勘違いで侯爵を瀕死の重傷にしまったものだから、いつ雷が落ちるかヒヤヒヤしました」

若草色の豊かな髪をかきあげながら、マルセリーノさんが声をひそめて囁くと、すかさずエリオットくんがそれに答えた。

その間に、ユリジェスが私を侯爵の座っていたイスへ促す。マイオスさんは、我関せずな様子でソアレの耳元を掻き、ラキは、心配そうにこちらを見ていた。

「赤の騎士団団長から顧問になられて何年経ったかな、それでもフェルミナン侯爵は、騎士団の本拠地、ラキナ砦をたびたび訪問されているのですからね、熱心なお方です」

「今回もその帰りだったんですよね？ ユリジェス様を心配された侯爵がここへ向かう途中、怪しい者に襲撃されたとか。その者が生きていれば……、残念です。シルバの村人を全滅させた犯人とわかったのに、自害させてしまうなんて！」

静かに話すケペシュさんに向かって、エリオットくんが悔しそうに訴えた。

そして、ラキは。

「……………」

「あつ、……ごめん、ラキ。君が一番悔しいはずなのに」
「……いいえ、ありがとうございます。エリオット様」

エリオットくんは、ピシヤリと自分の額を叩き、気まづげに謝ると、無理して口角を上げたラキを、痛ましそうに見ていた。

「……でも、まあ、フェルミナン侯爵がご無事でなによりでしたねえ、ユリジェス様」

場の空気を変えるように、泣きボクロもセクシーなマルセリーノさんが口を開いた。ユリジェスは、そうだな、と無表情で頷く。何を考えているのか読めない人だ。

「マリイ、フェルミナン侯爵は、我々の剣の師匠なんだよ」

マルセリーノさんは、反応の薄いユリジェスから、こちらへと話を振ってきた。

「我々、と言いますと、ユリジェスさんですか？」

「あ、ああ。そうだよ。……君は、なんというか、すごいねえ。ソルフェーニユ王国第二王子のユリジェス殿下の前に、全く気後れしないなんて」

「はあ。ただ、彼が殺人鬼でないことがわかって安心しただけです。それに、ソルフェーニユ王国についての記憶もないのですから、気後れもなにも……」

今のユリジェスさんは本当に怖くないのだ。正直なところ、優しいとさえ思う。だけど、私の態度はこの世界では考えられないほど

不敬なのだろうか。少し心配になってきた。

ま、いいか、と肩をすくめ、ユリジェスを見ていた視線をマルセリーノさんに戻すと、彼は、その垂れ目を精一杯見開いて驚きを表現していた。

「うんうん。色っぽい流し目より、その方がずっと好感が持てるよ力を抜いた私は、少し笑って背筋を伸ばした。

私は、イスに座ったときから男らしく見えるように、脚を拳二個分だけ広げている。肘を少し曲げ、脇を浮かせて両の手を軽く握り左右の膝に置く。これは、男役演技を勉強をしていたときに学んだこと。身のこなしひとつで、そんじょそこの男よりも、よほど男らしくなれるのだ。

ユリジェスは、そんな私を黙って見ていた。そりゃそうだよね、いくらソアレが懐いていたとしても、私自身は怪しい少年でしかないんだもの。

私が本当に落ち着きを取り戻したか、確認していたらしいユリジェスは、少しためらいながらも訊いてきた。

「マリ……マルイ、もう震えは止まったか？ おまえが見たのはそれほど酷い光景だったのか？」

おお、俺様王子が心配してくれてる。

「……たしかにあの光景は忘れられるものではありません。ですが、……それだけではなくて、僕は以前、事故に遭ったことがあるんです。そのときのことがフラッシュバックしてしまつて、たまに上手く呼吸ができなくなるときがあるんですよ」

「そうか。……今はもう大丈夫なのだな？」

「はい。ソアレとユリジェスさんのおかげで落ち着きました」

「ソアレ？」

「あ、この子の名前です。太陽という意味で名付けました」

そのとき、眉をひそめて聞いていたマイオスさんが口を開いた。

「マリイ、君は記憶がないのではなかったか？ なぜ過去に遭った事故のことや、”ソアレ”が”太陽”を意味するということとがわかるのだ？」

「記憶がないとは言つてません。混乱してるだけです。例えば、年齢や誕生日などは覚えています。僕は十六歳……あ、もうすぐ十七歳になりますけど」

危ない危ない。本当に気をつけないと、すぐにボロが出てしまいそう。

「えっ！ マリイはもうすぐ十七歳なの？ 僕より半年も年上なんじゃないか！」

ラキは唇を尖らして、拗ねたように声を上げた。ユリジェスは、そんなラキを見て複雑そうに笑った。一瞬だったけど。

「では、落ち着いたところで話がある」

今のは見間違いだったのだろうか、まるで何事もなかったかのよう
うに、ユリジェスが言った。

「マルイ、覚えているか？ おまえとソアレの命を助けたわたしに、
礼をすると言ったことを」

「はい。え、でも、それはユリジェスさんが勝手に……」

「おまえに、わたしの小姓となってもらいたい」

「な、なんて……？」

「本来なら、それなりに身分の高い者が、わたしの身の回りの世話を
するため側に仕えるものだが、まあ、おまえはラキと同じで、特
例だな」

「はあ」

「ラキは優秀な小姓だ。しかし、しばらくしたら、私の下を離れて、
シルバの村に帰って来なくてはならない」

「ユリジェス様！」

弾かれたように顔を上げて、ラキが叫ぶ。

「そうだったな、ラキ」

「ですが、村はもう……」

「だから、これから再建するのではないか。外に出ている村の者も
呼び戻して、生き残ったファツオアコのおまえが、あの伝説と祈
りの儀式を継承していくのだ。それはおまえも望んでいたことだろ
う？ それとも諦めるか？」

「……………」

「再建するまでは、まだ時間がかかる。だから、しばらくの間、記
憶の曖昧なマルイが不便のないように、ラキも手伝ってやってほし
い」

苦しそうに、でも決然と、ユリジェスが言葉を紡いだ。

「マリイを、連れて帰られるんですね？」

ラキは、確認するように問いかけた。

「そのつもりだ。ここにひとりで残すわけにもいかない。おまえと同じように、わたしの宮で働いてもらう」

彼はきっぱりと言い切った。私はこれから小姓となるのか。

「ああ、そうだ、おまえ達に、髪を包むバンダナを贈ろう。紫紺の生地に銀糸で刺繍をしたものなどはどうだ？ 一目でわたしに仕える者だとわかる。おもしろそうだろう？」

勢いよく言い切るユリジェスに、一同は挟む言葉もないようだった。

ユリジェスの小姓。仕事の確保ができたのは嬉しいけれど、この先ずっと、男の振りを続けられるか心配だ。

ラキと目が合った。うん、大丈夫だ。ラキと一緒になら、きっと何もかも上手くいくだろう。気合いを入れて頑張らなければ。

マイオスさんの隣には、私を見上げるソアレがいる。ソアレ、私はこの子を……

「ソアレも連れて行けば良い」

素っ気なく放たれたユリジェスの言葉。それを聞いた途端、私の胸がギュッと締め付けられた。安堵と喜びに、涙がにじみそうになった私は、咳払いでそれをごまかし、感謝の気持ちを込めて、最高に凛々しく男らしいお辞儀を披露してみせたのだった。

第十八話 還りたい 還りたくない

ここは、木箱や樽を積み上げた荷物部屋、通称、第六天幕。その一角に敷かれたふかふかのマットに、私とソアレが寝そべっていた。

周りからどう見られているかはともかく、一応女の子だしね。男たちと同じ場所で寝ることにならなくて、本当に良かったと思う。あれ以来、ソアレとともに寝るようになったけれど、進言してくれたラキとそれを許可したユリジェスに、私は心の底から感謝している。

ランプの灯がチラチラ揺れるのを視界の隅に、一度消したら火を着けるのが面倒だなー、とか、元の世界のように電気があれば便利なのになー、などと考えていたけれど。

喉の奥に、熱い塊がこみ上げてきて、ソアレの背中に右腕を回し、柔らかな被毛に顔を埋めた。ソアレは、日に干したお布団の匂いにする。それは、私が無くしてしまった元の世界の日常を思い起こさせた。

ギュツと瞼を閉じて、別のところに思考を飛ばす。

……………それにしても、眉目秀麗、文武両道で名を知られるユリジェスが、他の誰よりも私の名前を呼べないだなんて、とんだ弱点があったものだ。

あんなに俺様王子のユリジェスなのに、つつかえつつかえ私を呼ばうとする姿は、……ごめん、ユリジェス。可愛いすぎるよ。

おしなべてこの世界の人たちは、私の名前を正確に発音できない。

それは、……元の世界でも同じだった。

仲の良い友達が、私の名前を呼べないのだ。英語圏の国出身の彼女は、"e"を"E"ではなく"イ"と発音してしまうから、その他の友達を呼ぶときも苦労していたっけ。

瑛子^{エイコ}という名の友達は、彼女にイイコと呼ばれ、別の友達、亜子^{アコ}が、今度はエイコと呼ばれてしまう。香奈恵^{カナエ}という友達なんて、付き合ってる金井君^{カナイ}と結婚したら、Mrs・カナイカナイと呼ばれるようになるのだろう。

くつと歪んだ笑みが浮かんだ。隣でおとなしく伏せていたソアレが、顔を上げて問いかける。どうしたの？　って、瞳が問いかけてくる。

目尻から、涙がこぼれることはなかった。……ほうっ、と安堵の息をついて、うつ伏せになった私は、伏せをするソアレの胸元と、折り曲げた前肢の間に、無理やり鼻先を潜り込ませた。んーっ、ふかふか。ソアレは太陽の匂いがするね。

ここは知らない場所だけど、私は一人きりじゃない。ここにはあなたがいるもの。ね、ソアレ。

ああ……、元の世界が遠く感じる。

あの後、あちらの世界はいつたいたどうなったのだろうか。舞台上に残された共演者たち、裏で支えてくれていたスタッフたち、客席から応援してくれていた友達や赤石家のみんな。私が突然消えてしまつて、すごく心配かけちゃってるんだろうな。

- ツカサおじさん！ 美枝子おばさん！ 志津子ちゃん！ 真くん！

会いたい。会いたい。泣きたくなるほど還りたい。

でも、想いはそれだけでなくて。

きつと大騒ぎになつていゝるであろつあゝ場所に、還りたくないのも本当。……怖いのだ。ただの失踪ではなく、数千の観客の目前から突然消え失せた私を、芸能プレスが放つておくはずがない。プライバシーも何もなく、全てを暴こうとするだろつ。長く執拗な取材攻勢で、私も赤石家のみんなも、きつとボロボロになつてしまつ。

- 還りたい - - 還りたくない -

相反する気持ちを持て余しながら、私はずいぶん長い間、太陽の匂いに包まれていた。

第十九話 出発前のひととき

私が小姓となつてすでに三日が過ぎた。とはいつても、ユリジェスから特別になにかを命令されることもなく、ただ、慣れないうちにはあまり天幕の外へ出るな、とだけ指示されていた。

これでいいのか？　とも思ったが、当のユリジェスは、一昨日から山へ行つてしまつてるし、仕方ないのでその間は、まだ後ろ肢の不自由なソアレの世話をしたり、相変わらず忙しいラキの手伝いに専念したりしている。ファツオアーコの一族であるラキは、毎朝ライディーヌの聖地で祈りを捧げ、それ以外の時間は全て、家族や村人の搜索に費やしていた。

そして、私は今、夜が明ける前の暗い水場で、ひとり体を洗っている。

この野営地には、今現在、約五十人の騎士と兵士が滞在していた。日中や夜の水場は常に誰かがいるので、こっそり水浴びしようと思つと、夜でもなく朝でもない、この時間しかないのだった。

薄いタオルに石鹸をこすりつけて泡立てる。質の良い石鹸を使い、髪も体も清潔に保てるのは、異世界に落ちた自分にとって、この上もない贅沢なのかもしれない。わがままを言わせてもらつと、リンスやトリートメント、化粧水や日焼け止めなんかがあれば、もっと嬉しいのだけど。

ブルツと身震いをする。水を浴びているうちに、すっかり体が冷えてしまった。夏とはいえ、夜明け前は空気がひんやりしているし、澄んだ水はとても冷たいのだ。急いで濡れた体を拭き、ラキから借りた服を身に着けていると、外からたくさんの足音が聞こえてきた。

「……うわ、見つかったらどうしよう！」

焦りながら衣服を整え、そつと外を窺うと、山から降りてきた十人ほどの兵たちが、自分たちの天幕へ帰るところだった。忍び足で脱衣場から出たとき、タオルを手にしたユリジェスと鉢合わせした。二つの月の光が、彼の憔悴しきった顔を浮かび上がらせている。

「……おかえりなさい、ユリジェスさん」

こちらを見て固まっていたユリジェスが、気まずそうな私の声に、やっと動き始めた。

「お、まえ、こんな早朝に何をしているのだ？」

「水を浴びていました」

「その濡れた髪を見ればわかるが…… ああ、そうか」

「あの……実は、人の居ないこの時刻を狙って水浴びに来てたんですよ。体に傷があるので、あまり他人に見せたくはないので」

「……事故の際に負ったものなのか？」

「はい」

嘘だ。両親の体の損傷は、その場で命を失うくらい酷いものだったのに、私はかすり傷しか負っていない。今の私の体は、先日のひとつき傷以外シミひとつなく、悲しいくらいにきれいなものだった。私は、うつむき加減にユリジェスの横をすり抜けると、ソアレの

待つ天幕へと帰っていった。

すっかり夜が明け、朝食の配給の準備が整ったところ、ソアレと私の天幕に、ラキが訪ねてきた。

彼の話によると、今朝方帰ってきたばかりのユリジェスは、睡眠もとらずに働いているらしい。シルバの村は、彼にとってそれほど大切な場所だったのだ。

ラキに対する罪悪感も、彼をさらに追い詰めているという。自分ももっと上手く動いていたら、この惨劇を防げたかもしれないのにと。

ラキは、ユリジェスが負い目に感じる必要などない、と言っていたが、詳しい事情を知らされてない私は、そんな彼に対して、あえて何も知らぬふりを通していた。

夜明け前。いつものように、水浴びを済ませた私が脱衣場から出ていくと、視線の先にユリジェスが立っていた。水場に背を向けて、静かに雑木林を見つめている。

「今朝も水を浴びていたのか。マリ……エ、マルイ」

「はい、汗が気になったので。ユリジェスさん、眠れないんですか？」

私が見ていることに気づいたユリジェスが、振り返って声をかけてきた。彼はいまだに私を『マルイ』と呼ぶ。その前に口ごもる時があるので、ちゃんと呼ぼうと、努力はしてくれてるみたいだけど。

「ふふっ。ユリジェスさん、無理に『マリエ』って呼ばなくてもい

いですよ。他の皆さんと同じように『マリイ』でいいんですから」

「……………」

「それでは『マリイ』ならどうですか？ 女の子みただけど、亡くなった両親が僕をそう呼んでいたんです」

相変わらず無口で無表情な男。だけど、それが全然気詰まりでないのだ。反対に、一緒にいると落ち着くから不思議。

「マリイ……か」

「はい。『言いづらいなら、”さん”で良い』……そう言ってくれたのはユリジェスさんでしたよね。だから、ユリジェスさんも僕のことを、これからそう呼んでください」

隣に立つユリジェスさんの胸が、身長百六十五センチもある私の、ちょうど目の高さにあった。意外と厚みのある肩から、広い背中にかけて、ざっくりカットされた銀色の髪が風になびいている。いつも無造作に結んでいるから、髪を解くと、こんな艶やかに輝くとは知らなかった。

「おまえは、不思議な、少年だな」

「僕も、ユリジェスさんのことを、不思議な人だと思ってました。奇遇ですね」

ニヤリと笑いかけると、ユリジェスさんも唇の両端を上げて、無理に微笑んでみせた。

「……うん、やっぱり疲れている？ 昼間働いて夜に休んでないから、体が持たないんだろうな。」

「考えるべきことが多すぎて、ここ数日間眠れなかったが…… お

まえと話して、少し気持ちの整理がついた。今ならよく眠れそうだ」
「そうですか。……それは良かったです」

この事件のことで、ユリジェスは、眠れないほど思い悩んでいるのだろうか？ 私は、彼を見つめて次の言葉を待った。

「マーリィ。わたしは、部下の前ではつねに強く在らねばならぬ。……だから」

ユリジェスは何かを言いかけたが、突然、左右に頭を振って、諦めたように言葉を切った。

「……さあ、そろそろ寝よう。おまえも少しは眠っておけ。数刻後にはここを引き払い、王都へ向けて出発するのだから」

私の頭にポンと手を置き、そのまま歩き去るユリジェスの背中に声をかけた。

「はい。ユリジェスさんも、ゆっくり休んでくださいね」

振り返ったユリジェスは、今度は本物の笑みをを見せてくれた。

「マーリィ。おまえもこれから、私を『ユーリ』と呼べ。よいな」

第二十話 王都へ出発

初めて出会った頃に感じた恐怖感はすっかり消えた。なのに、今でも私は彼の姿を目にするだけで心臓が痛くなるのだ。あの圧倒的な存在感が、私を無意識に威圧するのもかもしれない。

……だけれども。

- - なんだか、苦しそうだったな。ユーリさん

”部下の前で、自分は常に強く在らねばならない”と言っていた。何があったとしても、惑う自分をさらけ出すことは許されないのだろうか、ソルフェーニュ王国第二王子として。

ならばなぜ、出会ったばかりの私に揺らぐ姿を見せてしまったの？ 私はまだ、ちゃんとした部下になりきれてないから？ そう、なのかもしれない。

いつもは毅然としている彼なのに、油断したのだろう、一瞬外れた仮面の下には、脆く傷つきやすい本当のユーリが隠されていた。

それを知った今。

彼への対応を間違えないようにしなくては。私に何かができるだなんて、思い上がるつもりはない。だけど、今でもユーリは辛そうにしているのに、これ以上の痛みやプレッシャーを与えるのは、ちよっと気の毒、と思うのだ。

いつもより遅くなってしまったため、私が天幕に帰り着いた時はもう、うつすらと明るくなっていた。

嬉しそうに出迎えたソアレを撫でつつ、さっきの会話に思いを巡

らせていたら、結局、一睡もできずに出発の時間を迎えてしまった。

兵士がワラワラと入ってきたかと思うと、積まれた荷を次々と運び出し、ついでに私たちもまとめて運び出すと、あっという間に天幕を解体してしまったのだ。

私にできる仕事があるかとラキに問えば、ソアレの世話を任されるのみで、結局何の役にも立たないまま流されて。

：そうして今、私とソアレは、無骨だけど大きく乗り心地の良いユーリの馬車に揺られていた。

ソアレのための厚みのあるマットとリズミカルな揺れが、寝不足の私を夢の世界に引きずり込もうとしている。そんな私を見て、ラキが笑いをこらえていた。

「マリイ、まだまだ先は長いよ。疲れてたら、ソアレと一緒に遠慮なく寝てていいんだからね」

「ん。ありがとう、ラキ。今朝はいろいろ考えちゃって、よく眠れなかったの」

欠伸をしながら、軽く握った両手をぐーっと上げて伸びをした。胡座をかいたラキは、首を傾げて問いかける。

「水浴びの後、寝なかったの？」

「まあね。今日出発だと思ったら興奮しちゃって。なんだか子供みたいだね」

ふふ、と笑って周りを見渡す。この世界の馬車は、西部劇によくある幌馬車ではなく、木製の、頑丈で重そうなものだった。その分、それを曳く馬も巨大でかなりの力がある。テレビでしか馬を見たことのない私でも、馬車を曳くその大きさには目を剥いたほどだ。

騎士や兵士の乗る馬もそれぞれ大きなものだったが、マイオスさん達はさらに立派な体躯の馬に乗っていた。

馬車の隣に、ユーリが馬を寄せてきた。体高二メートルもありそうな、元の世界では青毛と呼ばれる被毛も長毛も真つ黒な馬を、自由自在に操っている。

「マリーイ、ソアレの様子はどうか？ この先で休憩に入るが、その後はフェルミナンの馬車に同乗してもらうことになるから、そのつもりでいてほしい」

ユーリは早口でそう言うと、おかつは頭のエリオットくと並んで馬車から離れていった。

忙しい人だね、とつぶやいて、窓枠から手を離し前を向くと、正面に座るラキがグリーンの瞳をいっばいに見開いていた。

「……マリーイって？ 君のこと？」

「うん、そう。私の名前を呼びにくそうにしてたから、ユーリさんにはそう呼んでもらうよう頼んだの」

「ユーリさん？ ……ふーん。……あつ、そうそう、マリーイ、この後フェルミナン侯爵と一緒することになったの？」

「よく分からないけど、そういうことみたいね」

「うわ、侯爵はユリジェス様をここまでの剣士に育てた方なんだよ。厳しいけど優しい方だから、マリーイもあまり緊張しないようにね」

ラキが苦笑いしている。そんなに怖いおじいさんなのだろうか

思つと、今から気が重くなってきた。

休憩は、携帯用の食事をとるだけのものだったが、それでも大所帯なために、かなりの時間、その場に止まり、私たちは十分に体を伸ばすことができた。

フェルミナン侯爵は、何年か前に赤の騎士団の団長を引退し、今は同騎士団の顧問となっている。

「顧問などとは、名ばかりよ」と笑っていたそうだが、彼の愛国心はただならぬものがあり、常日頃からソルフェーニユ王国の為に自分の出来ることを模索しているような人らしい。

第二王子のユーリは、そんなフェルミナン侯爵に幼少時代から目を掛けられ、ことのほか可愛がられているという。対するユーリも、侯爵を第二の祖父のように慕っていた。

そこまでラキから聞いたところで休憩時間が終わった。とうとう侯爵からの呼び出しがかかったのだ。

……き、緊張する！

第二十一話 フェルミナン侯爵

私たちが軽食をとったのは、緑が一面に広がる緩やかな丘の上だった。人が近付いたらすぐに気付くその場所で、ソアレの顎を膝の上に乘せた私は、ラキの話を興味深く聞いていた。

「へえ、ラキも侯爵から剣術を教えてもらってるのね」

大きな木の下で広げたシートの上に、紅茶のカップをいったん置いて、フェルミナン侯爵の話をするラキに視線を向ける。肩より長い栗色の髪をふわりと風になびかせて、ラキは照れたように笑った。

「僕がユリジェス様のところに来て以来だから、もう四年になるかな」

「四年前って……十二歳じゃないの！ ラキ、そんな子供のときから剣を握ってるの？」

「ふふ、それでも遅い方なんだよ。……ああ、侯爵のお付きの方がいらしたみたいだ」

丘の下には、馬の世話をする兵士たちがいた。そして、背の高い痩せた男が、彼らの間を抜けてこちらへ歩いてくるのが見えた。

ソアレの顎から膝を抜いて立ち上がると、背筋をずっと伸ばし、腕を体の横に自然に下ろす。女の私が少しでも大柄に見えるよう、不自然ではない程度に相手に向けて手のひらを開いた。少し離れた両脚。つま先を約八十度、外側に向ける。

顔つきまで男に変わるから？ いまだ、私の変化に慣れないラキが、隣でわずかによるめいていた。

私を迎えに来たのは、柔らかな微笑みを浮かべた四十代後半の男性だった。黒地に赤いポイントの衣装が、彼の所属を表している。ラキへ目で挨拶をしてからこちらを向いた。

「はじめまして。わたしはフェルミナン侯爵の部下、ニコラスです。君がマリイだね？　これから侯爵の馬車に案内しようと思うが、準備はいいかい？」

ニコラスさんは、柔和な笑みをさらに崩して、ソアレに視線を向けた。

「はじめまして、ニコラスさん。ユリジェス様の小姓、マリエと申します。僕はすぐに伺えますが、ラキとソアレは……？」

「ああ、彼は他に用事もあることでしょうし、子犬も……　侯爵は、微熱が今も続いているのだよ」

申し訳なさそうな笑みを浮かべるニコラスさんに、それまで黙っていたラキが訊ねた。

「侯爵の傷は、まだ良くなってないのですか？」

「剣に微量の毒が塗られていたのはラキ様もご存知でしょうが、それがまだ抜け切れてないのです」

「毒？　ラキ様？」

「そう、ですか……」

「ラキ様。シルバ村があのようなことになって、あなたもおつらいでしょうが、しっかりユリジェス様を支えて差し上げてほしい」

「はい……」

青空の広がる丘の上で、ラキは唇をかみ、震える拳を握り締めていた。

ニコラスさんに案内されたフェルミン侯爵の馬車は、ユーリのそれよりも小ぶりながら、車内の装飾は豪華だった。

「マリイ。わざわざここまで出向いてもらって、すまなかったの」

そう言って馬車の奥から私を出迎えたフェルミン侯爵は、包帯を巻いた肩の上に、赤の騎士団のジャケットを羽織って座っていた。厳しかった第一印象とは違い、今はいくぶん和らいだ感じがする。ニコラスさんが側に付いているからだろうか？

「いえ、フェルミン様。お身体の具合はいかがですか？」

「おぬしにも心配をかけたか。……いや、実はもう動けるのだが、この者が煩いのでな、外に出られずにおるのだよ」

もう大丈夫、と眉を下げる侯爵は、気の良いお爺ちゃんに見えた。

「あらためて自己紹介しよう。わしはディクライト フェルミン。赤の騎士団の顧問をしている」

「マリエ タカハラです。フェルミン様も既にご存知のように、僕はシルバの村に倒れていました」

嘘はなるべく少ない方がいい。

「……ですが、それ以前の記憶が曖昧で、なぜ倒れていたのか分か

りません。それどころかこの国のこともあまり覚えていないのです。憐れんでくださったのでしょうか、ユリジェス様の身のお世話をさせていただくことになりました」

「ふむ……さようか」

その瞬間、侯爵のがっしりした顎に、ぐっと力が入ったように見えた。

「では訊こう」

侯爵の表情が一変し、グレーの瞳がさらに色濃く変化した。

「おぬしは、何故そこまで優遇されておるのだ？ なにか、ユリジェス様に対して特別なことでもしたのか？ 突然現れて、ソルフェーニユ王国王位継承権第二位のユリジェス様に近付いて、いったい何を企んでおるのだ。答えよ！」

突如として変化した侯爵の迫力に、私の思考が追い付かない。気がつくのと、心に浮かんだ言葉を口していた。

「ぼ、僕は何も企んでいませんし、ユリジェス様に何も望んでおりません。保護された直後など、すぐにでも出て行こうとしたところを、無理やり止められたくらいなのですから！ 信じてください」

片眉を上げたフェルミナン侯爵は、顔を近付ける。

「……では、本当におぬしは、あの方に害を成す者ではないと申すのだな？」

すべてを見透かすかのような鋭い眼差しに身が竦んだ。でも、私

はユーリに害を成そうだなんて、かけらも思っていない。それは事実だ。自信を持って言える。

「はい。そのようなことは、一瞬たりとも考えたこともございません。むしろ今は、あの方のお力になりたいとさえ思っております」

瞳に強い意志をこめて侯爵の鋭い視線を押し返し、――性別は偽っているけど――この気持ちだけは断じて嘘ではないと、胸を張ってきっぱり宣言した。

ガタガタと揺れる馬車の中、お互い、前のめりの姿勢で睨み合う。無言の攻防がしばらく続く。どれくらいの時間そうしていたのか分からなくなった頃、やっと、フェルミン侯爵が、先ほどのような柔らかなお爺ちゃんの顔を取り戻した。

――ここ、怖かった！

「おぬしは、偽りを申しておらぬようだな」

「……ユリジェス様には感謝しております。それだけは信じてくださいますか？」

「うむ。ではマリイ、楽にするがよい」

その言葉に、今までピンと張っていた背筋が崩れた。なんという爺様だろう。柔らかい顔を見せていたかと思えば、こちらを試すよ

うに容赦なく攻撃してくる。揺さぶって揺さぶって、隠された私の本性を暴こうとしていたのだ。

「おぬしはソルフェーニユのことを、覚えておらぬと申しておったな」

「はい。ソルフェーニユ王国について大まかなことは、ラキから聞きました。これから向かう王都のことは、全く分かりません」

「では、夜までまだ時間がある。今しばらくの間、わしとともにいるが良い。ソルフェーニユ王国の都について話でもしてやろう」

第二十二話 王都エメレム（前書き）

番外編 6 グリーンの自業自得な夜

に、今話と関連した話が載っています。新しい登場人物も……

第二十二話 王都エメレム

右側の窓から外を見ると、広い草原の遙か向こうに連なる山々がうつすら見えた。南へ伸びる一本道は、真っ直ぐ王都へ向かっている。

うちとけた後のフェルミナン侯爵は、その身分の高さにもかかわらず、ただの新米小姓でしかない私と同じ目線に降りてきてくれるような方だった。

まだ微熱があるというのに、長い時間をかけ王都について教えてくれたのだが、お付きのニコラスさんは、諦めたようにため息をつきつつも、侯爵のしたいようにさせていた。きつと、いつものことなのだろう。

この世界で、私が知っている場所といえば、焼け落ちたシルバの村と、約五十人の男たちが滞在していた野営地のみ。そんな私にも侯爵の話は分かりやすく、王都に到着する明日が待ち遠しくなった。

フェルミナン侯爵の説明によると、そこは背後を険しい山に守られた、城塞都市だという。緑の多いところから”新緑の宝石”と呼ばれ、何重にも張り巡らせた城壁から”白い貝殻”とも呼ばれている、大陸一美しい都がソルフェーニユの王都エメレムなのだ。

国王の住居とともに政務の中心でもある王城を起点とし、その周りに貴族の屋敷、さらには庶民の家々や商店が存在し、一番外側を城壁が囲むといった形になっている。しかし、その城壁の外側は、内とは様相がガラリと変わって、森に住まう野生動物の脅威や、山賊の襲撃、略奪などの様々な危険に満ちていた。

驚くことに、この世界の人間は、朝がとても早いそうだ。夜明け

には皆起きだし、身支度を済ませて祈りを捧げるとい話だが、野営地で水浴びをしていた私が見つからなかったのは奇跡に近いのかもしれない。

この世界に時計があるのか分からないが、エメレムの住人は、日が暮れてから夕食を終え、後片付けを終える頃に消灯の鐘が鳴り響く。それを合図に家々の灯りが消され、城門も閉ざされ、王都エメレムは平和な眠りにつくのだ。

ほんの数日の間だったけど、慣れ親しんだ野営地から見知らぬ場所へ飛び込むのはたしかに不安だし緊張もする。だけどそれよりもフェルミナン侯爵の話に聞いた『光り輝く王都エメレム』を、早くこの目で見たくてワクワクしていた。

その晩、フェルミナン侯爵とニコラスさん、ラキにソアレ、そして私の五人が、ユーリの天幕へ夕食に招待された。野菜を細かく切って干し肉と一緒に煮ただけの簡単な野営料理だったが、とても美味しく感じられた。

ユーリとラキは、侯爵の馬車から降り立った私たちが笑い合っているのを見てホッとしたようだ。二人とも侯爵の激しい気性を知っているから、きっと心配してくれていたのだろう。

お腹がいっぱいになり、寝る準備を整えた私とソアレは、やはりたくさん荷物に紛れて横になった。シルバ村の野営地とは違い、ちゃんとした天幕ではなかったけど、仰向けに横たわると真上には満天の星、そして、白と金、二つの月がよく見えた。この世界に落ちた日、見上げた夜空にあったのは、ほとんど重なっていた二つの月。それが、日にちが経つにつれて少しずつ離れていき、今、二つの月の間には、かなりの距離ができていた。

横を向くと、荷物の間からマルセリーノさんとエリオットくんが近くを歩いているのが見えた。あれ、また見張り？　だと思ったが、どうやら違ったみたいだ。すぐ隣にユーリの天幕があるから、その警護をしているのだと思う。

隣では、ソアレがじっとしていた。寢床の様子がいつもと違うためか、眠る気配もなく身を堅くしている。伏せるソアレの背中をポンポンたたくと、ユーリのことはかり考えて寝不足だった私は、そのまま幸せな夢の中へと沈んでいった。

今日も快晴！　日中の茹だるような暑さが想像できないほど気持ちのいい朝だ！

そう思ったのは私だけで、横に控えるソアレも、目元をこするラキも、昨晚見張りに立っていたマルセリーノさんとエリオットくんも、ついでに不眠症持ちのユーリも、全員疲れのにじむ冴えない顔をしていた。

嬉々として朝食のスープを口に含む私に、やはり疲れた表情のケペシュさんが、口元を歪めて苦笑いした。

「マリイは、……よく眠れたようだね」

「はい。寝不足だったので、あつという間に寝ちゃいましたよ。皆さんは……眠れなかったみたいですね。何してたんですか？　エメレムに着くまで大丈夫ですか？　馬に乗りながら寝ちゃダメですよ」

横を向いて、ぶふつと噴き出したのはユーリだった。それまでの

彼は、何気なく食事する姿にも品があつて、さすが王子だと感心してたのに……、とても残念だ。そんなハプニングもあつて、結局、昨夜の話はうやむやのまま流されてしまった。

騎乗した騎士、兵士に加え、十数台の馬車がズラリと並ぶ。さあ、王都エメレムへ向けて出発だ。

私はユーリの馬車にソアレを乗せた。それでは私も……と、続いて乗り込んだとき、突然、後ろから首根っこを摘まれた。

「おい、マイオスの話だと、ソアレの怪我也いぶ治ってきたようだな。あれは、もう歩けるのか？」

誰だ？ と、思ったら、久しぶりで俺様に変身したユーリだった。

「……ちょ、ちょっと！ ユーリさん、放してください。首が締まって、ぐ、苦しいですよっ」

「ああ、すまない」

パツと放された私は、今度は仰向けにひっくり返り、ユーリの胸に飛び込んだ。

「な、な、な、何をするんですか！ だ、だ、もうっ！ 危ないでしょう、ユーリさん！」

熱くなった顔を、手のひらで隠そうとしたただけなのに、自分の頬を、バチンとひっぱたいてしまった。精一杯の男らしさを込めようとした結果だ。

この上もなく挙動不審な私だけど、ユーリはさりげなく流してく

れるらしい。変な顔ひとつせず言葉が続けた。

「マーリイ、王都には今日中に着く。おまえは信じられないほど無防備だと分かったから、今後はなるべくソアレと一緒に行動するよにしるよ。分かったな」

早口でそれだけ言うと、大きな手のひらで口元を覆い、私のそばから離れていった。

――くっそう、今頃、絶対に笑ってるよ！

その後、滞りなく進んだ私たちは、途中二度の休憩を挟んで、とうとう、昨夜の夢にまで見た王都エメレムに到着した。残念ながら、すでに消灯の鐘がなった後で、活気あるはずの王都エメレムは、酒場を除いて眠りについていた。

でもいいの。これから見てまわる時間はたくさんあるもんね。私は、ショートケーキの苺を後のお楽しみに取っておくタイプなんだから。

第二十三話 ユリジェスの宮へ

約四十騎の騎馬と、十数台の馬車から成るユリジェス一行が、警備兵たちの守る城門を音もたてずに通り抜け、城壁の内側へと入って行った。馬車の窓から顔を出すラキと私は、整備された石畳の上をガタガタ揺られながら、月明かりに照らされたエメレムの町並みに目をこらしていた。

商店は閉まり、家々の灯りが落とされた今は、周りの様子がよく分らない。だけど、少なくとも、中世ヨーロッパのように糞尿の臭いが漂うようなことはなかった。

よかった。エメレムの住人は、どうやら清潔な暮らしを送っているようだ。

先ほどまでと雰囲気が変わり、大きな屋敷が立ち並ぶ区域を進んでいる途中、私たちの乗る馬車だけが道を逸れた。「わたしの宮へ向かえ」と、それだけを告げたユーリは、馬首を返し、一行を率いて王城へと向かっていった。

護衛だか見張りだか分からないけど、馬車の横にはまたもやマルセリーノさんとエリオットくんが張り付いている。ラキは降りる準備を始めて、ソアレは窓から外の景色を眺めていた。

「どう、マリイ？ 王都エメレムの町並みに見覚えはあるかな？」

おかっぱ頭のエリオットくんが、馬上から訊いてきた。残念ながら、異世界の都エメレムに見覚えがある筈がない。

「いえ。記憶にありません。明るくなったら町を散策に出てもいいですか？ 早くエメレムに慣れたいですし」

「それは僕にはわからないな。ユリジェス様は、今夜は宮へお帰りになるだろうから、後でお願いしてみたらいいよ」

「そうですね。聞いてみます」

そう言って窓から離れた私に、ラキが、きつとお許しが出るよ、と頷いてくれた。

ユーリの宮は、明るかった。留守にしていた主人を迎えるために、たくさんの明かりを灯した屋敷は、暗闇の中をカンテラの灯りだけで進んできた私には特に眩しく感じられた。

^{すいか}誰何の声もなく立派な門を通り過ぎると、しばらく走ったところで馬車が止まった。ホテルのエントランス並みに広い玄関には、キツチリした服を着た年かさの男女と、彼らよりほんの少しだけ若い使用人女性たちが数人、整列している。

おっかなびつくり、それでも男らしく振る舞うことを忘れずに馬車を降りると、年かさの男女が進み出て礼をとった。

「ラキ様、お帰りなさいませ」

「マリイ様も、ようこそいらっしやいました。お疲れになったでしょう。湯の支度が整っております」

……………は？ この丁寧な対応は、いったい？

驚いて隣を見ると、ラキが困ったような顔で、微笑んだ。反対側を見ると、マルセリーノさんとエリオットくんも、やはり困ったように笑っている。

「マリイ様、わたくしは、この宮の執事、アルバートと申します。お見知りおきを」

一歩前に出た黒服総白髪のおじさまが、私に向かって一礼した。

「わたくしは、ユリジェス様に侍女頭としてお仕えしております、ミラと申します」

今度は、アルバートさんの隣に立っていたロングスカート姿の年配の女性が、私の方へ進み出て、柔らかな仕草で頭を下げた。

たまたまユーリに拾われ、単なる小姓としてやってきただけの私に、どうして彼らは礼を尽くすのだろうか？ それに、ニコラスさんと初めて会ったときにも疑問に思ったが、ラキだってユーリのいち小姓に過ぎないのではないか？ なのになぜ、敬語を使う？ そつえば、以前ユーリが、”小姓とは、身分の高い者になるもの” ”ラキと私は特例” のような感じのことを言ってたっけ。よく分からないけど、まあ、たぶん、そんなところなんだろう。

まだぎこちなく歩くソアレに合わせ、ゆっくりと玄関ホールに入っていると、そこはやっぱりホテルのようだった。広いホール中央の奥に、大きな階段がある。どこか洗練されたそれを前にして、私は舞台に立っているような気持ちになった。

侍女頭のミラさんと二人の侍女さんに案内されたのは、二階、最奥の広い部屋だった。大きな窓に、広いバルコニー。ベージュとブラウンを基調とした上品なインテリアだ。ベールのかかった大きなベッドの横には、大型犬用の丸いベッドが用意してあった。ソアレと一緒に居られると思うと心強い。

ラキの使っている部屋は、同じ並びの、二つ部屋を挟んだところらしい。その前を通り抜けて、一階奥の湯殿へ向かった。侍女の皆さんは、そこまで私を案内すると、湯の使い方をひととおり説明してから出て行った。

ばしゃん……

異世界に迷い込んで、約一週間。ここでは無理なのかもしれないと諦めていたけれど、ユーリの宮に来て、やっと念願のお風呂に入ることができた。

はああああ。涙が出るほど気持ちいい。冷たい水では泡立ちが良くなかったため、頭皮までスツキリでできなかったのだ。

しかも！ このお湯は、かけ流しの天然温泉だという。自宅に温泉が引かれてるだなんて、なんとという贅沢！

その上ここには酸性リンスもあるし、脱衣場には化粧水も乳液も、髪と顔、全身に使えるオイルも揃っている。ああ、幸せだ。幸せだ。もしかして、ここは天国ではあるまいか？

毎日天然温泉に入れるこの宮は、根っからの日本人である私にとって、やっぱり極楽浄土なんだと思う。くうーっ、ユーリ、私を拾ってくれて、ありがとう！

湯から上がってサッパリした私は、新品の小姓の服を身に付けて、荒れていた顔と体の手入れを念入りにし始めた。嬉しい。嬉しい。

自分が女優であるどころか、すっかり性別まで忘れるところだった。こんなことじゃ、雑誌モデルをしている従姉の志津子ちゃんに叱られてしまう。立ち居振る舞いは男に徹するとしても、基本的に自分が女であることを忘れてはいけないよね。うん！

気合いを入れた私は、再度、顔と体に化粧水を振りかけ始めた。

鼻歌を歌いながら湯殿を出たところに、侍女頭のミラさんと、さつき案内に付いて来てくれた二人の侍女さんが待っていた。知っていたら、長湯しないで急いで出たのに。

「お待たせしてすみません」

「いいえ、わたくし達も、たった今、こちらへ着いたところですわ」

侍女の一人がそう言うのと、恥ずかしそうに微笑んだ。

「ではマリイ様、食堂へ参りましょうか」

ミラさんが私を促す。

「ユリジェス様のお帰りは遅くなりますので、ラキ様、マルセリーノ様、エリオット様とご一緒のご夕食となります」

もう一人の侍女さんが、満面の笑顔で説明してくれた。そうか、ごはんだ。ソアレのごはんも用意してくれてるのかな？

「はい、マリイ様の子犬にも、先ほど餌を出しましたわ。怪我の治りも早いようです。獣医によると、もうすぐ包帯を外せるようになるという話ですので、そうしたらきつと、すぐに走れるようになりますね」

満面の笑顔をさらに深くして、侍女二号さんが教えてくれた。そうか、そうか、ソアレも充分なもてなしを受けているのか。そこまでしてもらえるなんて不思議だけど、まあ、ありがたいことだ。

同じく一階にある食堂に入ると、そこが居心地良くこじんまりとした部屋だったことに、正直言っただけで済んだ。大理石の湯殿を見てどこまで贅沢な造りなのかと仰天したから、食堂もこはんが喉を通らないくらい広く堅苦しい部屋じゃないかと思っていたのだ。ダイニングテーブルには、すでに全員が揃っておしゃべりしていた。彼らが笑顔で私を呼ぶ。

「マリイ、ユリジェス様の温泉は気に入ったかい？」

「すごいだろ。ここエメレムの都は、温泉も観光名所として有名なんだよ。知らなかった？」

「マリイがゆっくり入浴している間、僕も別の湯殿で入ってきたんだよ」

マルセリーノさん、エリオットくん、そしてラキがいつぺんに話しかけてくるのに笑ってしまった。

「はい、今までずっと冷たい水しか浴びれなかったもので、すごく嬉しかったです。嬉しすぎて、ラキよりもゆっくりしてたんですね、お待たせしちゃってすみません。エメレムが温泉の観光名所として有名だなんて初耳でした。他国からも観光客が来てるんですか？」

ユーリ専属の料理人が腕を振るった夕食は、素人の兵士が作る野菜料理とは天と地の差だった。基本的に肉と野菜が中心の西洋風味で、スパイスを利かせて塩分控えめに仕上がっている。私好みの味付けが嬉しかった。デザートは甘いフルーツの盛り合わせ。その中にカットされたメロンを見つけたときは、周囲の目も忘れて大喜びしてしまった。

話が弾み、食も進み、異世界の新しい居場所にすっかり満足した私は、今頃になって元の世界から旅をしてきた疲れが出てきたようだ。

眠くて眠くて、どんなに頑張っても目を開けていられなくなったので、ちよつとの間、ソアレの待つ部屋へ戻らせてもらうことにした。

ユーリが帰宅したらすぐに声をかけてもらえるようお願いしたのに、フラつく足取りで大きなベッドにたどり着くと、倒れ込むと同時に深い眠りに落ちてしまうのだった。

眠りに落ちる直前、ソアレの茶色い瞳に優しく見守られているのを感じて、私はふんわり口もとをほころばせた。

第二十四話 私は客人？

ああ…… ユーリを待たずにさっさと寝てしまった。せつかくのご厚意に対して、お礼の一つも言わず先に休むなど、失礼にも程があるというものだ。

ベッドの横に腰を落とし、頭を抱え込んでいると、木製のドアがノックされた。ミラさんだった。

「マリイ様、おはようございます。ゆっくりお休みになられましたか？」

昨夜と同じ温かな笑顔のミラさんは、部屋の入り口で、軽く頭を下げた。

「おはようございます、ミラさん。おかげさまで、一度も目を覚ますことなく、ぐっすり休ませてもらいました。けど……」

気まずくなつて、言いよどんだ。

「……あのう、あのまま眠ってしまって、ユーリさんに会うこともできませんでしたけど、彼、怒ってました？」

「いいえ、ユリジェス様は一度こちらのお部屋にもいらしたのですが、お休みになられているマリイ様をご覧になってすぐに出てこられましたよ。怒るところか、笑っておいででした」

うわあ、行き倒れのようにベッドに突っ込んで寝てたのを、ユーリに見られたなんて、すごく恥ずかしい。

眉間に寄ったシワを人差し指でゴシゴシ伸ばしてるうちに、ミラさんが、光を遮る厚地カーテンをサイドに集めてくれた。開けた窓

から涼しい風が流れ込み、白いレースのカーテンを揺らしている。

その様子を見ていたソアレが立ち上がり、こちらに向かって歩いて来た。ふさふさの尻尾をくると上げて、左右に大きく振っている。

「おはよう、ソアレ。オシッコは大丈夫？」

ソアレはだいぶ自由に歩き回れるようになっていた。獣医さんによると、マイオスさんの最初の処置が適切だったおかげで、今は順調に治ってきているらしい。

ソアレは、私たち二人の手に冷たい鼻を押しつけ、朝のご挨拶をすると、部屋の隅に用意されていたペット用トイレで用を足した。それは床に水を通さないように工夫されており、上に使い古した布を敷き詰めたものだった。外まで連れて行かなくてすむのはありがたいけど……と、上質なインテリアの部屋をぐるりと見回す。

「ミラさん、僕はただの新米小姓で、まだ何のお役にも立ててません。なのに、このようなもてなしを受けるなんて、心苦しいです」

「マリイ様、」

「あの、その丁寧な呼び方も慣れないので……」

「マリイ様、表向き小姓と見せてはありますが、あなた様はユリジエス様のお客人と伺っております。なので、この宮では遠慮なさらないでくださいね」

白く豊かな髪をきつちり結い上げたミラさんは、シワの深い顔に笑みを浮かべて私の両手をすくい上げた。

「ユリジェス様のご希望なのですから」

何も言えない私の手を握り締めて、続ける。

「寝間着にも着替えずに眠ってしまったたのですね。さあさ、お顔を洗って身支度を整えてしましましょう。ユリジェス様とラキ様がお待ちですよ」

私の部屋には、専用のトイレと洗面台がある。さすが水の豊富なエメレム、洋式トイレの下を水が流れているらしい。

洗面台には、香りの良い石けん、化粧水、乳液、オイルに加えて、竹に動物の毛が植え込まれた歯ブラシが数本と、瓶に入った歯磨き粉が置いてあった。湯殿で説明を受けて驚いたものだ。野営地では、目の粗い布を指に巻き付けて、塩で磨いていたのだから。この世界は、私の想像よりも進んでいるのかもしれない。

急いで顔を洗い、しわくちやになった小姓の制服を新しいものに替えると、ミラさんに連れられて食堂へ向かった。

私の部屋もそうだったが、今歩いている廊下も階段も、昨夜の洗練されたイメージとは印象が違って、ずいぶんと開放的で明るい。大きな窓から、柔らかな光が差し込み、別の開かれた窓からは、朝の爽やかな風が流れ込んでいた。

昨夜と同じ食堂に着くと、ユーリとラキがすでに食事を進めていた。二人は打ち解けた雰囲気談笑している。

私は、ユーリが自然な笑みを浮かべているのを見て驚いた。いつも気を張っている顔しか見たことがなかったからだ。

水のグラスを手にしたユーリが、こちらに目を向けると意地悪げに笑った。

「よく眠れたようだな、マリー」

「はあ、おかげさまで、一度も目が覚めることなく熟睡してしまいました」

口元を手で押さえて笑いをこらえるユーリに、今度はちゃんとお礼を言う。

「こんなによくしていただいたのに、昨日は先に寝ちゃってすみませんでした。それから、ソアレのことも、あの、僕にお部屋を貸してくださったことも、あのう、いろいろもろもろ、ありがとうございます！」

話しているうちに、顔が熱くなってきた。帰宅したユーリが私の寝ている部屋に入ってきたという話を思い出したからだ。

その本人は、堪えきれずに吹き出して笑っている。私はラキの正面の席につきながら、右斜め横のユーリを睨み付けた。

「そんなに笑わなくても」

決まり悪くなった私は、唇をとがらせた。

「マリイ、おはよう。昨夜の夕食も美味しかったけど、今朝のスー
プを飲んでごらん。絶品だよ」

いつでも優しいラキが、場の空気を変えてくれた。

「おはよう、ラキ。本当だ、美味しそうだね。そうだ、マルセリー
ノさんとエリオットくんは、いつ帰ったの？」

彼らは、ユーリの帰宅を待つてすぐに王城の敷地内にある騎士専用
宿舎へ帰ったらしい。ユーリと交代したわけだ。それなら無理し
て私たちに付いてこなくても、あのままユーリと一緒に王城へ帰れ
ばよかったのに。

初めて会ったときのマルセリーノさんは、私のことを警戒してい
るようだった。それを思い出して少し残念に思ってたけど、彼らの主
人の側に、得体の知れない少年がつくのだから、警戒するのは当た
り前のことなのかもしれない。側近として安心してはいられないの
だろう。

考えても仕方ないことをぐじぐじ考え込むよりも、目の前にサー
ブされた朝食に集中することにしよう。ホカホカ湯気が立って、い
い匂いがする。

それでは、いただきまーす。

焼きたてのパン……のようなもの、卵料理に新鮮な野菜サラダ、
コンスープにオレンジジュース、コーヒー……のようなもの。ラ
キの言うとおり、とても美味しかった。しかも、それらは私にも馴
染み深い味で、見た目にも元の世界とそっくりのものだった。

お腹がいっぱいになり、給仕さんにコーヒーをついでもらったところで、ユーリが人払いをし、こちらを向いた。私に関わることに
ついて、説明をしてくれるというのだ。

第二十五話 バンダナの理由

真剣な眼差しで私を見つめるユーリは、口元に寄せていたコーヒークップを静かに置いた。その様子は、さつきとはまるで別人のようだった。

「まずは、ラキとマリイから、これまでにあったことを話してくれないか。そこから整理して、おまえに説明していききたい」

大丈夫なのだろうか？ ユーリは信じてくれる？ ラキも言っていたよね、僕はあの方以上に信頼できる方知らない、って。ファツオアークと親しいようだし、不思議な話にも免疫がありそうだ。よし！ ラキから聞いた話も、私の正体も、何もかも全てユーリに話してしまおう。そう思ったら、決断は早かった。くいつと顔を上げて、ユーリを見据える。

「ユーリさん、今まであったこと、全部お話します」

……と、そのとき

「マリイはやっぱり男だね。覚悟を決めるのが早いよ」

ラキが早口でそう言った。 - やっぱり男だね - ？ ええっ、男のフリはそのまま続行しろってことなの？ ちょっと待って。なんで女だつてばらしちゃいけないの？ ここはもう野营地じゃないよ。むさ苦しい男ばかりの危険な場所じゃないでしょう？

「ユリジェス様、ご報告しましたとおり、マリイには、僕の一族のことを少しだけ話しました。それと、ライディーヌの石とベルジ

ユのことを」

それからラキは、先日私に話してくれたことをかいつまんでユーリに説明した。

ソルフェーニユの建国以来、シルバ村のファツォアーコ一族がライディーヌの石へ赴き ” 大いなるもの ” へ定期的に祈りを捧げていること。ある伝説を継承し続けていること。村を治めるはファツォアーコ一族の長。村人は全て、ファツォアーコを補佐する人々。石のある場所、ライディーヌの聖地には、なぜか ” 大いなるもの ” に許された者しか入れないこと。そこで私とソアレが見つかったことに、皆がひどく驚いたこと。

「……そうか。」

なんとも言えない表情で、ユーリがつぶやいた。難しい顔で、何か考え込んでいるのだろうか。

「あの、ユーリさん、それと……」

女であることを隠しても、異世界から来たことはユーリに話しておきたい。王族としての教育を受けたユーリならば、私を還す方法を知っているかもしれないからだ。今は知らないとしても、彼の王子という立場が、それを調べる私の助けになるだろう。

「それとですね。ユーリさんに信じてもらえるか分かりませんが、ここは、今まで僕が住んでいた世界とは違うようなんです」

- - あ、眉間にシワが寄った。お願い、ユーリさん、信じて

「シルバ村で目覚める前、僕は仕事だったんです。やっと終わって、後は打ち上げパーティーを楽しんでいたのに、突然倒れたかと思うと、目が覚めたら火事になっていて……」

息が詰まった。

「……それから後は、お話したとおりです」

ユーリが少しだけ表情を和らげ、いたわるように頷く。単純な私は、おおいに力付けられた。

「ここは、僕の知る文明とは違うし、見たことがない文字を使っています。それなのにこうして話を通じるのは、僕も変だと思うのだけど。それから、ありえないのが二つも月があることです。僕の世界には、一つしかないものですよ、月っていうのは！ 髪の毛の色だって、あれってみんな染めてるんじゃないですよ？ 脱色とか、ヘアカラーとか、ヘアマニキュアとか、ラキは自然な色だって言ってますけど、僕の髪みたいに染めてるんじゃないですよ？」

「マーリィ、案ずるな。おまえが違う世界から来たことを信じよう。それを信ずる理由もある」

ホッとした。この荒唐無稽な話を、彼は信じてくれたのだ。

「おまえの本来の髪の色は、闇、なのだろう？ ……ラキ、大丈夫だ。このことは、まだ誰も知らないはずだ」

何かを言おうとしたラキを、片手を上げて止める。そして、一度食堂から出ていったユーリは、すぐに白い包みを手に戻ってきた。

「これをおまえ達に」

ユーリは包みの中から、紫紺地にシルバーの刺繍を施したバンドナを取り出して、それぞれを私たちに手渡した。しなやかでしつかりした手触りの紫紺に、繊細な銀の刺繍が映えている。なにかの花をモチーフにしているようだ。

「マリーイだけでは不審に思う者も出てこよう。ラキも付き合ってくれるな？」

テーブルの上で両手を合わせ、指を軽く組み合わせた。

「はい、ユリジェス様。これで、マリーイの髪の色を隠すですね。

……いつからお気づきだったんですか？」

驚きを含む声で問いかけたラキ。それにユーリは苦笑してみせた。

「まあ、最初の頃からだな。これは背が低いし、わたしは近くに立つ機会が何度もあった。それに、伝説についても少しは知識があるからな。他の者にはその意味が分からなくても、わたしはすぐに気付いたよ」

髪を触りながら、ふうん、と聞いていたけど、黒髪が伝説と関係あるのだろうか。ユーリはさらに続ける。

「だが、念のため今からこれを着けてもらう。黒い髪は、わたしとラキ、執事のアルバートに侍女頭のミラだけの前でだけだ。他の誰にも見せないように」

それはきつと重要なことなのだろう。私はこくりと頷いた。

「はい、そうします。これ着けてみていいですか？」

「ああ、そこに鏡がある」

首を傾けて訊ねると、ユーリはほんの少し目を細めた。

すっかりとした生地が頭に馴染むので、激しい動きをしても、ずり落ちる心配が無さそうだ。お揃いのバンダナを着けたラキも、嬉しそうに笑っていた。

「ではそろそろ、話を進めよう。マリーイ、おまえは二つの月を見たことがないと言っていたな。それは……」

ユーリの話はこうだった。

私の世界だけでなく、こちらの世界でも、大きな純白の月が一つだけ出ているのが普通らしい。それが、五年に一度の周期で約二週間だけ金色の月が現れるというのだ。それを ” 金月 ” と呼ぶ。最初のうち離れている二つの月は、日が経つごとに近付いていき、一週間後にはほとんど重なって見える。

私は、その光景を見たことがあった。この世界に迷い込んだ日の夜だ。寄り添う二つの月が、闇夜に立つこの人を、眩しいほどに照らしていた。

金月が現れる二週間は、シルバの村一帯に不思議な力が満ち溢れると言われている。その範囲は、ライディーヌの聖地から村の背後にそびえ立つハイビスラ山まで。シルバの村では、金月の伝説の口伝を、ファツォアークの長となるものが正式に継承していく。世襲制なのだ。

ラキはファツォアーコの長男ではなかったが、今回のことで長となることを決めた。次の長と定められた者の身に何が起きるか分からないため、万が一のことを考えて、その血を継いでいる者は全員、幼いころからファツォアーコ一族としての役割を叩き込まれているのだ。

長となった者は、”大いなるもの”に祈りを捧げることで、エゴを手放し、我よりもずっと大きな力に身をゆだねることを学んでいく。同時に、いつか来ると言われている”その力を我のものとして使わねばならぬ瞬間”のために、精神と肉体の鍛錬を積まなければならぬ。祈りの力は、祈る人の在りように反映しているからだ。

金月の伝説の中に、”救世の闇”という言葉があるという。それを”世界を、またはソルフェーニユ王国を救う、黒い何か”だと、ユーリとラキは解釈しており、そのために、黒い髪を持つ私を特別に気にかけてくれているのだ。

黒いものなんて、他にも山ほどあるだろう。なのに、なぜ私だと言うのか。私の現れた時期が時期だから……、それに、場所が場所だから……、だから、特別扱いされてしまうのだ。

いや、ここは、ありがたいことに保護していただいた、と、感謝するべきなのだろうか。……私には、分からない。

そんなわけで、私はこれから先、ユーリ付きの小姓として生活をしていくこととなった。不安なことに変わりはないが、ユーリがいるし、ラキもいる。なにより、ソアレが側にいてくれるのだ。だからきつと大丈夫。元の世界へ還る方法が見つかるまで、彼らと共に、

生きていく。

救い - side : ユリジェス -

薄暗い部屋。こもった空気。吐き気をもよおすほど甘ったるい匂い。ドアを開けた僕は、思わず鼻と口を手で押さえた。

ベッドに横たわるのは、鶏がらのように痩せた女。厚いカーテンの隙間から忍び込む光が、骨の浮いた手の甲と、艶のない白金の髪を浮かび上がらせていた。

ふいに、女がこちらに顔を向ける。すでに焦点の合わないはずの目が、僕のそれを正確に捕らえた。

力無く横たわる体が、ピクリと身じろぎ上半身を起こしていく。そうしながら、向こう側の腕をゆつくりと上げて……、僕の方へとその手を伸ばした。その手に捕らわれたかのように、僕は、動くことが出来ない。二人の間には、こんなに距離があるというのに。

こちらへ上げた腕を、力尽きたかのようにパタリと下ろした。視線を合わせたまま、うつ伏せの姿勢になっている。下半身は、もう動かなかった。細い腕の力だけで己の身体を引きずり、ベッドの下に滑り落ちる。ゴトン、と、嫌な音を立てて、肉のない顔を打ち付けた。それでも、未だ、僕を見据えて。

- - ずるり ずるり

俯き加減で表情の読めない顔と、薄い肩から腰まで流れる髪。その両手は、前に進むたびに毛足の長い絨毯を握り締めていった。

- - ずるり ずるり

身に着けた薄衣が、床にこすれて少しずつはだけていく。

・・ずるり　ずるり

僕の身体は、動かない。動けない。

・・ずるり　ずるり

「……ひっ！」

氷のように冷たい右手が、僕の足首を、掴んだ。

左手が向こうずねを。

右手が膝を。

左手が太ももを。

ぐっ、ぐっ、と、酷く強い力で僕の服をつかみ、彼女の手が這い上がっていく。

衝撃のあまり、痩せこけた女の重みさえ支えきれずに、後ろへ倒れてしまった。

・・嫌だ！　やめてくれ！　放してくれ！

ゆっくり、僕にのしかかるその口が、三日月のように引き上げら

れた。そして、凍った指先が喉元にかかり……

「うああああっ！」

キリキリと締め付ける胸の痛みには耐えかねて、跳ねるように飛び起きた。

……喉が痛い。息が出来ない。

胸のあたりをギュツと掴み、肩で激しく息をする。身体は強張り、わたしの鼓動は乱れ狂う。陽に干したばかりの寝具は、流れる汗で、ぐっしりと濡れていた。はっ、はっ、はっ、はっ、と、息をする。ただ呼吸することだけに意識を向ける。

そして、「これは夢だ」と理解した途端、強張っていた上半身が、ぐずぐずと崩れ落ちた。

……それは、しばらく前まで頻繁に見ていた悪夢だった。

「最近は見ることなかったのに、な」

まだ、あの呪縛から抜け出せないのか、と、自嘲の笑みが浮かぶ。ベッドサイドに用意されていたぬるい水を、グラスに注いで一気に飲み干すと、額に両手を押し付け、切れるほど唇を噛み締めた。

明かりの下で、備え付けの鏡を覗くと、何の表情もない自分自身

と目が合った。……あの夜の少年も、今のわたしと同じ目をしていた。いや、少年を装った少女だったな……

あれは、ほんの一週間前、二つの月が寄り添う夜のことだった。

走り去る子犬を追った先に、彼女はいた。わたしの目の前で、狂った男に殺されようとしていた小さな少年。それがマリーリイだった。少年の、全てを諦めきったような表情が、夢の中の自分と重なるその瞬間、私は、この身に何が起こったのか分からなかった。まるで、雷の直撃を受けたような強い衝撃が全身を走り抜けたのだ。このようなことは初めてだった。

助けた少年は、常に何かに脅えていた。表面上は平気そうに振る舞ってはいたが、その瞳の奥に、わたしと同じ、拭い去れない恐怖の欠片を隠しているのが分かるのだ。

それは、シルバ村での記憶をきっかけに、突如として表面に浮かび上がってきた。

あれを少年ではないと気付いたのは、第六天幕で事情を訊いていたとき。突然指先が細かく震えだし、見開いた瞳には何も映らず、ひどく呼吸が乱れたのだ。少年の症状は、長年隠し続けてきたわたしのそれと同じだった。

彼の肩を支え、なんとかして落ち着かせようと声をかけたのだが、少年としては、あまりに頼りなげで、今にも崩れてしまいそうな様

子に驚いた。

- -これは少年ではない

恐怖を必死で抑え込み、己を取り戻そうともがく姿は健気な少女そのもので、とても男とは思えなかった……

- -マーリイ

彼女を思うだけで、強張った気持ちが楽になる。あの悪夢の日以來、凍りついていた心が、マーリイと出逢った瞬間に解けていったのだ。

たとえ彼女が男だったとしても、この気持ちは変わらないだろう。性別など関係ないのだ。マーリイがマーリイである限り。

ソアレに守られて熟睡する彼女の様子を見たのは、ほんの数刻前のこと。それなのに、今、また会いに行きたくなる。

大きすぎるベッドの上で、彼女は真横に倒れ込んでいた。その背中と膝下に腕を差し込み、すくい上げると、上掛けの下に入れてやった。

彼女のあどけない寝顔を思い返したわたしは、我知らず口元をほころばせていた。

今見たばかりの悪夢さえ忘れて。

第二十六話 異世界の暮らし方

「マリイ様、マリイ様！ そろそろお時間ですよぉ！」

私の身の回りのお世話をしてくれているレイチエルの声が、ユーリの宮に響き渡った。

同い年のレイチエルが私の世話係としてやってきたのは、今から約二ヶ月ほど前。買い物をしに出掛けた私とマイオスさんが、男に絡まれて困っていたレイチエルを助けたのがきっかけだった。

公園のベンチに座って話してみると、レイチエルのお祖父さんは、わが執事アルバートさんと昔からのボードゲーム友達らしい。ユーリの宮で働きたいと相談したこともあったが、うちの王子様が若い女性を雇わない方針らしく、諦めて他で働いていたのだ。口の堅い彼女が以前の仕事先のことを語ることはなかったが、ちょうどそこを辞めて困っているところだと話していた。

その夜、帰宅したユーリに彼女のことを相談すると、一週間後、突然レイチエルが荷物を抱えてやってきたではないか！ ユーリは若い女性を宮に入れない。ところが、どういう訳か分からないが、レイチエルは今回特別に雇われたそうだ。巷では、彼女がユーリの新しい恋人ではないかと噂されている。

レイチエルが大声で私の名を呼んだとき、私はソアレと庭を駆け回っていた。冷たい風が吹きつけているが、私たちは全く気にせず、汗だくでじゃれあっていた。

今は十一の月。あつという間に夏が去り、秋の終わりを迎えていた。

異世界に落ちた私がユーリの宮に身を寄せて、約三ヶ月が経つ。私は十七歳になっていた。

その間に、ソアレの怪我は完治し、がっしりとした立派な大型犬へと成長していった。体が大きくなってもまだ子供。手入れされた庭を駆け回り、以前には見られなかった子犬らしさを存分に発揮していた。一緒にソアレの世話をしていたマイオスさんとラキは、そのことを非常に喜んでくれたが、ミラさんを筆頭に宮の使用人たちときたら、本当は喜んでいくせにわざと嘆いてみせるのだからタチが悪い。私までがソアレと一緒に頑張って駆け回っているせいだろう。ふふん。

最近のユーリは、特に政務に忙殺されていて、私が彼と接する時間は朝晩のわずかな時間だけとなった。以前から一緒にいることは少なかったが、それでもなんだか物足りない。

私はというと、いつか自立することになって心配のないように、毎日アルバートさんやミラさん、レイチエルにこちらの世界の文字を習っていた。

さつきレイチエルに呼ばれたのも、勉強の時間が迫っていたからだ。もともと記憶力には自信がある。小姓として、仕事をするユーリを手伝うことになっても、もう困ることはないだろう。

それにしても、ユーリはいったいどんな仕事をしているのだろうか。王子様、しかも第二王子って、そんなに忙しい職業だったわけ？

驚きはしないけど、ユーリは映画スター並みにモテるらしい。今まで数え切れないほどの女性と付き合い、女神様と呼ばれるほどの美女に迫られ、ひと時を過ごしたこともある、という噂を、どこかで誰かに聞いた。……誰だったかな？

そんなモテモテ王子に雇われたレイチエルは、彼に憧れる女性から良く思われるはずもなく、日々、嫉妬の嵐に揉まれていたが、当

の彼女はどこ吹く風、全く気にしていないようだった。

彼女には、とうの昔に私の正体がバレていた。異世界から来たことと、実は女だということ。女性特有の月のモノについて、周りに聞ける人がいなくて困っていたのだ。この世界では、布ナプキンを使っているらしいが、それを気を利かせたレイチエルが買ってきてくれたのだ。

まあ、それはともかく、私が女だとバレてからのレイチエルは凄かった。こちらへ来て五センチは伸びた髪の手入れはもちろん、荒れた顔と体の手入れまでしようとするのだ。彼女にそんなことはさせられないし、「私は男役を演じているのに、綺麗になってどうするの！」と主張すると、「もっと綺麗な男がそばにいるから大丈夫です！」と豊かな胸を張って言い返された。確かにね。ユーリもラキも綺麗な男だよ。

紫がかったピンクの髪を指でクルクルしながら、泣きそうな顔をしてみせるレイチエル。それを前にすると、とても拒否なんて出来ない。結局私は、ユーリの湯殿で長い時間をかけた全身エステを受け入れたのだった。

「マリイさまー！　今日はアルバート様ですよー！」

彼女が来てからのことを、中庭に立つたままぼんやり思い出していたら、レイチエルにもう一度呼ばれた。言葉を理解したソアレが私の袖口を軽く噛み、部屋に帰ろうと促す。アルバートさんはいつも早めに来るのだ。

急いで部屋に戻り、続くウォークインクローゼットで汗だくになった服を着替えた。いつも身に着けている小姓の制服は、オフホワイトで清潔感あふれる動き易いものだ。立ち襟のおかげで、喉仏が

ないのを自然にカバーしてくれている。

勉強の時間が迫っていた。バンドナを着け直してクローゼットから戻ると、すでにアルバートさんが木目調のテーブル脇に立っている。長年ユーリの執事を務める人だけあって、彼の細やかな気遣いにはいつも感心していた。今日もまた、汗だくの私のために蒸しタオルを用意して、温かいお茶の準備までして待っていてくれたのだ。しきりに恐縮する私を見たレイチエルは、笑いをかみ殺しながら部屋から出て行った。

「ユリジェス様専用の湯殿で湯浴みができるだなんて、マリイ様はお幸せですねえ」

レイチエルは、うつ伏せになった私の背中に、オイルを付けた手を滑らせた。字の勉強を終えた私を、湯殿まで引きずってきたのだ。

「そうだね。私が女だつてバレたら大変なもの。ユーリの気まぐれで使わせてもらってるけど、本当にありがたいよね」

コの字の形をしたこの宮は、中庭を囲むように建っている。中央の玄関を入って左側、奥まった場所にあるユーリ専用の湯殿は、普段は人目がないためレイチエルと一緒に出入りしても安心だった。通りがかった使用人に見つかったとしても、私が湯浴みをしている間、湯殿の外で待機しているだけだ、と勝手に思ってくれるだろう。ただでさえユーリとの間に噂が立っているのだ、私とまで悪い噂が立てられたら彼女に申し訳ない。

口が堅いレイチエルは、親しくしているアルバートさんにも、私の正体を話していないらしい。皆は私を、遠い異国からやってきた

記憶喪失の少年だと思っているのだ。

騙していることを心苦しく思うが、少年と認識されていることで、楽な部分もあった。この世界の女性たちは、常におしとやかに振る舞うことが当然とされているのだ。女性らしさのかけらもない私に、それを要求されても無理だろう。

「さあ、マリイ様、お湯をかけますよ」

レイチエルも貴族の令嬢のはずなのに、私なんかの世話係などさせられて不満はないのだろうか？ 一度不思議に思ってた訊いてみたが、「マリイ様のお世話をさせていただけることは、むしろ光栄なことなんですよ」と笑われてしまった。私はただの庶民なのに。

サッパリと汗を流すと、脱衣場の外で待っていたソアレにギュウツと抱きついた。せわしなく振る尻尾が、ソアレの喜びを表現している。私が勉強している間に手入れをしてもらったようで、柔らかな毛からいい匂いがしていた。

第二十七話 wonder dog ソアレ

ソアレは不思議な犬だった。側にいるだけで心が落ち着き、考えが前向きになる。それだけでなく、私たち人間の言葉が理解出来るほど、彼は賢い。怪我をしたソアレに、「大丈夫？」と聞くと、必ず目を細め、笑顔で尻尾をサツと振るし、「ちよつと待っててね」と言えば、伏せをしてみせる。そうして、不安がらずにいつまでもおとなしく待っているのだ。

決して飼い主の欲目なんかではない。私が言葉にするまでもなく、こちらの気持ちを汲んで、一足先に動いてくれるのが、ソアレなのだ。

部屋にいるときのソアレは、緊張感のかけらもなく、だらあーんとして過ごしている。いつ見ても、後ろ肢を伸ばし前肢を曲げた状態で、お腹を見せて寝ているのだった。

最初に彼のお腹を見たのは、ユーリに保護されてすぐの頃だった。元の世界へ思いを馳せた夜、ソアレは涙をこらえる私の顔を舐めた後、おずおずと仰向けになったのだ。

仰向けになり、お腹を見せる行為……。それは、完全なる服従の意志だった。

仰向けになった彼は、内側に巻き込んだ尻尾を、私の機嫌をうかがうように小刻みに振った。そうして、涙の滲む私に笑ってみせたのだ。優しい微笑みだった。目をうつすらと細め、口角を上げ、少しだけ舌を出して。

まるで、ここにはボクがいるよ、と言ってくれてるかのよう。

差し出された彼の気持ち。それを目の当たりにした私は、抑え續けていた感情が弾け飛び、こらえきれずに嗚咽を漏らしたのだった。

ソアレだけでなく、この世界の犬は皆、人間と意志の疎通が出来るものだと思い込んでいた。しかし、それは違っていた。この世界においても、ソアレは特別な犬だったのだ。

それを知ったのは、王都へ来てすぐのこと。帰城した途端に忙しくなったユーリは、遅くまで仕事に追われ、小姓であるラキもまた、彼と共に王城へ上がっていた。

彼らがいない間、ゾンビ退治組の誰かが宮へ立ち寄ることが多くなり、その日もまた朝からエリオットくんがやって来て、ソアレの肢の具合を聞きに、私の部屋のドアを叩いた。

ソアレは、完治するまであまり動いてはいけなかったため、それに付き合う私も、自然と部屋でおとなしくしていることが多かった。その頃には、ボディランゲージによるYES、NOの簡単な会話が成り立つようになっていた。エリオットくんを部屋へ招き入れ、ソアレを交えて何気なく会話をしていると、私たちを交互に見比べた彼は、次の瞬間、目を見開き、顎が落ちそうなくらい口を開けたのだ。驚いたのは、私の方だ。だって、ソアレのような犬が、こちらでは普通だと思い込んでいたのだから。

ソアレとの会話は、私の質問に彼がYES、NOで答えるものだった。YESなら頷き、NOなら首を横に振る。シンプルで分かりやすい方法だった。

「ソアレ、エリオットくんがびっくりしてるよ」

- - YES

ソアレは目を細めて頷いた。ハッハッと嬉しそうに笑っている。

「君って、他の犬とは違うの？ 特別に賢い犬だったんだね」

- - NO、YES

彼は、眉間にシワを寄せて、答える。そうして、迷ったように首を傾げた。……どういう意味だろう？

「な！ それって『ボクは他の犬と同じだよ。でも、ちょっとだけ賢いけどね』って意味じゃないか？ ソアレ、違うか？」

立ち直りの早いエリオットくんが、そう言っただけで身を乗り出すと、ソアレは興奮してグルグルと尻尾を振り回した。

「やっぱりそうか！ 俺の家にも犬がいるから、なんとなく分かるんだよな。特にソアレは毛の色が俺の髪と一緒にだし、仲間だもんな」

大好きなソアレと意志の疎通ができたことに、エリオットくんは大喜びだった。その後、私たちは、エリオットくんの実家にいる愛犬について語り合い、大いに盛り上がった。

日が暮れて、去り際にエリオットくんが忠告したのは、「ソアレがそこまで賢いことは、なるべく秘密にしておいた方がいい」ということだった。彼は、ソアレの賢さが他人に与える印象を危惧していたのだ。

元の世界に置き換えたらよく分かる。もしも、ソアレのように会話ができる天才犬がいたとしたら、すぐに近所で噂になり、その噂を聞いたマスコミに報道され、心無い者に迫害された挙げ句、まさかの研究機関に拉致監禁……

ああ、そんなのイヤだ。……ということで、ソアレの秘密を知るのは、既に知っていたユーリとラキ、エリオットくんを始めとするゾンビ退治組、この宮では執事のアルバートさんと侍女頭のミラさん、そして、後から入ったレイチエルのみとなった。

あれから、私は ” ダルマさんが転んだ ” にハマっている。

最初はソアレに教えて、部屋でこっそり楽しんでいたものを、それを目にしたレイチエルが仲間に入り、様子を見に来たマイオスさんを引きずり込むと、後は、自然とみんなが巻き込まれていったのだ。

さあ、今日は誰が来るだろうか。ケペシュさんかな？ それともマイオスさんかも？

マイオスさんならレイチエルが喜ぶだろうな。私たちが出会ったとき、悪い男たちに絡まれていた彼女を救ったのは、誠実で、親切で、その上強いマイオスさんだったのだから。

もたれてくるソアレを抱き寄せてそう言つと、大きな瞳を悪戯っぽく輝かせた彼は、ひと声鳴いて頷いた。

第二十八話 夜の散歩

「ユーリさん、また眠れないんですか？」

コの字型の白い建物に囲まれた、夜の中庭。私たちが来る前は、手入れされた花々が咲き誇る、とても美しい場所だった。三ヶ月経った今、その庭はすっかり様変わりして、入り組んだ生け垣よりも、芝生の面積が大幅に増えていた。ソアレが自由に駆け回れるよう、いつの間にか、ユーリがリフォームしてくれていたのだ。

純白の大きな月と、手を伸ばせば届きそうな星々が瞬く秋の夜空。ベンチに座ってそれを見上げていたユーリは、私の声に振り向いた。きつと彼は、私の気配に気付いていただろう。とても耳聡い人だから。

ユーリの隣に座って微笑むと、ソアレの顎を膝に乗せた。

「少し考えることがあって、頭を冷やしに出て来た。マリーイも眠れないのか？」

苦笑したユーリが、バンダナをしていない私の頭をクシャクシャにかき回す。唇を尖らせた私は、その手を押さえて、隣に座るユーリを見上げた。

「僕は、ソアレと一緒に夜の散歩をしているだけですよ。……ちょっと、ユーリさん」

「はは。久しぶりだな、おまえの髪。だいぶ伸びたんじゃないか？」
「はい。こんなに黒いところが出てきたんですけど、夜ならバンダナを外しても平気ですよね？」

「こーんなに、と、親指と人差し指で五センチくらい、広げて見せ

た。

「ああ、でも念の為だ、用心しろよ。……そうだ、マリーイ。今、面白いものを作らせているから、出来上がったらおまえにやろう」

砕けた口調で悪戯っぽく笑う彼は、年相応に見える。

「なんですか？ 面白いものって」

「シルバの村で見つけたものだ。半分焼けていたが、おまえに必要なだと思つて、今、新しいものを作らせているんだ」

彼は、あの事件のことを常に考えていた。証拠がなく目撃者もないため、捜査に進展がないのだ。ユーリの顔を見上げると、さっきまで柔らかかった表情に、ほんの少し、陰が差していた。

くうんと鳴いたソアレが、ユーリの手に、その冷たい鼻を押し付ける。慰めているのだろう。優しい子だ。ユーリは、再び微笑んでソアレの耳の後ろを搔いてやった。

そんなユーリを見つめながら、ふと、ケペシュさんの話を思い出す。一瞬通り抜けた冷たい風。首をすくめた私は、体に巻き付けた毛布をかき寄せた。

……その日、私の部屋でソルフェーニユ王国の歴史を教えてください。ケペシュさんは、ソアレをチラリと見ると、突然、話し始めたのだった。

「最近のユリジェス様は、毎晩、マリイとソアレの待つ宮へお帰り

になられているね」

私は、ただ、苦笑いで応える。以前のユーリは、王城へ泊まることが多かったらしく、このところ毎晩帰宅するのは、レイチエルが来たからだと噂されていた。

「ユリジェス様は、王よりもお忙しく働かれてるのだよ。知っていたかい？」

- - 国王よりも、ユーリが？

確かに、ユーリの帰りは毎晩遅い。部屋に仕事を持ち帰っているのも知っていた。だけど、まさか国王よりもユーリの方が働いているとは……

- - ユーリだけが、忙しい？

なぜ？ と、首を傾げる私に、ケペシュさんは簡単に説明をしてくれた。

この国には、今、宰相がいない。その代わりに、ユーリが国王のそばについていて、政務を補佐しているという。父でもある国王は、想像以上に能力のある二番目の息子に頼りきりとなっていた。その結果が、今、というのだ。

若干二十三歳という若さにもかかわらず、その双肩に重責を背負うユーリ。だけど……、と、ユーリを見上げる。こうして私の横に座る彼は、年相応に笑う、普通の青年に見えた。

「……そうか、おまえの世界の医療は、そこまで進んでいるんだな」
「はい。病気の治療のことは、僕も詳しくは分かりません。でも、怪我した場合に一番重要なのは、傷口を清潔に保つことなんですよ。治療をする前に、アルコールできれいに洗わないと、そこから腐ってしまふこともあるんです」

「ああ、従来の消毒方法では足りなかったから、高熱を出したり、すぐに患部を切り落とさなくては死に至るような症状が多く出ていたのだな」

「そうです。十分な消毒によつて、助かる命が増えると思います。緊急時で、手元にアルコールがなくても、普段飲むお酒で大丈夫ですから。それから、包帯を取り替えるときも、毎回必ずアルコールで消毒してくださいね。治療する人間の手もアルコール消毒して、包帯も、布も、煮沸消毒すること。マイオスさんと獣医さんには、口が酸っぱくなるくらい言っておきましたけど」

最近の彼は、私に対しても、打ち解けて話すようになった。今夜だってそうだ。二人と一匹、砕けた口調でたわいのない話をしながら、月光浴を楽しんでいる。

「そういえば、ユーリさんって、すごいモテるらしいですね」
「っ！ ゴホッ、な、なにをいきなり……」

「だって、この宮にレイチェルが来たことで、ユーリさんに憧れる女性たちの戦いがすごいことになってるって、噂で聞きましたよ」

ユーリはキュッと眉を寄せた。

「……レイチエルが来たことには、何の意味もない」

「そんなの分かってますよ。マイオスさん狙いなんですから、レイチエルは」

「っ！……そうなのか？」

「そうですよ。……知らなかったんですか？」

「あ、ああ……」

まずいことを言っちゃったかな。ユーリが驚いている。沈んでいる。……なんだか、ちよつと面白くない。

「ユーリさんはどうなんです？　そろそろ奥さんを貰わないといけない年齢じゃないですか？」

「……それを言ってくれるな。わたしには、まだ側室もないのだから」

「は？　ソクシツ？」

頭を抱えていたユーリが、私の疑問の声に、顔を上げた。

「側室だ、側室。父は十五人、兄上も二人側室がいる。正室以外に」

「正室って奥さんですよ。じゃあ側室って、まさか、あ、愛人？」

「まあ、……そうなるのか？　側室と言っても、正式な妻に変わりはないが」

「だ、だって！　ちゃんとした奥さんがいるんでしょう？　それ以外にですよ、どうして他に何人も奥さんが必要なんですか！　ハーレムですか！？」

「ハー……レム……？　いや、王族の血を絶やさぬ為にも、必要なことなんだ。それと、政治的な意味合いもあるな」

私の眉が、これ以上ないほど寄せられる。それを見つめるユーリ

の瞳は、困惑でいっぱいになっていった。

「なんだか気持ち悪い話ですね。僕には理解できません」

「おまえの世界では、違うのか？」

「昔は日本でもそんなこともあったし、今もそんな風習の国がありますが、僕自身は生理的にダメです。僕なら、ただ一人を、生涯かけて愛し抜く方がいいですね」

つい、渋い顔をしてしまった。これはユーリたちの風習であって、私には全く関係のない話なのに、余計なことを……。すぐ横に座るユーリも、眉を寄せて考え込んでいる。それだけ、私の言うことは、この世界の常識からかけ離れているのだろう。

「さあ、ソアレ、すっかり冷えちゃったね。そろそろ部屋に帰ろうか」

そう言ってベンチから立ち上がった私は、気まずい気持ちを押し隠すように、硬い笑顔を向けるのだった。

第二十九話 王家の婚姻制度

その翌朝。清々しい笑顔を浮かべたレイチエルが、身支度の手伝いにやってきた。ドレスを着るわけでもないし、誰かに手伝ってもらうほどのことはないと言うのに、私の世話係となったレイチエルに押しきられて以来、毎朝の習慣となっていた。

鏡の前に座り、貴族令嬢のレイチエルに、昨夜から気になっていた王家の婚姻制度について聞いてみた。この世界では、王族が側室を持つのはどうやら普通のことらしい。大奥と同じ、一夫多妻制というわけだ。

複数の妻を持つ理由のひとつとして、王家の血の維持がある。不妊や不仲などが原因で、正室との間に子ができない可能性があるし、生まれたとしても数に限りがある。嫌な話だが、その子が無事に成人するとも限らない。

そして、もうひとつの理由は、政略結婚だ。力を持つ貴族の支持を得るために、または、他国との関係を強化するために、年頃の令嬢を妃として迎え入れるのだという。

一夫多妻制。ファンタジーの世界ではよくある話だけれど、この世界もそうだったなんて、ちょっとショックだった。

それに、政略結婚。そんな始まりだとしても、夫婦として共に居るうちに、いつしか愛情が芽生えるものなのだろうか？ あの頑固な父方の祖母も政略結婚だし、きつとそういうことなんだろうけど。重いため息がこぼれる。やっぱり現代日本に庶民として生まれ育った私には馴染めない話だった。

「マリイ様、どうかなさいました？」

私の髪を丁寧ブラッシングする手を止めて、レイチエルは、鏡越しに気づかわしげな視線を寄越した。首筋にかかるピンクの後れ毛が、きれいにウェーブして揺れている。なんでもないと微笑んで先を促すと、怪訝な顔をしながらも、説明を続けてくれた。

レイチエルの話によると、妃たちの関係は私が想像していたものとは全く違っていた。”側室がいるのは当たり前” そんな前提があるからか、妻同士が仲良くお茶したり、夫を招いて宴を催したりと、なんの問題もなく毎日を過ごしているらしい。

奥さん達が仲良くお茶？ まったく、私には理解できない世界だ……。

もちろん、誰が先に御子を授かるか、誰が一番寵愛を受けているか、全く気にならないはずはない。それでも、気位の高い妻たちは嫌な顔をチラとも見せずいつも上品に笑っているというのだ。私が演じた『大奥』では、壮絶な女の戦いが繰り広げられていた。ここの実情も、もしかしてそう変わらないのではないか？

よほど変な顔をしていたのだろう。バンダナを着けてくれたレイチエルは、私を元氣付けるようにこう言った。

「ユリジエス様なら大丈夫ですよ。きっと、まだまだ先の話ですわ」

まだ先の話……、そうなのかもしれない。毎晩遅くまで激務に追われて、息抜きの時間もないユーリ。あれでは、結婚どころか恋愛をする余裕もないに違いない。……っというか、レイチエル、あなた何を誤解してるの？

朝食の席に、ユーリの姿はなかった。ラキによると、使用人たちが起き出す夜明けよりも早い時間に宮を出たのだという。昨夜のユーリを思い出す。庭で声をかけたとき、酷く考え込んでいるように見えたが、彼は本当に大丈夫なのだろうか。

「マリイ、どうかした？　なんだか難しい顔してるけど」

パンをちぎりながら、ラキが問いかけてくる。ああ、ラキも疲れしているように見えるなあ。もしかして、今は忙しい時期なのかもしれない。日本の師走や年度末のように。

「ううん、なんでもないよ。それよりラキの方こそ大丈夫なの？　ちょっと顔色が悪いよ」

最近のユーリとラキは、働き過ぎだと思う。このままでは、いつか倒れてしまうのではないかと心配だ。

「僕は大丈夫だよ、マリイ。さて、そろそろ行かなきゃ。ユリジェス様がお待ちだ」

慌ててコーヒーを流し込んだラキは、じゃあね、と言い残して去っていった。

ユーリたちと同じく、忙しい毎日を送っているゾンビ退治組だが、それでも誰かが宮へ立ち寄る習慣は変わらなかった。

この日に訪ねてきたのはケペシュさんだった。またユーリのことを話してくれるかな？ なんでもいいから教えてほしい。

「やあ、マリイ、またソルフェーニユの歴史を勉強するかい？」

「こんにちは、ケペシュさん。歴史はまた次の機会にお願いします」

明るく挨拶をしながら私の部屋に入ってきたケペシュさんに、私も挨拶を返したが、なんだか彼も疲れてるみたい。みんなヨレヨレになって、本当にどうしたんだろう……。

お茶の準備をしていたレイチエルが、ワゴンを押して入ってきた。木目が美しいテーブルに、次々とセットしていく。バター付きスクリーンにフルーツジャム数種類、シンプルで小さなケーキと甘いけど塩気のきいたビスケット、そしてサンドイッチ……。

ここでコーヒーでなく紅茶が出てきたら、本格的な英国式アフタヌーンティーセットになるところだ。言葉は通じるし、無添加の食事は元の世界よりも美味しい。異世界に落ちたとはいえ、私は本当に恵まれている。

ひと息ついたところで、ケペシュさんが口を開いた。

「マリイ、昨夜か今朝か、ユリジェス様に会ったかい？」

「はい。昨夜遅くに偶然庭で……」

「あの方に何か変わったところは？」

「え？ いいえ、特に気付きませんでした……。あ、でも、声をかけたとき、なんだか深刻な顔をしていましたよ。話してるうちに気が紛れていったみたいですけど」

私の方が聞こうと思ってたのに、先を越されてしまった。ユーリに何かあったのだろうか？

「ユリジェス様が、精力的に仕事をしているんだよ……」

「……………はあ？」

「今朝、いつもの時間に執務室へ行ったら、ユリジェス様が、既に何件もの仕事を片付けておしまいになってたんだ」

眉間をもみほぐしていた手をパツと離すと、ケペシュさんは、私を見つめた。明るいブルーの瞳を困惑に染めている。

「はあ……」

あのユーリが元気に仕事をしている？ 予想を裏切る話だ。

「ユリジェス様は、本当にお疲れのご様子だったんだ。正直に言う
と、そろそろ限界がきてもおかしくないように見えていたよ、わた
しの目には。なのに……」

ケペシュさんの話に驚き、レイチエルと顔を見合わせる。どうやら彼女にも思い当たる節はないようだ。ソアレにも何か知ってるか聞いてみたが、首を横に振って”知らない”と答えた。

ケペシュさんの話は、さらに続く。

「そうやって無理に時間を作ったユリジェス様は、今夜遅く、ライ
カ侯爵の屋敷でエリザベス嬢とお会いになるそうだ」

その一言に反応したのはレイチエルだった。片付けていたお皿を、
ワゴンの上に落としたのだ。

「レ、レイチエル？ 大丈夫？ 怪我はない？」

口元を両手で覆ったレイチエルは、驚いて立ち上がった私を見つめていた。澄んだ紺碧の瞳を見開いたまま。

「い、いいえ、なんでもありません。ただ、わたくしが以前お世話になっていたのが、ライカ侯爵家、……エリザベス様のお屋敷でしたので、少し驚いてしまっただけですわ」

「ああ、そうなんだ。びっくりしたよ」

ホッとした私は、レイチエルが動く前に、さつさと割れたお皿を片付ける。まだ少し動揺しているらしいレイチエルを、隣の席に座らせた。

もうすぐ冬、ずいぶん日が落ちるのが早くなった。レイチエルの代わりに部屋の明かりを灯して回ったケペシュさんは、さつきよりも明るい口調で話した。

「ユリジエス様も、そろそろ決心されたということかな」

「まさか、そんな……」

「今までは、お忙しいことを理由に避けておられたが、いつまでもお独りではられない。ユリジエス様も、そうお考えになったのかもしれない」

「ですが！」

「ああ、わたし達も信じられないよ。しかし、」

ちょっと待つて。二人が話しているのは、もしかして……

「一度ユリジエス様に召されたことで、ご正室候補の筆頭に上がったエリザベス嬢だ。とうとうお決まりになったのかもしれないな」

ユーリは、結婚、するの……？

第三十話 自覚した想い

- ユリジェス様のご婚約はいつになるのかしら

- わたくしは、ユリジェス様にはセリエ伯爵のジュリエッタ様がピッタリだと思いますわ

- あら、それなら、アイダー公爵のシェリル様も素敵な方よ

- いつそのこと、隣国の姫君をご正室としてお迎えしてはいいがかしら？

この三ヶ月の間に、何度も耳にしてきたではないか、今さら驚くことなんて一つもない。もちろん私だって分かっていた。いつかは、そんな日が来るってこと……

温かな夕食が、目の前に並んでいる。こんがりとローストされた骨付きチキンに色とりどりの温野菜。ほくほくポテトに溶けかかるのは、コクのある濃厚バター。いつもと同じく、美味しそうな料理なのに、今夜のそれは、不思議と味がしなかった。ボソボソとして水を飲んでも喉を通らないのだ。執事のアルバートさんと侍女頭のミラさんは、そんな私を心配そうに見ていたが、事情を知っているレイチエルから、何かを聞いているのだろう、そっとしておいてくれるのがありがたかった。

ベッドに入ってから、私は、漠然とした不安を整理しようと努

めていた。

- 一度ユリジェス様に召されたことで、ご正室候補の筆頭に上がられたエリザベス嬢だ。とうとうお決まりになったのかもしれないな

ユーリの愛する人……。そう考えただけで、ずきん、と胸が痛むような気がした。そんな筈はない。ユーリが誰と一緒にいると、無関係な私が傷付くはずはないのに。

ソアレが私を見上げている。右前肢をベッドにかけて、心配そうに、くうん……。と鳴いた。

- 彼に、会いたい

私は大きな窓を開け放ち、広いバルコニーへとよるめき出た。

コの字型に建てられたユーリの宮。その二階の端に私の部屋があり、最上階である三階中央に、ユーリが休む主寝室があった。主寝室の隣は警備兵の控え室で、今は、暗く静まり返っている。警備兵の不在……。それは、ユーリがまだ帰宅していないということを意味していた。

握りしめた手とは裏腹に、視線は下へと落ちてゆく。その先にあるのは、ユーリと一緒に過ごしたあのベンチ。

わけの分からない焦燥感が、じわじわと私を苛む。それを振り切るように鋭い息を吐くと、薄手の毛布を掴み取り、誰もいない中庭へと駆け下りていった。

徐々に明るさを増していく中庭で、私は思い出深いベンチに座っていた。隣で笑っていたはずのユーリは、今頃ご正室となる女性を腕に、暖かなベッドで眠っているのだろう。それを思うと、鉛を飲み込んだように苦しくなる。表情を無くした私は、頭上からハラハラと落ちゆく茶色を、ただ、視界に映すばかりだった。

- ユーリさん

声に出さずに、その名を呼ぶ。気付いたソアレが私を見上げ、遠慮がちに尻尾を振った。

出会いは、ライデーターヌの聖地だった。月光に輝く銀の髪。彼の姿を初めて目にしたとき、私は、心臓を射抜かれたような衝撃を受けた。その強い感情は ” 恐怖 ” だと思っていた。だけど今なら分かる。私はあの瞬間に、初めての恋に落ちていたのだ。

野営地でも、私はずっとユーリを避けていた。彼のことが恐ろしかったからだ。

小姓にすると言い切ったユーリの顔が目に見え、贈られたバンダナが、私の身を守るためだったこと。ソアレも宮へ連れてくればいいと、ぶっきらぼうに言った時の喜びと安堵。私の名前を呼べないユーリを可愛く感じ、その立場ゆえに弱音を吐けないことに胸が痛んだ……

- 私は……彼のこと……

自分の気持ちに気付いたとき、溢れる涙がこぼれ落ちた。想いを自覚した瞬間に失恋してしまうなんて、胸が痛くてたまらない。まるで、心の一部が削り取られていくようだった。

冷たいベンチに手を突いて、そのままゆっくり倒れ伏す。額を付けて熱を逃す間、体を寄せたソアレが、私の足元を暖めてくれた。た。

気持ちが落ち着き、涙が乾くころには、もうすでに夜が明けていた。建物の内外から使用人の働く気配が伝わってくる。早く部屋に戻らなくては、またレイチェルに心配をかけてしまうだろう。

立ち上がりながら思った、この気持ちをユーリに気取られてはならない、と。居心地の良いこの場所を失わないよう、私の気持ちは心の奥深くにすべて隠してしまうのだ。

そう決心したとき、明るい声が聞こえてきた。肩がピクツと跳ね上がる。

「マーリイ、もう起きていたのか？」

ユーリだった。彼女のもとから帰って来たのだ。建物内に残した従騎士へ声をかけ、私の方へと早足で歩いてくる。

「今朝はすいぶん早起きじゃないか」

腫れ上がった目元だけでなく、ユーリへの気持ちまで一緒に覆い隠そうとして、私は肩に掛けていた薄手の毛布を、すっぽりと頭から被り直した。

「ユーリさん、おはようございます。雨が振る前に、ソアレの散歩に出て来たんですよ。ほら、今にも泣き出しそうな空してます」

口角を上げて、微笑んでみせた。ユーリが空を見上げる気配がする。

「そうだな……。おまえと見た星空とは大違いだ」

幸せだったひと時を思い出し、ずきん、ずきん、と胸が痛んだ。

「……じゃあ、そろそろ部屋に戻りますね。バンダナをしてないから、髪が気になってしょうがないんです」

「あ、ああ……」

「では、また後で」

ユーリは背が高い。毛布を被った私の口元しか見えていないはず。油断していた私は、気付かなかった。彼から私が見えないように、私からも、彼の表情が見えていなかったことを……

第三十一話 夢と現実の狭間

泣きはらした顔を見られなくなかったから、私は頭から毛布を被り、侍女たちの横を早足にすり抜けていった。廊下の突き当たりにとどり着いた私は、自室のドアを大きく開き、後から付いてきているソアレを先に通した。後ろ手にドアを閉めたたん、ずるずるとその場に崩れ落ちてしまう。顔を上げると、振り返ったソアレが急いで近寄ってくるのが、最後に見えた。

それから間もなくして降り始めた冷たい雨。昼を過ぎる頃にはさらに雨足が強くなり、夢と現実の狭間を行き来する私は、そのサーサーという音を聞くとともにしに聞いていた。

秋も終わりというこの季節、一日のうちで最も冷える朝方に、薄い毛布を被っただけで庭のベンチに座り込んでいたのだ。当然のことながら風邪をひいた私は、高熱を出して寝込んでいた。

部屋への入室を許されたのは、黒髪のことを知っているアルバートさんとミラさんだけ。私を心配して来てくれた侍女たちは皆、レイチエルによってやんわりと追いつ返されていた。

「昨夜からご気分が優れないようでしたが、お風邪を召しておいでだったんですね」

執事のアルバートさんが、心配そうに眉尻を下げた。ベッドに伏せた私のそばには、表情を曇らせたミラさんもいる。

「ユリジェス様とラキ様のご心配ばかりしてらして、マリイ様は、ご自分のことには無頓着なんですから……。わたくしも気付いて差

し上げられなくて、自分が情けのうございます」

「それはわたしもですよ、ミラどの。夕食をお召し上がりにならず早々に休まれたので、心配してはいたのですが……」

「アルバート様、ミラ様、どうぞご安心くださいませ。お医者さまにも診ていただきましたし、マリイ様はもう大丈夫ですわ」

心配してくれる二人に悪くて情けない顔をしていると、ベッドサイドで風邪薬を用意していたレイチエルが、明るい口調でとりなしてくれた。

「はいどうぞ、マリイ様。苦いですが、全部ちゃんと飲んでくださいね」

軋む体を起こし、背中にクッションをあてがってもらうと、温かい薬湯を手渡された。お世話になりっぱなしのレイチエルに、もごもごと口の中でお礼を言う。わざと厳しい顔を作っていたレイチエルは、そんな私を見て安心したように表情を和らげた。

床にうずくまって荒い息を吐いていた私を見つけたのは、ソアレの鳴き声を聞いて飛び込んできたレイチエルだった。彼女はすぐにアルバートさんとミラさん呼び、意識の混濁した私をベッドへ運んでくれたらしい。

夕方になり、やっと起き上がれるようになった私は今、オートミールのようなドロドロとした病人食を食べ終えたところだった。ほんのりとした甘さのそれが美味しく感じる。ひと眠りして落ち着きを取り戻したため、普段ほどではないにしろ、いくぶん食欲が戻っているようだった。

王城にいるユーリへ知らせが入ったのだらう、ゾンビ退治組の訪

問が今日はなく、その代わりに、ラキが仕事を切り上げて早めに帰ってきた。ユーリに指示されてのことらしい。

「マリイ、倒れたんだって？ 大丈夫？ もう熱は下がったのかな」

ノックした彼が入ってくると、アルバートさんとミラさんが席を立った。ラキに微笑んで退室していく二人に、私はもう一度お礼を言う。その間にラキは、レイチェルとソアレに挨拶をしていた。

ベッド脇のイスを軽くひいて腰掛けたラキは、私の顔を覗き込むと「まだ顔色が良くないね」と、冷たい手をオデコに当ててきた。昨日の朝、彼の体を心配したばかりだというのに、私の方が先にダウンしてしまうなんて恥ずかしい。気まづくなったら私は、手にした器を口に運んで、予想外のその苦さに顔をしかめた。

「マリイ様、ゼーんぶ飲み干してくださいね」

レイチェルのおどけた口調に、自然と表情が和らぐ。私の様子がおかしいことに気付かない彼女ではない。それでも、レイチェルは何も訊いてこなかった。ただ、彼女は黙って微笑み、私のそばにいてくれた。そのさりげない優しさに応えるためにも、早く元気にならなければ、と思う。

「急に倒れただなんて、心配したよ。これまでの疲れが、今になってドツと出てきたのかな」

「うん、きつと気が付かないうちに疲れがたまってたのね。ソアレのお散歩から帰ったら、なんだか急に脚がガクガクして、立っていられなくなっただけ」

嘘ではない。だけど、ユーリへの想いは胸に仕舞っておきたかつ

た。いつも一緒にいるレイチェルなら、自分でも気付かなかった私の気持ちを察していることだろう。だけど、彼女は、それをはつきりと口にしたことはなかった。

「うーん、心配だね。そばに居てあげたいけど、僕も明日からシルバだから……」

「え、もう？ ……あれから、もうひと月が経ったのね。シルバの工事はどこまで進んでるのかしら？」

ラキは、毎月五日間ほど王都エメレムを離れる。馬で一日の距離にあるシルバの村へ出向くのだ。次期ファツォアークの長であるラキは、シルバ村に滞在する三日の間に、ライディーヌの聖地で祈りの儀式を行い、再建工事が進む村の様子を見て来るといふ。

「もう三十人以上は集まっているよ。予想では、五十人くらいまで増えると思う。離れていた幼なじみも村へ来てくれると言うし、エメレムで商いをしている元村人たちが、これからもシルバと行き来して物資を提供してくれるそうさ。畑や水源は無事だったから、人さえ集まれば、なんとかかなりそうだよ」

「そうかあ。もうすぐラキの大切な村が蘇るんだね。本当に良かった……」

その言葉に、ラキは輝くような笑顔を見せた。彼は、家族の無事を信じて、今も搜索を続けている。その思いが報われるよう、私は心から神様に願った。

シルバ村から、話題はいつしか仕事のことへと移っていった。

「……そうやって、反発の芽を摘みながら、ユリジエ様は少しずつ改革を進めていかれてるんだ。だから、もう少しの辛抱なんだよ」

あれほどユーリの仕事について聞きたかったのに、今の私は、心がそれを拒否していた。

「……心配だったんだ。なのに、そのユリジェス様が急に元気になられたと思ったら、宮ではマリイが倒れてるんだもの。なんだか、変にタイミングが合ったみたいだね」

あははと笑うラキに、私も乾いた笑みを返した。ギョツと心臓を掴まれたような痛みが走る。ユーリが元気になった理由を知っているから……。朝帰りしたときの様子を、この目で見てしまったから……。

- - 考えちゃ、だめ

こちらへ歩いてくる彼の姿が……、私を呼ぶ明るい声が……、色鮮やかに、蘇る。

私は、とつさに胸を押さえ、痛みに耐える。

……と、そのとき、ソアレが突然ラキの前に躍り出た。前肢をぐーっと伸ばして、悪戯っぽく笑っている。伏せた上半身とは反対にお尻を高く上げて、素早く右へ飛んだと思ったら、次の瞬間には左へ飛び、両肢をパンツと床に叩きつけると、そのまま後ろに飛びずさった。 ”遊ぼうよ！” の誘いにラキが「よし！」と受けて立つ。躍り上がったソアレは、跳ねながら部屋の中央へと移動していった。

隣に視線を移すと、心配そうにこちらを見ていたレイチエルが、ニッコリ笑ってウインクを飛ばしてきた。きっと彼女も気付いたのだろう、賢いソアレが、なぜあの場面でラキを遊びに誘ったのかを

……

部屋の中央で、二人は楽しそうに取っ組み合いをしている。レイチエルと並んでそれを眺めながら、私は、徐々に穏やかな気持ちを取り戻していくのを実感していた。

第三十二話 恋愛小説

高熱を出したその夜、大事をとって、自分の部屋で軽めの夕食をすませた私は、何かあったらすぐに呼ぶからと、レイチエルを説得して先に休ませた。私はもう元気になったし、疲れているはずの彼女に夜くらいはゆっくりしてもらいたかったのだ。

そうして、私は自分でお茶を入れると、書庫から新しく借りてきた本を開いたのだった。

都合の良いことに、こちらの世界の言語は、日本語と同じような配列で単語を組み合わせる文章をつくる。その単語を覚えるのが大変かと思っただが、一度覚えた単語はなぜか二度と忘れることなく、今では男女の機微を描いた複雑な恋愛小説まで読めるようになっていた。

こちらには元の世界のような印刷技術がなく、一冊一冊が人の手によって丁寧に書かれ、紙と糸となめし革を使って製本される。そのため、この世界では本はとても高価で貴重なものだった。しかし、幸運なことに、ユーリの宮には大きな書庫があり、そこには、学校の図書室のようにたくさんの本が並んでいた。今読んでいる小説も、そこから借りた中の一冊だ。

聞いた話では、王城には、さらに大きな書庫と、大陸中から集めた貴重な文献が管理されている資料保管室があるらしい。一般の者が入るのは難しいという話だが、ユーリに願い出れば、もしかしたら、なんとかなるかもしれない。元の世界へ還りたいかと問われれば、今となつては微妙なところだけど、その方法があるというのなら知っておきたかった。

夜になってやっと、半日降り続いていた雨が止み、窓の外には今や、冷たい夜霧が立ち込めていた。

暖炉の前で眠っていたソアレが、ピクツと何かに反応して体を起こすと、ぺらぺらの耳を立ててドアを見つめていた。少しの間、耳をすましていたかと思ったら、こちらを向いてハッハツと口を開ける。大きなウォールナットの瞳は輝いて、生き生きとしていた。

何？ と首を傾げ立ち上がった私は部屋のドアへと足を向けた。

かろうじて聞こえる程度の、ためらいがちなノックが聞こえる。

はい、という返事と同時に開けたドアのその先に立っていたのは、いまだマントを羽織ったままの、銀髪を霧でしっとりと濡らしたユーリだった。

「マリーイ、もう、起きてても大丈夫なのか？」

いつもよりかなり早い時間に帰宅したユーリだけど、その様子から、自室に戻る前に直接私の部屋を訪ねてきたのがわかった。私は驚きに目を丸くする。

「お帰りなさい、ユーリさん」

ユーリを前にしても、さほど動揺しない自分に驚く。さんざん泣いて熱を発散させたことで、彼への気持ちが多少は落ち着いていたのだろう。

「いつもは消灯の鐘が鳴ってからかしの帰宅なのに、今夜はずいぶん早いですね。いったいどうしたんですか？」

実らない恋なんてするもんじゃない、と初めての感情に苦しんだ。だけど、少し時間をおきさえすれば、こうして普通に話せるように

なるのだ。そんな自分に安堵して、私はユーリに微笑みかけた。

「おまえが倒れたというから、山のようにたまった仕事を明日に回して帰ってきたというのに、おまえは、まったく……！　どうにかなんらか、その言い方は」

ムツとしたように顔をしかめた彼は私の横を通り過ぎ、さっきまで本を読んでいたテーブルに歩み寄る。少し乱暴にイスを引き深く腰かけると、その長い脚を組んでこちらを軽くにらみつけた。

「で、熱は下がったのか？　吐き気やめまいはおさまったか？」

私も座りながら答える。

「ああ、はい。ご心配おかけしてすみません。もう大丈夫ですよ。ぐっすり寝たら熱も下がって良くなりました。いつもよりも体が軽く感じるくらいです」

鎖骨の前あたりで両手をグツと握り、ガッツポーズを作ると、皮肉げな苦い笑みを浮かべていたユーリが表情を緩め、ほんの少しだけ柔らかな雰囲気になった。良かった。

「……そうか」

そう言って目を細めた彼は、組んでいた脚をほどいて身を乗り出すと、いつものように私の頭にポンと手を乗せた。嬉しい。

「いつもご迷惑おかけしてすみません」

気にするな、というようにユーリは笑って首を振る。

「……でもですね。お世話になるばかりじゃなくて、僕も何かお手伝いができればいいな、と思ってたんですよ。仲良くなった侍女たちの仕事を手伝ったり、厩舎で馬の世話をさせてもらったりしたかったんですけど……、みんなに驚かれてすぐに追いつかれちゃいました」

「……………」

「そういう仕事がダメなら、最初に言われてたようにユーリさんの小姓をするしかないと思って、ずっと字の勉強をしていたんです。ほら見て、ユーリさん、だいぶ字が読み書きできるようになったんですよ、僕」

読みかけの恋愛小説を、ほら、とユーリに見せる。澄んだ紫紺の瞳は、複雑な思いでいっぱいのようなのだ。

「なので、そろそろ僕も小姓として働かせてもらえたら嬉しいんですけど……………」

私のその言葉を聞くと、ユーリの眉がキュツと寄った。なぜ？

「あ、ユーリさんの小姓じゃなくても、何かお手伝いとかできたらいいな、なんて……………できたらお城の書庫の整理とか」

「……ああ、書庫か。おまえは本当に、なんて言うか、勉強熱心だな。まあ、少し待て。それについては考えておこう」

少し柔らかくなった視線で見つめてきたユーリは、にっと口角を上げると席を立ち、マントを翻して私の部屋を後にしたのだった。

翌朝、晴れ上がった空に太陽が顔を出し始めた時刻、正面玄関の外に、私とソアレ、そしてレイチエルは立っていた。シルバの村へ出発するラキと、そのお供四人を見送るためだった。

その後すぐにユーリが出て来たのに驚いて、「今朝はまたずいぶん早いんですね」と言うと、「誰のせいだと思ってる」とバンダナに半分隠れたオデコを軽く小突かれた。

ユーリの前でもいつもと変わりなく笑う私を見て、レイチエルはホツとした様子で胸をなで下ろしている。……きつと、すごく心配をしてくれてたんだろう。

昨夜の雨で、まだ外はどこどころぬかるんでいた。自分の前肢を見下ろして情けない顔をしたソアレ。苦笑した私は彼の四肢をきれいに拭いて建物内に入ると、昨日から心配してくれていた侍女たちにお礼を言いに行った。本当は黒髪が丸見えだったために部屋に入れてあげられなかったのだけど、それだけ具合が悪かったのだからと勝手に誤解してくれたので、そこはあえて訂正しなかった。

こうして寒い廊下を早朝からウロウロしていたら、アルバートさんとミラさんに見つかり強制的に部屋へ戻されてしまった。

風邪が完治するまでおとなしくしてようと、読みかけの小説のページをゆっくりとめくる。それは、あの運命の日に舞台上演じていた”シンデレラ”を思い出させる内容だった。

第三十三話 露呈（前書き）

お待たせいたしました！

これにて、『サイドストーリー』『異世界のおとぎ話』を下げさせていただきます。この物語は、後々重要な場面で出てくる予定ですが、今回、期間限定で披露させていただきました。

第三十三話 露呈

はあ……。

堅牢な装丁の本をパタンと閉じると、私は宙を見つめ、感動の溜め息をついた。

異世界のおとぎ話は、貧しい娘シエラと見目麗しい王子様のラブストーリーだった。

その中で、王子様は、貧乏でも明るく朗らかなシエラだけを求め続け、あれほど王子様の側へ行きたがったシエラは、自分の恋心よりも国の安全と彼の幸せを願って姿を消すという、切なくも悲しい結末を迎えている。

物語はこれで終わっていて、その続きは読者の想像力に任せる形となっていた。

宙を見つめたままの私は、しばらくの間、彼らのその後を思い描いていた。そして……

- - 私がシエラを演じるなら、そう、冒頭のあの場面で……

久しく忘れていた女優魂に火が着いたところで、レイチエルの声が私の思考をストップさせた。

「失礼します、マリイ様。あのう、いつもの皆様ですけど、今日は全員お揃いでいらっしゃってるのですが……」

「あ、ああ、ありがとう、レイチエル。……皆様？ まあ、いつか。どうぞ中に入っていたらいい」

突然現実に取り戻された私は、レイチエルの言葉に首を傾げる。

いつもの皆様って、代わる代わる日替わりで宮に立ち寄ってくれているゾンビ退治組のことだろう。彼らはいつも一人で来るか、多くても二人。皆が揃ってここへ来るのは、この三ヶ月で初めてのことだった。

レイチエルに案内されて、赤毛のケペシュさんが入ってくる。扉の内側で出迎えると、彼はいたわるような、憐れむような、どうにも言葉にし難い視線を私に向けてきた。その後が続いたのは、金茶色したおかつぱ頭のエリオットくん、若草色の豊かな髪のマルセリーノさん。最後に焦げ茶色の短髪がすっきりとしたマイオスさんが一礼をして入ってきた。

「こんにちは、マリイ。もう大丈夫なのかい？ 君が倒れたと聞いて、みんな心配していたんだよ」

最年長のケペシュさんの言葉に、一同、真剣な顔をして何度も頷く。

「あ、あの……、ご心配おかけしたようで、申し訳ありません」

たじろぐ私に、困ったような笑顔を見せたのはエリオットくん。

「突然押しかけてごめんね。マリイのことが心配だったからさ、ユリジェス様に頼んでみんなで来ちゃったんだよ、ね」

エリオットくんが横に立っているマルセリーノさんに話を振ると、彼はわずかに微笑んで見せた。

「昨日はラキとユリジェス様が駆けつけたからね、今日こそはわたし達の番、ということさ」

わざわざ仕事を早く切り上げて来てくれたのかと、恐縮混じりにお礼を言っと、マルセリーノさんは、視線を落とし眉間にシワを寄せた。エリオットくんも顔をひきつらせている。なぜ？

ひっかかるものを感じながらケペシユさんを見ると、足元にまとわりつくソアレを撫でていた彼は、珍しく神妙な顔をしてこちらに向き直った。明るいはずのブルーの瞳が、今は沈んだ藍に見える。

「マリイ、あの時は試すようなことを言っただけだった」

そう言っただけで姿勢を正した彼は、一瞬私を見つめてから、深く頭を下げる。横に立つエリオットくん、マルセリーノさん、マイオスさんも頭を下げていた。彼らはいったい何を試したというのだろう……。私には心当たりがなかった。

「君が、そこまでショックを受けるとは思わなかったんだ。まさか」と耳を疑ったよ」

「……私が、ショック？」

「……ユリジエス様のことです」

「……えっ？」

ケペシユさんの表情は、さらに気まずそうに歪んでいく。

「あの方は、エリザベス嬢とのご婚約の話を正式にお断りになっていたんだよ」

「は、はあ……、えっ？」

「一昨日の晩に、ユリジエス様がライカ侯爵家……エリザベス嬢の

屋敷へ行かれたのは、彼女のお父上、ライカ侯爵と別の話をするためだった。……あの夜は、マリイ、わたし達も一緒にいたんだよ」

「っ、それなら！」

私の代わりに鋭い声を上げたのは、レイチエルだった。

「それなら、ケペシユ様は、なぜあのような偽りを……」

「マリイの本心が知れたかったから、だ」

それまで黙っていたマイオスさんが、詰問するレイチエルを遮った。彼女が息をのんでひるむと、マイオスさんは、その赤い瞳を私に向けた。

「マリイは聞いているか？ 今、ユリジェス様が成されようとしていることを」

「……ユーリのやろうとしていること……？」

「あの方は、今、国の中枢からの思いきった変革を進めていらつしやる。そのために、今回どうしてもライカ侯にお会いする必要があった」

淡々と、しかし誠実に話すマイオスさん。そこでまた、ケペシユさんが話を引き継いだ。

「すまない、マリイ。わたし達は、君が女の子だということに気付いていた」

心臓が一瞬止まり、私の目は、これ以上ないほど見開いた。

「……えっ、」

私に寄り添うレイチエルも、固まったまま言葉が出ない。

「わたし達は、君がどれだけユリジェス様のことを気に掛けてくれているかが、知りたかったんだよ」

血の気の引いていた顔が、一瞬にして熱を帯びる。あちゃー、といった顔をしたレイチエルが、額に手の甲を付けていた。ケペシュさんは、そんな彼女に視線を向けて話を続ける。

「レイチエル、きっかけは君だったんだよ。君は、マリイを大切に過ぎていた。アルバートとミラがそれと気付くほどにね」

「――アルバートさんとミラさんも知っていたの？ 私が本当は女だつてこと……。じゃあ、ユーリは？ 彼も知ってるの！？」

「ユリジェス様がそれに気付いておられるかは分からない。だけど、少なくとも、あの方は君を大切にしていらっしゃるよ。それは間違いない」

そう言つて、ケペシュさんは口の端を上げた。

「……だから、今回、君のことを試してしまったんだ。どうあつても感情を表さない君が、あの方のことをどう思っているかが知れたかった。ユリジェス様のためにも」

言葉も出ない、とは、こういうことを指すのだろう。顔の火照りを冷ますように、冷たい両手を押し当てた。ああ、鏡を見なくても

分かる。私は今、とんでもなく情けない顔をしているに違いない。

そんな私を、ケペシュさんはいつもと同じ穏やかな眼差しで見つめていたが、短く息を吐くと、表情を引き締めて口を開いた。

「マリイ、今、この国に宰相がいないことは前に話したね。ユリジエス様が国王の政務を補佐しているということも」

以前にケペシュさんが話してくれたことを思い出した私は、突然変わった話に戸惑いながらも、はい、と答える。

「これから話すことは、ほとんど外に知られていない。君たちも他言無用だよ。わかったかい？」

その一言から始まったケペシュさんの話は、ユーリを取り巻く過去と現在の状況に関することだった。

ユーリは国王の補佐ではなかった。それどころか、宰相の死によって精神的に弱ってしまった国王の政務を全て、年若いユーリが引き受けてきたというのだ。

父王が立ち直るまで、というつもりでいたユーリだが、心の病は想像以上に深刻で、一向に回復する兆しは見えない。国の運営は、周りの予想以上に能力のあった二番目の王子に頼りきりとなり、その結果、彼がいないと国が立ち行かない状態となってしまったのだ。その一方で、若く、経験も浅いユーリに反発を覚える者たちの、水面下での動きも懸念された。もしも、自分が倒れたら……それを危惧した彼は、側近であるケペシュさん達とともに現状を見直し、再構築するために動いているという。

しかし、最近のユーリは、常に側にいるケペシュさん達の目から見ても不安定で危うい表情を見せるようになっていた。ただでさえ、

王宮から膿を出し、土台を組み直し、組織を再構築するためには、あらゆる方面に細心の注意を払わなくてはならないというのに……それが、私を拾う前のユーリだった。常にギリギリのところで精神の均衡を保っていた彼は、見えない敵に、いつ足元をすくわれるか分からない状況だったそうだ。

ケペシュさんの説明を、私はただ、言葉もなく聞いているしかなかった。衝撃に脳みそが麻痺したのかもしれない。あの自信に満ちあふれていたユーリが、今までどれほどの重責に耐えてきたというのか……。正直に言って、想像もつかないのだ。

ケペシュさんが話し終わると、今まで静かに見ていただだけのマルセリーノさんが口を開いた。

「マリイ。ユリジェス様のご生母、アルシノエ様は、シルバ村のご出身なんだよ」

ハッと息を吸い込んだ私は、そのまま微動だにせず、マルセリーノさんの話の続きを待った。

「シルバの村は、あの方にとって第二の故郷。それが焼き払われ、村人は全員死亡という被害に遭って、それでもなお崩れずに在られるのは……、マリイ、間違いなく君のおかげだと思っている」

いつも斜に構えているマルセリーノさんとは別人に見えた。普段の艶めいた雰囲気を感じさせず、真正面から私を見つめてくる。

「君と接するときのユリジェス様は、わたし達にもめったに見せる

ことのない、素の表情を出しておられる。……あの方は、変わられたよ」

だから……、と言いながら、彼は、今まで見たことがないほど優しい目をして微笑んだ。

「わたし達は、君に、心から感謝しているんだ。マリイ」

第三十四話 断髪

マルセリーノさんの言葉にどうしていいか分からなくなった私は、混乱した思考を整理するため窓の外へと視線を移した。青く晴れ渡っていた空には、いつの間にか夕焼けの赤が広がっている。本を読み終えてから、かなりの時間が経ったはずなのに、ユーリのことで頭がいっぱいの私たちは、いまだに、部屋の入り口付近に立ったままにいるのだった。

「これからも、ユリジェス様を頼んだよ」

泣きボクロもセクシーなマルセリーノさんが、グリーンの瞳を優しく細める。そのとき、手の届く距離にある扉がゆっくりと開いていくのを、視界の端でとらえた。

「ずいぶんとおもしろい話をしてるじゃないか、マルセリーノ」

扉の枠に寄りかかり、口の片方を器用に上げているのは、たった今、話題に出たばかりの男だった。ソアレ以外の全員が、驚きの表情を張り付かせたまま固まっている。最悪のタイミングで現れた人物が、こんなに早い時間に帰宅しているはずのないユーリだと認識したとたん、私の頬は炎のように燃え上がり、その他の者は血の気を無くして青ざめた。

「マーリイに感謝しているとか、よろしく頼むとか聞こえたんだが、いったい何の話だったんだ？」

室内に足を踏み入れる彼の後ろには、苦笑気味のアルバートさんが続く。巧みに気配を消していたらしく、私たちは、彼らの存在に

まったく気付かなかった。もちろんソアレを覗いて。

「まあ、いい。それより、この場に全員が揃っていて良かった」

ガラリと雰囲気を変えた彼に、私たちも少しだけ緊張を解いた。彼は、部屋の中央に足を進めると、いつものイスではなく、ソファに腰掛ける。

「皆、こちらへ。マリーイ、病み上がりなのだから、おまえも座れ」
「は、はい」

そこへ、侍女頭のミラさんと二人の侍女が、ワゴン車に六人分……ユーリと私、ゾンビ退治組のコーヒーを乗せて運んできた。ソファに座る私たちの前にセットし終わると、ミラさんは、ついて来ていた侍女たちを部屋から下がらせた。

部屋には、ユーリ、ケペシュさん、マイオスさん、マルセリーノさん、エリオットくん、レイチエル、アルバートさん、ミラさん、そして私の総勢九人が残っていた。

みんながひと息つくのを待っていたユーリは、ぐるりと周りを見渡してから、さっそく本題に入った。

「昨日の早朝、おまえはいつたい中庭で何をしていたんだ？ 長い間、ベンチに伏せていたそうじゃないか」

再びゾンビ退治組に緊張が走る。

「それを見た侍女たちの間で、おまえの髪が噂になり始めているぞ」
「髪？ 噂に？」

「そうだ。侍女の一人から、ミラに報告が来ているんだ。おまえに

声をかけようとしたらしいが、とてもそんな状態じゃなかったな。それから、こうも言っていた。なぜかは分らないが、おまえの髪が二色に見えた」と

あの朝、私は頭から毛布を被っていたはず。……いや、違う。あれは、ユーリが中庭に入って来たときに初めて被ったのだ、泣き顔を隠すために。

「ユリジェス様、いったい何の話をしてるんです？」

私の髪を包むバンダナ……紫紺に銀糸で刺繍を施したものを見下ろしていたマイオスさんが、ユーリに問いかけた。

「近い内に、おまえ達の耳にも届くだろうから、先に伝えておく。マリイの髪は……」

そう言いながら向き直ると、私のうなじに手を伸ばし、バンダナの結び目を解いてみせた。

「……このように、二色に分かれているのだ」

紫紺からこぼれ落ちたのは、明るい茶色の柔らかな髪。しかし、その根元は黒く、彼らの目には、ひどく珍しいものに映っていることだろう。隣に座るユーリは、私の髪の毛を、その長い指で梳いている。黒い部分は……、ちょうど彼の親指くらいの長さまで伸びているはず。

「おまえの本来の髪色よりも、二色に分かれているということの方が、今は大きな問題だな」

それを聞いてユーリを見上げると、紫紺の瞳は私の頭頂部へと向いていた。

「……たしかに、一部、珍しい色をしていますね。物語のシエラのようにです」

「それよりも、二色の髪色だなんて、自分の目で見ている今でも信じられませんね」

「ど、どうして、こんな不思議な髪を……」

ケペシュさん、マルセリーノさん、エリオットくんが口々に驚きの声を漏らす。そんなに珍しいものなのだろうか。

「あの……、こちらには、どこの国にも、髪の毛を染める文化はないのですか？」

ためらいがちな私の問いに、レイチエルが答えた。

「髪の毛を染めるという発想さえ、こちらにはございませんわ。マリイ様は、もともと黒だった髪を茶色へ染めていらっしゃるのですね」

「うん、そう。あ……、ねえ、ユーリさん」

ふと思いつく。

「さっき、言っていましたよね。問題は、黒い髪そのものというより、ツートンに分かれた髪の色だって」

「ツ……、まあ、噂になっている分、二層に分かれた髪の方が、今は問題だな」

「なら、簡単です」

そう言って、私はベッドまで移動すると、枕元に置いてあった短剣を取り出した。これは、王都エメレムへ向かう途中、「念のため」と、ユーリから手渡されたものだった。宮の中は安全だし、ほとんど外出することもないため、今までこれを使う機会はなかったが。

「マリーイ、何を？」

「ユーリさん、この髪、切っちゃいますよ」

そう宣言すると、止められないうちに行動に移した。レイチエルとミラさんは悲鳴を上げ、男たちはどよめく。私は、左側の髪の毛を一束つかみ上げると、耳の横で刃を滑らせた。ユーリの短剣は見た目よりも鋭いため、カットするのは簡単だった。ユーリたちは、私の指の間からハラハラと落ちてゆく髪の毛の動きを、身動きも出来なまま、茫然と見ているしかなかった。

その間に、私は、反対側の髪も、その後ろもと、鏡も見ずにぎゅぎゅとカットしていく。シン……と静まり返った部屋に、突然、エリオットくんの悲鳴混じりの声が響いた。

「……な、なんてことを！ お、女の子なのにつ！」

その瞬間、茫然とこちらを見ていたユーリは、眉間に深いシワを寄せ、短剣を操る私の手は、ピタリと止まった。

ハッと両手で口を押さえたエリオットくん。まるで、室内に流れる時間まで止まってしまったようだった。

「……いつから知っていた、エリオット？」

ユーリの声が、低く響く。

「ユ、ユリジエス様？ も、もしかして、ユリジエス様もご存知だったんですか！？」

エリオットくんは、半泣きで叫ぶ。私の方こそ泣きたい気分だ。目を伏せたユーリは、ふっと苦笑をして、軽く額に手を添えた。

「マイオス、ケペシユ、マルセリーノ。……おまえ達も、みんな、知っていたんだな。……アルバートもか？」

「はい。少し前から気が付いておりました。同じ時期にミラどのも……」

ミラさんは、執事のアルバートさんの言葉にハツとすると、涙をこらえるように唇を噛みしめながら、こちらへ急ぎ歩み寄ってきた。そして、握ったままの短剣を、やんわりと私の手から抜き取ると、彼女は私をきつく抱き締めたのだった。

その後、レイチエルの手で揃えてもらった私の髪型は、現代で言うならガリーなベリーショート。合わせ鏡でバックスタイルまで確認すると、そのお洒落な雰囲気には俄然嬉しくなってしまった。レイチエルの腕を褒め称え、ユーリたちへ極上の笑顔を振る舞う。

「マイオスさんと同じ髪型になりました。マイオスさんは焦げ茶で私は黒。髪の色も似てるし、お揃いですねー」

鼻歌混じりにそう言つと、みんなは沈痛な表情で黙り込んだ。私は本当に喜んでいるというのに……

毛足の長い絨毯の上にまき散らされていた髪の高さは、約二十セ

ンチ。プリンのような二層髪は、中途半端に伸びてまとまりがつかなくなっていた。それを、器用なレイチェルがお洒落にカットしてくれたのだ。

みんなの前で、男の演技をする必要もなくなったし、ユーリへの気持ちやゾンビ退治組にバレたこと以外、この一連の騒動は、結果的に文句なしの展開となったのだった。

第三十五話 温かな腕と宝物

「うわあ……、気持ちいい！」

手すりを握る両手に力を込めて、果てしなく広がる空間へと身を乗り出す。冷たい空気を胸いっぱい吸い込んだ私は、抜けるような秋の空を見上げて目を細めた。

「んー、最高……」

身を乗り出したまま頬を緩めると、地上から吹き上げてくる朝の爽風が、焦げ茶色の長い髪をサラサラと舞い上げていった。

「おいつ、マリーイ！」

襟首を引っ張られた私は、「あれ？ 以前にも同じことがあったような……」なんて思いつつ、雲一つない空を仰ぎ真後ろへ倒れていく。そして次の瞬間、私はユーリの香りに包まれていた。

ソアレの飼い主としてソルフェーニユ王国のお城を訪問中の私は、ローズ系ピンクのゆったりとしたチュニツクに、落ち着いたチャコールグレーの同じくゆったりしたパンツを合わせ、腰にはユーリからもらった紫紺のバンドナを三角に折って巻いている。この世界に来て初めて女の子の格好をしていた。

”政務に疲れたユリジェス王子が息抜きのために喚んだ犬と、その犬に付き添ってやって来た飼い主”……という設定だというのに、私は肝心のソアレを暖かな執務室に置き去りにして、そこから続くバルコニーまで出て来ていた。

険しい山がその背後を守る白い王城は、エメレムの都よりも高い

場所に建てられている。そこから見える景色は、言葉ではとても言い表せないほどの美しさだった。

実りある秋の大地は果てしなく広がり、王都エメレムの城壁は降り注ぐ陽光に輝いている。眼下に小さく見えるのは都の住民たち。元気よく働く彼らの様子から、ここが活気に満ちた平和な国だということがよく分かった。

背後から柔らかく回された腕を、喉元のあたりでキュツと握り締める。

――大地の実りを、民の笑顔を、この強く確かな腕が守っているというの……？

ユーリの胸にもたれてボンヤリしていた私は、ハッと我に返った。彼の腕の中にいると認識した途端に、苦しいほど胸が高鳴る。わずかに香るユーリのトワレがさらなる混乱を誘い、動揺した私は、慌ててその腕から抜け出した。

「まったく、おまえという奴は……。気を付けないと落ちるぞ」

ユーリは深いため息をつく、左肘にかけていたオフホワイトのストールをふんわりと広げ、向かい合う私の肩に掛けてくれた。カシミアに似て柔らかな手触りのそれは、ユーリの腕の中のように温かった。

あの衝撃的事実が明かされた午後……。

「実は、女でした」と認めたその時を境に、男たちの対応が驚くほど丁寧になった。自然と身に付いた洗練さで、彼らはレディファーストを実践するのだ。私が少年を演じていた頃の彼らは、弱者を庇護する情け深くも硬派な騎士に見えた。それが、女の子であるとバシた途端に、中世のお芝居でよくある ” 女性への奉仕 ” を私に向けてくるようになったのだからたまらない。これを ” 騎士道精神 ” と呼ぶのだろうか、まだ若く異性との接点もろくなかった私にとって、それは生まれて初めての経験だった。

……まあ、それはともかく、女の命そのものと言って良いほど大切な髪を、私自らバツサリやったものだから、それを目の当たりにした彼らは、トラウマになるほどの大きなショックを受けたようだった。きつと自覚していないだろうが、彼らは同じ内容の質問を、言葉を変えて何度も繰り返していた。

「なぜ今まで、男のふりをしていたんだい？」

「だって、野営地にいたのはむさ苦しい男ばかりだったでしょう？ 女が一人も見当たらなかったので、身を守るためにラキと話し合っ

って決めたんです」

「やっぱりラキは知っていたのか……」

「彼には、私が野営地に来た当日にバレてたんですよ」

「エメレムへ着いてからも訂正しなかったのは？」

「いまさら女の子でした、なんて言うのも照れくさかったし……」

少し、ためらう。

「それに……、ユーリさんは徹底して若い女性を宮に入れないのでしょう？ そんなの聞いたらとても言い出せませんよ。バレたら追

ユーリの眉間には、深いシワが二本。

「レイチェルがここへ来たときに、もしかしたらカミングアウトしても大丈夫かなー、とは思いましたけどね」

かみんぐあうと……と、小さく呟いた、しかめっ面のユーリ。幸いにしてその声は、他の誰にも聞こえていないようだった。

同じ内容の質問……特に性別を隠していた理由やラキが最初から知っていたことについて、はさらに続き、私はその一つ一つに呆れつつも誠実に答えていく。質問を繰り返していくうちに落ち着いてきたらしいマイオスさんが、突然、核心を突いてきた。

「ところでマリイ、君は『こちらには、どこの国にも髪の毛を染める文化はないのか?』と訊いていたね。それに対してレイチェルは『そのような発想さえない』と答えた」

マイオスさんの言葉に、私はコクコクと頷き、ユーリは大きなため息をついてガックリと肩を落とす。

「君の記憶は、いったい何処のものなんだい? 君は……まるで、ここではない何処か遠い場所からやってきたように思えるんだが。」

……君のその髪。髪の毛を紙や布のように染めるだなんて話は、世界中どこを探しても聞いたこともない」

マイオスさんの追求に両手を挙げて降参するのには、さほど時間はかからなかった。抵抗らしい抵抗もしないうちに、私は異世界から迷い込んだことを自白してしまっていた。

一緒に過ごした三ヶ月の間に、彼らにも疑問に思うことが多々あったのだろ。私の話をあっさりと信じた後は、元の世界について我先にと質問をしてきたのだった。残してきた親戚や友達のこと、

今は亡き両親についてなど、ユーリやレイチエルも知らなかったことまで話し尽くすと、私は隠し事がなくなってホッとしたのだろう、その夜もまた熱を出して寝込んでしまった。

次の日、私が部屋から一步も出ずにおとなしくしていると、就寝時間を遥かに過ぎた頃になって、やっとユーリが帰ってきた。私の部屋の前で従騎士から大きな化粧箱を受け取ると、彼は断りもなく部屋へ入ってくる。昼間に眠っていた私は、まだ就寝の支度を整えていなかった。

部屋の扉を閉めて振り返ると、私はユーリの後ろ姿を見つめた。がつしりした肩に、広い背中。締まった腰に、程よく筋肉の付いた長い脚。後ろで一つに束ねた不揃いな銀髪が、あまりに綺麗で羨ましくなった。

正直に言つと、昨夜からみんなが遺憾なく発揮する騎士道精神に、いまだ慣れない私は戸惑いを隠せないでいる。そんな中、今までと何ひとつ変わらない態度で接してくれるのはユーリだけだった。揺らがない彼と過ごす時間は、私にとって更に心地良いものとなっていた。自分の中の何か大切な……中心を通る軸のようなものが、しっかりと安定していくのを感じるのだ。

「マーリイ、すまない。まだ灯りが点いていたから、早い内にこれを渡しておこうと思つてな」

仕事で疲れているはずなのに、ユーリは穏やかな笑みを浮かべている。彼の差し出す大きな化粧箱を受け取ったが、それは予想に反

してとても軽く、驚いた私は思わず彼を見上げた。

口の端を上げて悪戯っぽく微笑む彼は、私の背中に左手を添えて、いつものテーブルへと促してゆく。

「これは、シルバの村で見つけたものを真似て作らせた。おまえもきつと見覚えがあるだろう」

私は、テーブルの上に一抱えもある大きな化粧箱を置くと、首を斜めに傾けてユーリを見上げた。

「おまえがこれが必要とする時が必ずや来ると思って、あれからずっと研究、開発を進めてきた。マリーイ、全ておまえのものだ。さあ、開けてみる」

ユーリの左手が、いつの間にか私の左肩に回されている。

両手を広げて大きなフタに手を添えると、ドキドキしながらそれを開けてみる……、中に入っていたのは、なんと、三種類ものウィッグだった。

型くずれを防止するため、球状の土台にかぶせたウィッグは、ダークブラウン、ゴールド、深いパープルの三色で、全てがロングヘアとなっていた。

震える手でゴールドのウィッグを持ち上げる。健康な人毛を丁寧に埋め込んであるために、手触りは柔らかく、指通りはなめらかだった。ベースは伸び縮みするメッシュ素材となっている。

短くなってしまった自分の髪に手をすべらせ、試しにそれをかぶってみると……、その瞬間、私の口から驚愕の声が漏れた。信じられないほど軽い、と。着けてないみたいだ、と。

弾かれたように右隣を見上げると、ユーリは柔らかな表情でこちらを見つめていた。何か言おうと言葉を探したが、喉に熱いものが

こみ上げてきた今、一言でもしゃべったら、声がひっくり返りそうだった。

とっさに俯いた私の顔が、くしゃりと歪む。

ユーリは、ユーリは……、私が投げ捨てたシンデレラのウィッグを見つけていたんだ。そしてそれを専門の人間に託し、たった三ヶ月間の研究で元の世界のそれよりも格段に良いものを開発してのけた。これほど軽く、弾力があり、伸縮性に富んだウィッグは向こうの世界にもないはず。そしてユーリは、これを私のために作ってくれたと言っていた……。

- - ああ、どうしよう

そう思った時には、もう遅かった。あふれる涙がボロボロと足元にこぼれ落ちる。泣く前に彼に伝えたい言葉があった。なのに、鼻がつーんとして上手く声にならない。

「わた、し……、ずっと、不安だった。この、髪の色、で……、一生、バンダナ無しで、部屋の外に出ては……いけないんじゃない、なにかって……。だから、……あり、がとう。本当に、ありがとう……ユーリさん」

ギョツとマブタを閉じてお辞儀をすると、それまでずっと黙っていたユーリが口を開いた。

「もう大丈夫だ。……おまえは、心配しなくていい」

首の後ろに腕を回したユーリは、私をやんわりと抱き寄せると、涙が止まるまで背中を叩き続けてくれたのだった。

第三十六話 普通の女の子に

ユーリからの思わぬプレゼントを受け取った翌朝。

いつものように私を起こしにやって来たレイチエルは、大きな窓にかかるココア色した重厚なカーテンをひいて、こちらに振り返った。

「マリイ様、今日も良いお天気になりそうで……」

そこで彼女は、いきなり甲高い悲鳴をあげた。

突然の金切り声に驚いたのか、それとも面白がっているのか、飛び起きたソアレが尻尾を振りながら駆け回っている。

「レ、レイチエル？ あ、の、大丈夫？」

「マ、マ、マリイ様！ あ、あれはいつたい、な、な、何ですか！」

ソアレはピタツと立ち止まると、ハッハッと笑み、レイチエルに向かってちょこんと首をかしげてみせた。

その一方で、彼女は三つの物体をビシッと指差している。それは、枕元にきちんと並べた宝物、ユーリからもらったウィッグだった。

「そうか。レイチエル、これに驚いたのね。これはね、昨夜遅くにユーリさんが……」

と、説明しかけたとき、バタバタと慌ただしい足音が聞こえてきた。

- - 誰か来る！

とつさに、一番手前のブラウンのウィッグを手にとった。それを目で追っていたレイチエルは失神寸前。扉が蹴破られる！と同時に、私はウィッグをかぶっていた。

危機一髪！ 扉を壊す勢いで駆け込んできたのは、普段、馬たちの世話をしているデューイさんだった。カーキ色やベージュ、茶などのアースカラーを好み、草花や動物などの自然を愛する朴訥としたおじさんだ。私は、彼が暇なときをお願いして、乗馬を習っていた。

――はあ、危なかった……。

レイチエルと私はもちろんのこと、ソアレまでがホッと安堵の息をついている。

「今の悲鳴は何ですか？ 不審者はどこに？」

押し殺した低い声。温厚なデューイさんが、今は別人のように鋭い目で周囲の様子を窺っている。黄色い目が猫のようだ。ソロソロと壁に沿って足を運び、どこから取り出したのだろうか？ 鋭い刃物を手に、部屋中をチェックし始めた。

「あ、あのう……、デューイさん？ 今の悲鳴はレイチエルだったんです。この部屋に怪しい人はいませんよ」

「マリイ様、も、申し訳ありません。あまりに驚いてしまったので、つい、はしたない声を出してしまいました」

身を縮めるレイチエルに「大丈夫よ」と笑いかけると、デューイさんに視線を戻す。短めの剣を手にも構えていた彼は、首だけ私の方に向けると、その姿勢のまま固まった。

次に扉の方へ目をやった私は、思わず頭を抱えなくなった。だってそこには、巡回していた警備兵たち、後から団子になって雪崩れ込んできた使用人たち、そのさらに後からやってきた執事のアルバートさんと侍女頭のミラさんが、こちらを見つめてポカーンと口を開けていたのだから。

「あの……、デューイさん、それから後ろにいる皆さん。ええと、別になんでもないので、ご心配なく……ね」

彼らは、寝間着姿でベッドにいる私を凝視していた。驚くのも無理はない。短いと思っていた髪の毛が、いきなりウエストラインまで伸びているのだから。危ういところだったが、あとき、とっさにウィッグをかぶれたのは幸運以外の何ものでもなかった。後一步遅かったら、レースのカーテンを透す朝の光が、私の黒髪を浮き彫りにしているところだった。

「皆さんに分かるように、ご説明しますね。ええとですね、これはウィッグ、またはカツラといひまして、人工的に作った髪の毛なんです。……見ててください」

私はゴソゴソと大きなベッドから這い出すと、ゴールドのウィッグを球状の土台から外してソアレを呼んだ。

「……ほら、ね、可愛くなっただでしょう？」

彼らの前で、堂々とモデル歩きをしてみせるのは、金髪のロングヘアに変身したソアレだった。ウィッグが彼の皮毛と同じ色だからか？ その姿に違和感を抱くことは全くなかった。それどころか怖

いくらいに良く似合ってる。

「あと、私自身のことなんですが……。別に女装が趣味というんじゃないですよ。あのですね……。私……。実は男じゃなかったんです！ というわけで、今日から普通の女の子に戻りますのでよろしくお願いしますっ！」

気まずさをごまかすように、最後の部分を早口で終わらせてしまつと、その勢いのままペコリとお辞儀をした私。後の面倒な説明は、ぜんぶアルバートさんとミラさんに丸投げしたのだった。

彼らの話によると……。中庭で泣いていたあの朝、私は頭から薬品をかぶり、髪の毛を酷く傷めてしまっていたらしい。近い内に女の子だということを世間に公表するはずだったのに、残念ながら、御披露目直前になってこのような不幸に見舞われてしまったそうだ。美しかった髪を、うなじや耳、眉毛までが剥き出しになるほど短くカットされてしまったのだが、ユーリは、そのような無防備な姿を他の誰にも見せてはならないと思案した末、名案が浮かんだ。それは、彼直属の研究チームが新しく開発したばかりのウィッグを使うことだった。彼はそれを私に与えると、寝る時や湯浴みをする時以外は決して外さないよう厳しく命じたのだった……。だそうだ。ふうん、そうだったのか。知らなかった。

その後、ブラウンのウィッグをかぶり、レイチェルの持つ一番シンプルなドレスに着替えた私は、朝食のために食堂へ向かっていた。ドレスと言っても、床に引きずるような大げさなものではなく、このまま教会に行っても大丈夫そうな清楚な紺色のワンピースだった。襟元と袖口が繊細なレースで飾られている。当然のことながら、

機械編みではなく手作り。元の世界なら、驚くほど高価なものとなるだろう。私より背の低いレイチェルは、靴のサイズも小さいようだ。華奢なヒールの靴を借りたけど、そう長くは履いていられないと思う。

いつものように何人かの使用人とすれ違い、そのたびに挨拶を交わした……。のだが、彼らは一様に同じ反応を見せた。まずはよそ行きの顔で頭を下げ、次に「あれ？」というような顔をして私を見つめる。それからレイチェルとソアレが側にいる意味に気付き、衝撃、驚愕、などの混乱した感情を隠せないまま私を凝視するのだった。最初のうちは、私が誰だか分からずに頭を下げているみたいだ。階段ですれ違った侍女たちも、サツと脇に寄るといつも以上に丁寧に頭を下げる。突然訪問した客人とでも思っているのだろうか？

「マリイ様……」

後ろを降りていたレイチェルが、口元に片手をあててこっそりと話しかけてくる。

「予想はしてましたけど、みんな、マリイ様のことがわからないみたいですねえ」

「昨日までは男の子だったものね。今の私、無理して女装してるように見えない？」

階段を降りきったところでそう言っていると、彼女はピンクの唇を尖らせた。

「何をおっしゃいますか。マリイ様は男の子を演じてらただけで、本当のお姿はともお綺麗でいらっしやいましたよ、以前からずっと。それに、体つきだってグンと女性らしくなられて、サラシをき

つく巻いてもごまかせないくらいですのに……」

そう言っただけ追いつくレーチエルの方こそ、私は綺麗だと思うのだ。結い上げたピンクの髪は、夜に見ると柔らかな紫色に変化し、同じ色の長いまつ毛が紺碧の瞳を縁取っている。清潔感のある色気と、さっぱりとした性格とのギャップが、彼女をさらに魅力ある女性にしていた。

そんな彼女には、きっと求婚者がたくさんいたのだろう。このままでは好きでもない男と政略結婚させられる、と身の危険を感じて実家から逃げ出してきたらしい。彼女の父親は、王都エメレムから馬で十日ほどの距離にある、カーシュと呼ばれる地域一帯の領主だった。

驚倒し、次々と腰を抜かしていく使用人たちをあとにして、私たちはアットホームな食堂へと足を踏み入れた。温かな空間にホッとする。そこでは、いつものように執事のアルバートさんと侍女頭のミラさんが、朝食を用意して待っていてくれた。ユーリはもう王城へ向かったらしい。今朝は遅くなってしまったから、会えなかったのだ。

「アルバートさん、ミラさん、先ほどは私の代わりに状況を説明をしてくれて、ありがとうございます」

両手を体の前で揃え、女の子らしい仕草でお礼を言うと、二人は驚いたように目を見開き、そしてすぐに相好を崩した。

「マリイ様のそのようなお姿を見ることができて、わたくしは嬉し
ゆうございます」

昨夜のことを思い出したのだろう、滲んだ涙を人差し指で拭くと、ミラさんは続けた。

「……本当に、お綺麗でございます。どちらのご令嬢にも見劣りするとはございませんわ」

アルバートさんも、ふさふさの白い眉尻を下げて柔く微笑んでいる。

「三ヶ月かけて、やっと、本来のお美しいお姿を拝見することができました。感無量です」

「ち、ちよつと待って。お二人とも、これ以上恥ずかしい台詞を言わないでくださいよ。お世辞には慣れてないんですから」

”もう勘弁してください”と、両手を前に、首を左右に振る。赤面して焦る私に、二人はさらに笑みを深くするのだった。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

ペロリと朝食をたいらげた私のために、ミラさんが白磁のポットを手にコーヒーを注いでくれた。

「マリイ様、今日はアルバート様が王城へ案内してくださるそうですよ」

彼女は、柔らかな笑顔で言葉を続ける。

「ユリジェス様からのご指示で必要な物はすべて取り揃えておりますので、どうぞご安心くださいね。この後、わたくしとレイチエルとでお手伝いいたしますから」

胸元の刺繍がフェミニンなローズ系ピンクのチュニックは、手首とウエスト部分にゴムのような伸縮性のある紐を使っていた。ベルトの代わりに私が選んだのは、ユーリから貰ったあのバンダナ。ゆったりとしたパンツは足首が出るくらいの丈で、しなやかな黒革のショートブーツがよく合っていた。玄関ホールで羽織らせてもらったのは、実用的な短めの黒いマント。

驚くべきことに、これらの装飾品と化粧品を用意してくれていたのはユーリ本人だという。私が女の子に戻る日を、彼はいつから予想していたのだろうか？

テキパキと支度を整えてくれたミラさんと、その他大勢の使用人たちに送り出された私は、アルバートさん、レイチエル、ソアレとともに馬車に揺られていた。御者はもちろんデューイさんだ。笑い合うみんなの表情も生き生きとしている。

レイチエルが言っていたとおり、窓から見える秋の空は青く晴れ渡っていた。太陽に白く輝いているのは、縦よりも横に大きなソルフェーニユのお城。街路樹の葉は赤や黄色に色付いているのに、石畳はきれいに掃き清められていた。

馬車は、お城へと続く道をガタゴトと進む。期待に胸を膨らませた私たちを乗せて。

こうして、私は『ソルフェーニユ白亜の名城 豪華日帰り観光ツアー うれしい昼食付き』へと繰り出したのだった。

第三十七話 白亜の名城 基礎編

城の周りに街が築かれ、一番外側を城壁が囲むといった形、それを『城塞都市』と呼ぶ。

王都エメレムも、背後を険しい山々に守られた梯郭式城塞都市^{ていかくしき}だった。当然のことながら、ここ王都の周りにも城壁と呼ばれる壁がある。しかし、実際に王都を外敵から守っているのは城壁ではなかった。山々や河川といった天然の地勢による『外郭』こそ、王都エメレムの強固な守りなのだ。

背後には険しい山。その裾野を流れる河川は、側面から大きく緩やかにカーブし、三日月のような形で王都を包み込むように流れている。そのため、城壁、それ自体は意外なほど薄い。なぜなら、それはたんに野生動物が内側に入り込まないための”仕切り”でしかないからだ。また、人口の増加に合わせて拡張工事をする際、簡単に取り壊せるように、あえてそのように脆く造ってあるのだった。

城壁と呼ぶにはあまりにも脆い”仕切り”。しかし、そのすぐ内側には、意外なほど活気にあふれた市街地が広がっていた。

庶民の家々や、軒を連ねる商店、二階が宿になった酒場などの他、朝市で賑わうマーケットに、織物や木工品などの職人が集まる区域もある。地下水を汲み上げる井戸の他に、生活水供給のための水路があり、反対に排水が目的の放水路もあった。エメレムの重要な資金源でもある温泉が引かれ、しかも、それを共同で使える浴施設が、王都の各区域にいくつもあるという話だった。

市街地より内側に入ると、そこは城の機能的構成部分……つまり『内郭』だ。ソルフェーニユ王国の『内郭』は、三重構造になって

いる。

一番外側が『大手門』、市街地と内郭との境目だ。次が『郭門^{くわくもん}』。一番上にあるのが『正門』。

大手門から郭門の間が『三の郭』。馬場と家畜小屋、食料貯蔵庫、そして兵舎がある。

郭門から正門までが『二の郭』。そこにあるのは、家臣たちの屋敷や兵舎、武器庫だ。

正門内が『一の郭』。王城の最上部分であり、国の中枢だ。そこに、政を行う本宮、宝物庫、大聖堂、王族が住まういくつもの離宮があった。

つまり、私は王城の最上部分である一の郭に、三ヶ月もの間、ただで居候させてもらっていたわけだ。しかも王子様の居住する離宮に……。

デューイさんが操る二頭立ての馬車は、王都エメレムの説明を聞いている間に目的地へと着いた。近い。これくらいの距離なら歩いても来れるだろう。

アルバートさんに手を取られて馬車を降りると、目の前に建つ白壁の大きな建物を見上げた。これが、政務を行う『本宮』だ。

ちなみに、本宮に隣接する国王の館や後宮などを全部ひっくるめたものを『王城』と呼んでいる。

本宮の正面エントランスは、広く開け放たれていた。とは言っても、もちろん誰でもOKというわけではなく、大手門、郭門、正門を通り抜けるためには、それぞれの場所で所定の手続きを済ます必要があり、さらに本宮入り口でも、こうして何人もの警備兵が、出入りする者を厳しい目でチェックしているのだった。本宮の周辺を

巡回している二人一組の警備兵を何組も見かけたが、ここはソルフ
エーニユ王国の中枢、これくらいの警備体制は当然のことなのかも
しれない。

あらかじめ連絡が入っていたのか、それともアルバートさんが一
緒にいるおかげか、私たちは、たいしたチェックもなしでその先に
進むことを許された。

レイチエルも私も、この雰囲気には圧され気味だというのに、さす
がは黒服執事、どうやらアルバートさんはこういったことに慣れて
いるらしく、普段とまったく変わらない様子で顔見知りの人間と挨
拶を交わしていた。

彼は私を ” ユリジェス殿下お気に入り犬の、飼い主 ”

と紹介するので、そのたびに、ぴつたりと寄り添うソアレが、悪戯
っぽい顔をしてこちらを見上げてきた。

紳士淑女の面々に笑顔でお辞儀をする。私の礼儀作法は自己流な
ので、こちらの世界のそれを、今度しっかり教えてもらう方がいい
かもしれない。

壮麗な造りの王城は、どの建物も横に広く、最高でも四階建てだ
った。強度に不安がないからだろう、ユーリの宮と同じく、各部屋
の窓が大きい。

朝の光がふんだんに入る玄関ホールには、警備兵や騎士の他にも、
文官らしき男女や、重そうな荷物を運ぶ使用人、若くきれいな侍女
たちの姿があった。

「お待たせいたしました」

その声に振り返れば、デューイさんが早足でこちらへ歩いてくる。
さっきまでヨレヨレのマントを羽織っていたのに、馬車を置きに行
ったときに上着を着替えたようだ。今は、パリッとした黒い服を…

…黒地に銀のポイント？ 動植物をこよなく愛する、御者で庭師なデューイおじさん。ギスギスに痩せて、イエローの瞳が優しい彼が……、まさかまさかの騎士だったとかいうんじゃないでしょうね！？

すっかり面食らった私は、先を行くアルバートさんに続いてヨロヨロと階段を上がっていく。隣を歩くのは、面白そうに私を見やるデューイさんだった……。

向かったのは三階にある執務室。繊細な図柄が彫り込まれた扉の前には二人の警備兵が立っていて、がっしりと重そうな扉を、私たちのために開けてくれた。

ユーリが日々政務をこなしているという部屋は、エレガントな本宮と比べ、シンプルで機能的だった。

床は木目を生かしたダークなフローリング。壁の下半分にも同じ木材が使われ、さらには家具も同じ色調に揃えられていた。

部屋の奥、大きな窓の前に、ユーリがこちらを向いて立っている。逆光のため、彼の表情は見えなかった。

第三十七話 白亜の名城 基礎編（後書き）

今回は王都エメレムの説明です。ややこしいのでこちらに大まかに書いておきますね。

背後に山々、側面に河川

（河川と城壁の間には、耕地や森、牧場など）

城壁

（城壁と大手門間には、市街地）

大手門

（ここから先は内郭。三の郭）

郭門

（二の郭）

正門

（一の郭）

簡単に言うと、エメレムは、このように仕切られています。参考にしてください。

ランキングに登録しています。良かったらクリックをお願いします。
執筆の励みになります（^^）

第三十八話 白亜の名城 執務室編

私たちが来るまで、ユーリは窓際に立ち、決済に必要な書類に目を通していたらしい。彼は手に持っていた紙の束を政務机に置くと、机を迂回しこちらへ歩いてきた。

広い机の上には、積み上げられた書類の山がいくつも出来ている。膨大な仕事量に驚いた私が一際高い書類の山から目を外せないでいる間に、ユーリはすぐそこまで来ていた。相変わらずの無表情。なのに、目が合うだけで胸が苦しくなる。

私の隣に立つアルバートさんが、真っ白な頭を恭しく下げた。

「ユリジェス様、お待たせいたしました」

「いや、よく連れて来てくれた。急だったが、宮の方に問題はないか？」

「それが……」アルバートさんは、眉尻を下げて苦笑した。「マリイ様の女性らしいお姿を目にした者が、皆、腰を抜かしております」

「……そうか。そうだろうな」

アルバートさんと話しているはずのユーリは、しかし、彼の方を向いていない。ニコリともせず、ただ尖った目つきで私を見ているばかり。……いや、もしかして彼は私を睨みつけているのだろうか？とりあえずお辞儀をしようとして、肩から長い髪の毛がサラリと流れるのに気が付いた。そうだ、これだ、ウィッグだ。

「ユーリさん、ウィッグをありがとうございます。それから、洋服も、靴も、全部ぴったりサイズでした」

しかし、彼に反応はない。なんか間違えた？

「……ユーリさん？」

「……あ、いや。その姿でなら、もっと頻繁に外へ出られる。ただし、マリーイ、そのときは必ずソアレを連れていけ」

口をきいてくれたことにホッとしながらも、彼の「外へ出られる」という言葉に、昨夜のことを思い出してしまふ。あのとき、ユーリは子供を励ますように私の背中を叩いてくれたのだった。

「あの、ありがとうございます」

きつと顔が赤くなってる。恥ずかしさに俯くと、彼にもそれが伝わったのか、「もう心配するなと言っただろう？」と、いくぶん柔らかな声で言ってくれた。さっきまで睨んでいたのが嘘のようだ。

「デューイ」

再び無表情に戻ったユーリが、私の後ろへ声をかけた。

「はっ」

頭の上から聞こえてくるデューイさんの声。少し緊張してるようだ。

「これから先も、彼女の警護を頼む」

「……、はっ、かしこまりました！」

デューイさんは、ほう……とわずかに息をつくと、力強くそう応えた。

なんだなんだ、今のため息は？ これから先”も”とは？ それ

より気になったのは……。

「ユーリさん、私に警護なんて必要……」

「ある。今のおまえは女だ。しかも、わたしの宮に住んでいる。それだけで、警護が必要な理由としては十分だ」

だけど、私はボディガードなんて慣れてないし、多忙なデューイさんにも申し訳ない、と渋い顔を見ると、ユーリは続けた。

「これは正式な仕事だ。デューイから仕事を取り上げるつもりか、マリーイ？」

なんとというズルい言い方。そんな風に言われたら、受け入れるしかないじゃないか。

「そういうことなら……」と、私はデューイさんに頭を下げた。「

ご迷惑をおかけするかもしれませんが、どうぞ宜しくお願いします」

「いや、マリーイ、頼むから頭を上げてくれ」

デューイさんが慌てている。

「なんとというか……、マリーイらしい言い方だな」

そう言つと、ユーリは私の頭に手を置いて、僅かに口元をほころばせた。

「さようですね」と、アルバートさんが頷く。「普通のお方なら、当然という顔をして警護を受け入れるでしょうに」

「そのように謙虚なお方ですから、わたくしはマリーイ様の御為に、何でもして差し上げたくなるのですわ」

レイチエルの言葉に、私を除く全員が納得したようだった。

高貴な生まれの人間は、考え方からして一般庶民とは違うのだろうか？ ただの新米小姓にボディガードを付けるだなんて、普通の感覚の持ち主なら、誰もが申し訳なくて遠慮するところだと思うのだけだ。

「それと、だ。マリーイ」

再び柔らかな雰囲気に戻ったユーリは、こう言った。

「これからは、おまえの好きな時に、ソアレを連れて本宮へ遊びに来たい」

嬉しい！ ここ本宮には、キューカルザ大陸屈指の蔵書量を誇る書庫や、貴重な文献が集められた資料室がある。好きな時に……などと言わず、私は毎日でも通い詰めたいくらいだ。

「書庫ならいつでも利用していい。資料室への入室許可も、近い内になんとかしよう。もちろん、毎日来てもいいぞ」

彼は読心術を使えるのだろうか？ 口の端を上げて微笑むユーリを、私は言葉もなく見つめるのだった。

私が来訪したために、ユーリは仕事が滞っていたらしく、その後、急いでいくつかの書類に書き込みを入れると、それらを手に執務室から出て行った。

ユーリを見送った私は、執務室の中央に置かれた革張りのソファ

に座り直し、今までの話で気になったことをデューイさんに聞いてみることにした。

「ところでデューイさん、確認したいことがあるんですけど」

「ああ、何だ？ マリイ」

「デューイさん、本当にいいんですか？ 私の警護なんかにお時間をいただいても。馬のお世話も庭の手入れも、あんなに楽しそうにやっていたというのに……」

「ちよつと待った」と、私の言葉を慌てて遮るデューイさん。「マリイ、君は勘違いしているよ。それらの仕事をしていたのは、わたしが君の側にいても不自然に見えないようにするためだ」

「……は？」

「君とソアレは庭で体を動かすのが好きだろう？ 建物内だったら物陰から警護することもできるが、広い中庭では、あまり離れていると、何かが起きたときに間に合わないかもしれない。だから、君が中庭にいるときに限って、わたしは庭の仕事をしていたんだよ。自然に君の側に居られるように」

「それは、つまり……？」

「つまり、わたしはずっと前から君の警護を任されていた、というわけだ。君が女性ではないかと、薄々わかっていてもいたよ。乗馬の訓練を始めたときに、疑惑が確信に変わったんだけどね」

彼は、そこで悪戯っぽくウインクした。アルバートさんとレイチエルも、驚いたような顔をしている。二人とも知らなかったようだ。

「今回のことで、もしかすると警護役を交代させられるかもしれないと心配していたが、ユリジェス様は引き続きわたしを任命してくださった。嬉しかったよ」

本当に喜んでくれているようだ。彼の言葉に甘えてもいいのだから

うか。

「それに、毎日ここへ来るのも楽しみだな。本宮へは理由もなく出入りできないからね。それに、わたしも貴重な本に目を通してみたい。もちろん、街にも遊びにいくつもりだろう？ そのときはレイチエルも一緒に連れて行くといい。二人で仲良く買い物をする姿を、わたしは陰から見ていることにしよう」

そのとき、手の甲に、ソアレのひんやりした鼻が押し付けられた。彼はフサフサした尻尾を振ると、デューイさんに体を擦り寄せて私を振り返る。何か言いたげに私を見つめると、彼はもう一度遠慮がちに尻尾を振ってみせた。

「ふふ。わかったわよ、ソアレ。これからもデューイさんに警護をお願いするから、ね」

それを言いたかったのだろう、ソアレは尻尾を激しく振り回すと、輝くような笑顔を見せた。アルバートさんとレイチエルも一緒に笑っている。

「デューイどのと、ソアレが付いているなら安心ですな」

「ええ、そうですね、アルバート様」と、レイチエルは頷く。「それから、マリイ様！ もうすぐ旅芸人の一座がエメレムへ来る予定ですよ。一度お連れしたいと思っていたので、今から楽しみですわ。わたくしの知り合いですから、そう心配することはありませんし」

昨日まであんなに狭かった私の世界が、ここへ来て一気に広がったような気がする。期待で胸がいっぱいだ。

書庫の本には、いったい何が書いてあるだろう。この世界の旅芸

人は、どんな出し物を見せてくれるのだろう。知りたいことがたくさんある。それらを早くこの目で確かめたかった。

ああ、そうだ！　まずは、ユーリの守るソルフェーニユ王国の景色を見てみたい。あの窓の向こう側に、いつもユーリは何を見ているのだろうか？

大きな掃き出し窓へ歩み寄ると、私はアルバートさんを振り返った。この窓を開けて、バルコニーへ出てもいいかと訊ねるために。

第三十九話 白亜の名城 バルコニー編（前書き）

第三十五話 『温かな腕と宝物』の冒頭、バルコニーの場面から続きます。

第三十九話 白亜の名城 バルコニー編

ここは、執務室から続くバルコニー。

突然我に返った私は、するりとユーリの腕から抜け出した。

「まったく、おまえという奴は……。気を付けないと落ちるぞ」

呆れた口調でそう言うと、彼は目を伏せ、苦笑混じりにため息をつく。

黒に近い銀色のまつ毛はうらやましいほどに長く、風に揺れる前髪の間から、意志の強そうな眉が覗いていた。陽光を浴びて威風堂々と立つユーリは、まるでギリシャ神話の石像のように美しい。

ドギマギしつつもお礼を言うと、ユーリは私の背中に手を添えて、「ここは冷える」と執務室へ戻るよう促した。

上半身をふんわりと包み込んでいるのは、彼が掛けてくれたオフホワイトのストール。ほのかに香る彼の匂いに、私は胸の高鳴りを抑えきれない。

ガラス製の扉を開けて、暖かい執務室へと足を踏み入れると、部屋の中央に立つレイチエルと目があつた。彼女の隣では、ソアレが尻尾を軽く振っている。

「あれ、アルバートさんとデューイさんは……？」

そう思つて首を傾げたとき、大きな目を三角にしたレイチエルが、突然声を張り上げた。

「もう二度と！ あんな危険なことは、もう二度とやらないでくださいませ！ マリイ様が落ちてしまうのではないかと……。わたく

し、お助けしようと思ったのに、脚が竦んでしまつて……！ もし、ユリジェス様がいらつしやらなかったら……」

すごい勢いだつたレイチエルの言葉が、徐々に力を失つていく。私の頬と対照的に、彼女のそれはすっかり色を無くしていた。また心配をかけてしまったのだろうか……。

私は慌てて駆け寄ると、立つたまま動けないレイチエルを抱きしめた。

「ごめんね、レイチエル。ソアレは知ってるんだけど、私、高い場所はわりと平気なんだよ。小さな頃から木登りで鍛えていたし、この二倍の高さからバンジージャンプしたことだって……あ、わからないか。とにかく私は大丈夫。高い場所から水に飛び込むのだから得……いたっ！」

話してる途中で、後ろから軽く頭を叩かれた。びっくりして振り返ると、丸めた書類を握ったユーリがこめかみをヒクつかせながら仁王立ちしている。

「もう高い場所は禁止だ。木登りも高飛び込みもダメだからな。覚えておけ」

- - あ、久々にオレ様王子の復活だ

私は眩しそうに目を細め、丸めた書類を持ったまま腕を組む彼を見上げた。

- - 今なら

「なにするんですか、ユーリさん」

頭に手をあてた私は、大げさにユーリを睨みつけた。

「かわい女性を叩くなんて、ユーリさん？ それでも騎士の端くれですか」

「おまえはっ……、昨日までは男だったくせに何を言うか」

「残念でした。ユーリさんがコレをくれたんですよ、もう忘れちゃったんですか？ コレのおかげで、私は今日から立派な乙女ですからね。覚えておいてくださいね」

自分の気持ちを自覚して以来、私は彼と自然に話せなくなっていた。でも。

- - 大丈夫だ。以前のように、気軽に言い合うことができてる

「やはり早まったか。先におまえの賤を済ませてから、それを渡すべきだったな」

「こんなユーリさんに賤なんかされたら、私、ぜったい不良になりますよ。人一倍繊細な心の持ち主なんですから」

ポンポンと軽口を叩き合ううちに、私たちは、いつの間にか心地良い距離感を取り戻していた。

コンコンコン

延々と続きそうな言い合いを止めたのは、執務室の厚い扉を叩くノックの音。

「くそっ、おまえといると調子が狂う。……入れっ！」

「なにもそんな大声で吼えなくても……」

とつさに耳を押さえ、ギョツと目を瞑る。そんな私のそばに、誰かが近付いてくる気配がした。

「この部屋は特に防音されているからね。大きな声でないと外にいる者には聞こえないんだよ、マリイ姫」

ひざまずいて私の手を取るのは、ゴージャスな若草色の髪をなびかせたマルセリーノさんだった。

「姫、お待ちしておりました」マルセリーノさんは、すくい上げた私の手に唇を落とす。「その長い髪が、話に聞いていたウィッグというものだね。想像以上に美しい……」

「マリイ？」と声を上げたのはエリオットくん。「君、マリイなの？　すごいや、本当に綺麗だ！」

再びキスを落とそうとしたマルセリーノさんから慌てて手を引き抜く。紅潮する頬をストールで隠し、私は周りを見渡した。

まずは、マルセリーノさんの後ろに立つエリオットくん。真っ赤な顔をして、私を指差している。口が開いたままだ。

その右横には、マイオスさん。眉間にシワを寄せて、かすかに唸っている。正直に言うと、少し怖い。

エリオットくんの左手に立っているのはケペシュさん。肩にかかるその赤い髪を、一房握りしめていた。

扉の横に控えるのは、アルバートさん。いないと思ったら、彼らを迎えに行ってたのか。

先ほどの場所にはレイチエルとソアレ。彼らは二人とも、面白い

ものを見た、とでも言いたげな顔をしている。

そして、後ろを振り向くと、そこには苦虫を噛み潰したような表情のユーリが、丸めた書類を片手に立っていた。

第四十話 白亜の名城 昼食& a m p・書庫編

カー…ン カー…ン カー…ン

マルセリーノさんに向かって何か言おうとしたユーリを、正午の鐘が遮った。なんとも言えない微妙な空気が執務室内に漂う。

「……こほん。さあ皆様、そろそろ隣室へ参りましょうか」

複雑な表情で鐘が鳴り終わるのを待っていたアルバートさんは、執務室側面の扉を開け放ち、丁寧に頭を下げた。

執務室から続く部屋、そこは明るい広間となっていた。

正面の壁に掛けてあり、扉を開けて真っ先に私の目に飛び込んできたのは、大きな大きな絵画だった。

進軍する騎馬隊の絵。それは、二人の人間が両手を広げたくらいの大きさで、騎馬隊の中央に描かれているのは、濃紺の髪をなびかせた勇猛そうな騎士だった。その堂々たる偉丈夫が祖父王だと、先を行くユーリが振り返って教えてくれる。そう言われてみれば、目元や体つきがちょっと似ているかもしれない。

広間の中央には大きなテーブルが置かれ、真っ白なテーブルクロスにナイフ、フォークなどのカトラリーがセッティングされている。くるくると忙しそうに動いていた侍女たちは、布ナプキンやトレイ、デカンタなどを手に移動し、今は、壁沿いに並んで待機していた。

お昼ごはん。夜明けから登城して働いている男たちは、お腹を空かせている頃だろう。上座にユーリが座り、私は彼の斜め横の席を勧められた。アルバートさんがイスを引いてくれたことに、一瞬

戸惑う。この習慣に慣れる日が、いつか来るのだろうか。

和気あいあいとした雰囲気の中、昼食は進んでいった。

熱々の作りたて料理が並ぶユーリの宮にはかなわないが、贅を凝らした王宮料理は品数も多く、とても美味しい。

考えてみれば、電子レンジもガスレンジもないこの世界において、湯気が立つほど温かくて美味しい料理を毎日いただけるのは凄いことだと思う。ユーリの宮が調理室と食堂が隣り合わせの造りだということに加え、そこで働くみんなの細やかな気配りのおかげだとあらためて感謝した。

給仕をする本宮の侍女たちは、ユーリの宮とは違って若い女性が揃っていた。それぞれに美しい彼女たちは、王族に仕えるためにかなりの教育を受けているはず。なのに、私の一挙手一投足にいちいち注目する侍女たちの反応が不思議だった。

- - うわ、恥ずかしい

もしかして、彼女たちが呆れるほど酷いテーブルマナーだったのか？

こちらを見ているのは侍女たちだけではなかった。

女の格好をした私がよほど珍しいのか、退治組までが目を離さないのだ。彼らが次々と話しかけてくるので、ゆっくり咀嚼している暇もない。食事を終えるころには、私はしゃべり疲れてぐったりしていた。

それでも、気心の知れた人たちとの昼食が終わるのはあつという間だった。本宮内を自由に見物する許可を得た私は、この後、まっすぐ書庫へ行くつもりでいた。

案内役にケペシュさんを付けてくれると言うが、これ以上彼らの仕事の邪魔はしたくない。丁寧に辞退したけれど、ユーリに強く言われた私は、今回だけありがたく受けることにしたのだった。

「君のその……」周りを見回して、ケペシュさんが顔を寄せる。「それは、まるで本物みたいだね。思わず自分のと見比べてしまったよ。後で外した時にでも、ちゃんと見せてくれないか？」
「もちろんです。他にも二つありますので、今度ゆつくり見てください。かぶってみてもいいですよ」

私とソアレは、ケペシュさんの案内で人々の行き交う本宮の廊下を歩いていた。

アルバートさんとレイチエルは、今ごろ別室で昼食をとっているはず。奉公する人間は、主人と共に食事をするものではないらしい。本来なら私も彼らと同じ立場だというのに、なぜこうも扱いが違うのだろうか。

文字の勉強を始めてから、私はずっと王城の書庫へ来ることを楽しみにしていた。

本宮の左翼棟にある書庫に入ると、そこには古い紙と革の匂いが漂っていた。広さのわりに音が響かないのは、毛足の長い絨毯のおかげだろう。

すぐ横のカウンターでは、書庫を管理する人らしき男性三人が、何かを書いたり本を種類別に分けたりと、忙しそうに手を動かしている。

広い書庫の壁沿いと、天井を支える三つの太い石柱の周囲には、

手を伸ばしても届かない高さまで本がギッシリと並んでいた。ところどころに梯子が立てかけてあるから、必要なときはそれを使えということなのだろう。

壁や柱に面していないスペースには島棚が並んでいて、やはり隙間なく本が詰められていた。

ケペシュさんと笑顔で挨拶を交わしているカウンター内の男たちは、この場にソアレがいても咎めることはなかった。彼らの話によると、特別な犬であるソアレの入室許可が、前日からすでに下りていたらしい。きっとユーリだ。明日から私だけで来るのだから、ソアレと一緒にいてくれるのは心強い。せめて他の閲覧者に迷惑のからないように、隅っこの方でおとなしくしていることにしよう。

私たちは、カウンターの反対側からゆっくりと足を進めていった。

最初に目についた書棚は、絵画や彫刻の制作について、芸術家に関する文献など『芸術の棚』だった。還る方法を探すためには、ソルフェーニユ神話、近隣諸国の神話などの『神話の棚』だけでなく、原始宗教、古代宗教、有史宗教、近代宗教、現代宗教などについてまとめられた『宗教の棚』にも目を通すべきだろう。嬉しいことに、そのすぐ隣には百科事典、ソルフェーニユ語や各国語の辞書などが充実している『辞典の棚』があった。私が一番心惹かれたのは、詩集、評論、各国の小説などが集められた『文学の棚』だった。

さすがは博学なケペシュさんだ。この書庫にはよく来ているらしい。どこにどんな本が置いてあるかもよく知っている。

『文学の棚』から一冊を手にとって、パラパラとページをめくってみた。しかし……、膨大な数の本に圧倒された私は、その手を止めて首を横に振った。

” 国内外で入手しうる、ありとあらゆる専門書、啓蒙書、思想

書、原書を網羅しているエメレムの書庫は、何年かかっても読み切ることは不可能である ”……” という話は誇張ではないようだ。

同じ建物内には、まだ閲覧許可の下りていない資料室もあるらしい。しかし、そこにあるのはさらに難解な資料ばかりだという。私にそれらを読み解くことができるだろうか。

ふと視線を感じて肩越しに後ろを窺うと、濃紺の髪の男性がこちらを見つめていた。

「あの方は、王太子のウォーレン様だよ」

ケペシュさんが小声で教えてくれる。

- - あの方がユーリのお兄さん

無表情で、何を考えているのか読めないところが似てないこともない。ただ、王太子の方がずっと線が細く、色白で背も低かった。

ふわふわとした濃紺の髪は、後ろで一つに結んでいるように見える。襟元にフリルをあしらった白いブラウスと、刺繍が美しい紫色のベストを重ねて着ている。スリムなパンツに、手入れの行き届いたロングブーツはシンブルな黒。腰に細身の剣を差している。その足取りは、体重を感じさせないほど優雅だった。

- - 綺麗な男の人

そんなことを考えている間にも、二人の従騎士を従えた王太子は私たちのすぐそばまで近づいてきていた。

第四十一話 ウォーレン王太子殿下

「ウォーレン殿下、こちらはユリジェス様が可愛がっていらつしやる犬のソアレと、その飼い主のマリイにございます」

「は、はじめまして、ウォーレン殿下。ユリジェス様にお仕えしておりますマリエ タカハラと申します」

慌てて私は腰を折り、なるべく丁寧にお辞儀をした。隣に立つケペシユさんも騎士の礼をとっている。その一方で、私の足元に伏せたソアレは遠慮なくウォーレン殿下を観察していた。

「……君が、マリイ？ 顔を上げてくれ。クロフォード卿もだ」

大人の男性にしては細い声。ついさっきまで本を選んでいた私は、島棚と島棚の間にケペシユさんと並んで立っていた。狭いスペースで緊張に顔を引きつらせながら、私はゆっくりと顔を上げた。

ウォーレン殿下は、私たちから少し離れた……剣の届かないくらいの位置で立ち止まっている。

ラキと同じくらいの身長だろうか、どうやら、私よりほんの少しだけ背が高いようだ。ウォーレン殿下は、艶やかに波打つ濃紺の髪を、後ろでふんわりとした一本の三つ編みにまとめ、左肩から胸元へ垂らしていた。手入れが行き届いてとても柔らかそうな髪をしている。二十五歳という実年齢よりもずっと若く見えるため、ユーリの兄ではなく、その反対にユーリを頼る弟のように見えた。

ウォーレン殿下の方も、私のことを見定めているのだらう、そのグレーの瞳で、ジッと私を観察しているのだった。

「……はじめまして、マリイ。僕はウォーレン。弟の宮に住んでい

る子って君のことだよね？」

「はい、ユーリ様にはいつもお世話になっております」

ウォーレン殿下は、私の返事を聞いた途端にハッと息をのんだ。ゆるゆると頬が上がっていくのを、わざとらしい咳払いでごまかしている。

なんだ？ 何かが変だ。殿下の何に引っかかっているのかよくわからなかったが、私は彼の優雅な所作や話す言葉に、他の人とは違うわずかな差異を見つけてしまっていた。……まあ、ね、周りが迷惑するくらいズレまくっている、異世界出身の私が言う台詞ではないのだけだ。

「こほん……、ああ、そんなにかしこまらなくていい。堅苦しいのは好きじゃないから。では、マリイ、立ち話もなんだし向こうの個室へ行こうか」

「はい。……はい？ 個室？」

「そう、個室。クロフォード卿はここで待っていてくれるかな」

ということとは、私一人で殿下とお話するのか？ ケペシュさんも驚いたように眉を上げている。

「は、ウォーレン殿下。ですが、彼女は……」

「すぐに戻るから、ね？ 君たちもクロフォード卿とここにいて」

ウォーレン殿下は従騎士の二人も置いていくらしい。私の腕を掴むと、彼らに背を向けてさっさと歩き出してしまった。

いきなり腕を引っ張られた私は慌てて身をよじり、手に持っていた本を後ろに差し出す。貴重と思われるその本を、ケペシュさんが落とさず受け取ってくれたことに、私は冷や汗を拭い、安堵の息をついていた。

何がどうなっているのかわからないまま、私はウォーレン殿下に腕を引かれて奥へ奥へと歩いていく。広い書庫の最奥部、三つ並んだ扉のうち、真ん中の個室へと案内された。当然といった様子のソアレも、部屋の中まで一緒に入ってくる。執務室と同じように防音されているのだろうか、この扉もがっしりとして重厚な造りだった。

書庫の個室というから、ネットカフェの二人用スペースくらいかと勝手に想像していたけれど、扉の向こうは四畳半ほどもある立派な小部屋となっていた。正面に深紅のカーテンがかかっている以外、他には何の飾りもない。大きな机が真ん中に一つ、それとセットになった木製のイスが四つ、それに、自分の荷物や借りた本を並べて置くための細長い棚が、部屋の側面に置いてあるだけだ。

まさにそこは、本を読んだり勉強したりするための部屋で、無駄のない、機能的な造りの小部屋となっているのだった。

座り心地の良いイスに私が腰を落ち着けるのを、待ちきれない！といったように急いで隣の席に座る殿下。彼はもう、こみ上げてくる笑いを隠そうともしなかった。膝の上に揃えていた私の両手をすくい上げ、胸の前でギュッと握り締める。殿下の頬は紅潮し、グレーの瞳はキラキラと輝いていた。

「君がそうなのねっ！」

「はっ？」

「マリイ、あなたがユーリの想い人なんだろう？ ああ、嬉しい！」

あの子、今まで本当の意味で女を寄せ付けなかったから、僕も心配していたのよっ」

「……………」

「……………」

ソアレはピキツと固まり、私は自分の耳を疑った。もしかしたら、ひどい聞き間違いをしているのかも……？

「ちよつと！ あなた、聞いてるの？」

ぷうつと頬を膨らませ、じれったそうに叫ぶのは、紛れもなくウォーレン王太子殿下、その人に違いない。……のか？

なんて答えていいのかわからなくなった私は、質問の内容もよく聞かないままコクコクと頷いてしまう。

「んまああつ、やっぱりそうだったのね！ あんなに酷い目にあつたものだから、僕はともかく、あの子にも無理なのではないかと、僕は、本当に……、ごめんなさいね、マリイ、とても嬉しくて……」
「あつ、あつ、す、すみません。私、ちゃんと質問を聞いてなくて……、もしかしたら殿下にぬか喜びをさせてしまっているのかもしれません」

「いいえ、僕の目に間違いはありませんわ！」殿下は私をキツと睨み付ける。「だってユーリったら……………っ！ あら、まあ……………」

自分が女言葉を使っていることに、殿下はやつと気付いたようだ。眉尻を下げた彼は徐々に顔を俯かせ、放っておいたら机の下までしゅるしゅると萎んでいくように見えた。

「ええと、ウォーレン殿下？」気の毒に思った私は、助け舟を出す

ことにした。「で、ん、か！ 大丈夫ですよ、私、全然気にしてませんから。それに、殿下が秘密にしたいとおっしゃるなら、私、誰にも言いませんから。ユーリさんにもです。ウォーレン殿下、決して口外しないとお約束します」

「……………」

「ほら、ここは防音されているのでしょうか？ 私が何も言わなければ誰にもバレませんって」

「……僕が君を殺して、その口を封じたらどうするのさ」

ぷつと頬を膨らませた殿下は、拗ねたようにつぶやいた。うおい、なんて物騒なことを言うんですか！ 「口封じ？」と焦った私に、殿下は口の端を上げて見せた。

「冗談よ、マリイ。僕がこんなだつてことは、城の人間なら誰でも知ってるからね、今さらマリイの口を封じても意味ないもの」

その微笑みが少し寂しそうに見えるのは、私の見間違いではないはず。ウォーレン殿下は、男性の身体の中に繊細な女性の心を持っているのかもしれない。性同一性障害。元の世界で私のメイクを担当してくれた、あの彼と同じだ……。

はあ……と、深いため息が聞こえてきて、私は意識を目の前の殿下に戻した。

殿下は、その細い両腕を頭の後ろで組み、背もたれに寄りかかっている。長い両脚を前に投げ出し、その踵が板張りの床をトントンと叩いた。イスに浅く座っている殿下は、もう少しでずり落ちそう。顎を上げて宙を見つめている。そんな姿勢のまま、彼はポツリとつぶやいた。

「不甲斐ない王太子なのよ、僕は。みんな知ってるはずなのに、あ

なたはまだ誰からも聞いてなかったのね」

「……は、い。王家のことは、何も存じ上げておりませんでした」
「だーから！」勢いをつけて起き上がると、目をつり上げた殿下は私に向かって言った。「もっと普通の話し方でいいのよ。堅苦しいのは嫌いだって言ったでしょう？」

殿下はふつと息をついて、今度は綺麗に微笑んだ。

「僕は平気よ。投げやりになった時期もあったけど、目途が付いたら第一線から退くつもり。そうしたら、あの子も少しはやりやすくなるでしょうね」

「あの子、ですか？」

「そう、ユーリよ。王太子だなんて肩書きは、僕には重すぎたの。難しいことは全部あの子に任せて、僕は、中途半端なままずっと逃げていたんだわ」

殿下がふと視線を落とすと、その細い膝の上にソアレの右前肢が乗せられていた。はっはつと口を開けほんの少し舌を出している。きつと、彼なりに殿下を励ましているのだろう。

「ほんと可愛いわね。あの子が大切に保護しているはずだわ。なぜ三ヶ月もの間あなたの存在を公にしてこなかったのか、僕にもなんとなく理解できた。……ねえ、マリイ。これからあなた、大変になるかもしれないけど、僕で良ければいつでも相談に乗るからね、何でも言ってちょうだい」

「は、はい。ウォーレン殿下、ありがとうございます」

「ソアレだっけ？ この子もとっても可愛いわ。慰めてくれてありがとね、ソアレ」

殿下の膝に右肢を乗せていたソアレは、もう一方の前肢を揃えて

乗せると、ぐつと身を乗り出し殿下の頬をペロペロ舐めた。

「ふふふっ、何するのよう」

くすぐったそうに笑うと、ソアレの胸を押し返す。キチンとお座りしたソアレの耳の後ろを搔いてやり、殿下は勢いよく立ち上がった。

「またいつかお話ししようね、マリイ！ これからはユーリの執務室で顔を合わせるようになると思うわ。僕が出来ることは限られているけれど、雑用とか、僕なりにあの子のお仕事を手伝ってるからね」

席を立つたウォーレン殿下に続き、慌てて私も立ち上がる。

「はい、ありがとうございます。あの、殿下？」 私はドアを開ける殿下の背中に声をかけた。「ユーリさんから登城の許可をいただいたので、私、明日から書庫に通うつもりなんですよ。ですから殿下、お仕事の合間にも呼んでくださいね、すぐに伺いますから」

「あら、じゃあ明日も会えるのね？ 嬉しいわ！」

殿下は片足を軸に勢いよく振り向くと、パチンと両手を合わせ、はしゃいだ声を上げた。傷のない白い手。綺麗に切りそろえられた爪……。

屈託なく笑う殿下の両手を、私は、自分のそれでふんわりと包み込んだ。

「明日は、女の子同士でしか出来ない話でもしませんか？」

殿下はハッと息をのむ。限界まで見開いた目。そのグレーの瞳が、

みるみるうちに潤んでいくのを私は見守っていた。

- - ああ、やっぱりそうだったんだ……。

ウォーレン殿下は女の子だ。身体の性は男でも、心の性は女性そのもの。

芸能界という比較的開かれた職場でさえ、メイクアップアーティストのトシオちゃんは苦しんでいた。身体の性別とジェンダーアイデンティティとの不一致に。

ましてやウォーレン殿下は責任ある一国の王太子。周囲の殿下を見る目は相当に厳しいはず。自分の心が本当は女であることを自覚して以来、殿下はどれほどの苦悩や葛藤と闘ってきたことだろう。

性同一性障害を持つ人は、精神的な支えとなる人物を誰よりも切望しているのかもしれない。その人の本当の姿を理解し包み込んでくれる、そんな人物を。

- - 殿下が……、彼女が既にそのような人を得ていればいいのに

無言で涙をこぼし続ける彼女の姿に、私の胸はジクジクと痛んだ。

キィィ……

扉が半開きなことに気付かなかったなんて！　そこに誰かいると知って私は焦った。

「いったい何やってるんですか、兄上？」

ぶつきらばうに声をかけてきたのは、小学校高学年くらいの少年だった。その斜め後ろには、少年と瓜二つの丸みのある女性が立っていた。彼女はきつと、この少年のお母さん。

ウォーレン殿下を兄上と呼ぶということは、彼もソルフエーニユの王子様なのだろう。そして、気まずそうな様子で立ち尽くしているこの女性は、国王の側室様が王妃様……。

登城してからさほど時間が経ってないというのに、こうして次から次へと王族に出くわしてしまうとは、私って本当にツイてない……。

そのうち王様までが乱入して来るんじゃないかと観念した私。とりあえずは、小さな王子様とそのお母様らしき女性に向かって、深々とお辞儀をするのだった。

第四十二話　王妃エドウィナと第三王子リシャール

後ろから突然声をかけられて、ウォーレン殿下は飛び上がるほど驚いたようだ。それでも彼……、いや彼女は、振り向く前に濡れた目元を両手で拭うくらいの余裕はあった。

「リシャール？　エドウィナ王妃まで！　え、ええと、この子はマリイといって、ユーリの、例の……」

「兄上？　なに言ってるんです。……泣いてたんですか？」

ウォーレン殿下の頬に残った涙の跡に気付いたらしい。彼女を見上げていたリシャール王子は、次の瞬間くつきりとした二重の目を眇めると、殿下の後ろに立つ私をギツと睨みつけた。

「……おまえか！」

「なんでもないのよ、リシャール。マリイは悪くないわ。僕はむしろ嬉し……」

「なんでもない？　兄上は男のくせに、理由もなくメソメソしてるんですか！」

リシャール王子が幼いながらも鋭い声を上げたそのとき、エドウィナ王妃と呼ばれた温和そうな女性が割って入った。

「およしなさい、リシャール」

「だけど母上……」

「あなたたち」彼女は扉の向こうにいる人々に言った。「少しの間、外で待っていてくれるかしら」

チラツとしか見えなかったけど、そこには彼らのお付きの人々と

ウォーレン殿下の従騎士二人に加えて、ケペシュさんの心配そうな顔もあつたような気がする。

個室の扉をパタンと閉めて振り向いた王妃様は、申し訳なさそうに微笑んだ。

薄紅色のドレスの上には、たつぷりとしたドレープが揺れている。豊かな胸元を飾る白いシフォンのフリルは、まるで蝶の羽のように薄く繊細だった。

二十代後半から三十代前半くらいだろうか。ふっくらとした白い肌に印象深いターコイズブルーの瞳が映えている。複雑な形に結い上げた髪は艶やかな白金色。

隣に立つ小さな王子様も、彼女と同じ瞳と髪を持っている。ただ違うのは、唇だった。体型と同じくぼつてりと肉感的な唇を持つ王妃に比べて、リシャール王子のそれは薄く引き締まっており、生来の意志の強さを表しているようだった。

「あなたがマリイ、ですか？」

その身分にはずいぶんと控えめなエドウィナ王妃。確信が持てないからか、遠慮がちに質問してきた。

「はい、王妃様。このソアレと共に、ユリジェス様にお仕えしております、マリエ　タカハラと申します」

なぜこんな場所に王妃様と王子様がお揃いで登場しているのか、内心首を捻りながらも、私はもう一度お辞儀をするのだった。

「そう、あなたが……」王妃様はそうつぶやくと、私を閲覧用のイスに座らせた。「騒がせてしまってごめんなさいね。あなたがこちらへ来ていると耳にしたので、遠くから顔を見たいと思って来てしまいましたの」

「オレは、別に、この犬が見たかっただけだ」

- ウォーレン殿下といい、王妃様といい、いったいなんだって私なんか会いたがるの？

おそろおそろソアレに手を伸ばす王子様を見ながら、私は単刀直入に訊いてみようと思った。彼らが席につくのを待って、その疑問を口にする。

「……それは、もしかして、私がユーリ様の宮でお世話になっているからでしょうか？」

「ええ、そうよ。あの子が女性を側に置くなんて、今までなかったことだもの」

ほがらかにそう答えたのは、私の隣に座ったウォーレン殿下。やっぱり誤解していたのか。

「あの、殿下。違うんですよ。それは全くの誤解なんです」私は両手を前に突き出し、首を左右に振った。「ユーリさんにとって、私は少年でしたから」

私の言葉にリシャル王子が目を剥く。

「こいつも兄上と同類か……」

「うるさいわね！」

彼のつぶやきに、素早く殿下が反応した。それどころではない私は、必死に言葉を探す。

「ユーリさんに拾われた時、連れて来られた野営地には女性が一人もいなかったんです。たまたまユーリさん達が私を少年だと勘違いしてくれたので、そのままにいる方が安全だと判断しました。ずっと男として彼らと接していたので、今さら『実は女でした』とは恥ずかしくて言えなくなってしまうって、エメレムに来てからもその誤解を解けずにいたんです。若い女性禁制のユーリさんの宮で、今日まで私が生活することを許してもらっていたのは、それが理由なんですよ」

彼らに説明しながらも、ふと不安になる。

「-もしかして、変な噂が広まってる？ 私が女性だと周りにまで認識されてしまったけれど、これから先も変わらずユーリさんの宮に置いてもらえるのか不安だ。はつきりダメとは言われてない。だけど、居ていいとも言われてないような気がする。いや、そういうえば、これからは外出をしてもいいって言ってくれたし、デューイさんが護衛してくれるという話だし……」

ああでもないこうでもない、と考え込んでいると、隣の殿下に代わって、私の正面に座るエドウィナ王妃が身を乗り出した。

「マリイはそんな風に思っていたのですね」

王妃はそう言って両手を伸ばし、机の上に置いていた私の右手を包み込んだ。

「でも、ユリジェス王子はとくに知っていましたよ。あなたが女の子だということを。それはもう聞いているのでしょぅ？」

「はい、私を保護してすぐに気付いたと。でも、なぜそのことを…」

…」

「……わたくしが知っているか、ですか？」王妃様が、私の聞いたかったことを先回りした。「ユリジェス王子とは常に連絡を取り合っていますからね。あなたのことも、……いつだったかしら？ 側近から報告を受ける彼の雰囲気、一瞬にして柔らかくなったことがあったのです。不思議に思っただけに問い詰めると、彼は『宮におもしろい小姓がいる』と、白状したのですよ。女のカンと言いますか、ユリジェス王子の話す様子から、その小姓が彼の想い人だとすぐにわかりましたわ。」

それ以来、なんとかして彼の本音を引き出そうとはしてるのですが……。彼は仮面をかぶるのが上手ですね。何を考えているのか本当にわからない……」

控えめながらも表情豊かに話すエドウィナ王妃に見とれていた私は、大事なところをすっかり流すところだった。

「おっ、王妃様？ ユーリさんの話を聞いただけで、その小姓が私のことだと見破った女のカンには脱帽ですが、ユーリさんは、私のことをなんとも思っていないですよ。第一、あまり顔を合わす機会もありませんし……」そこまで言っただけで、唐突に彼の温かな腕を思い出した私。「……っ、と、とにかく、ユーリさんは潔白ですからっ」

急激に暴れ始めた心臓を押さえつけるように、胸元に手を置くと、私は情けない顔で王妃様を見上げた。

「あら、彼はあなたに ” ユーリ ” と呼ばせているというのに……。そうね、ユリジェス王子は潔白、ということにしておきましょう」

王妃の台詞に、にこやかな表情で「今はね」と付け足すウォレン殿下。

私の斜め向かいに座るリシャル王子は、相変わらずこちらを睨み付けてくる。最初の誤解が解ければ軟化するかと思ったが、それどころかだんだんと機嫌が悪くなっていくようだった。

私は一方的な敵意に居心地が悪くなり、今度は彼を真正面から見つめてみた。よほど意外だったのか、一瞬目を見開いたリシャル王子は、片方の眉を器用に上げると薄い唇をはっきりと動かした。声に出さないそれは、私にはこう言ったように見えた。

「お前なんか、認めない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0713n/>

ガラスの靴を脱ぎ捨てて

2010年10月28日22時38分発行